

427  
8  
444

狂書  
午睡之夢

版權所有

志山盛世戲著



標堂櫻食

091324-000-8

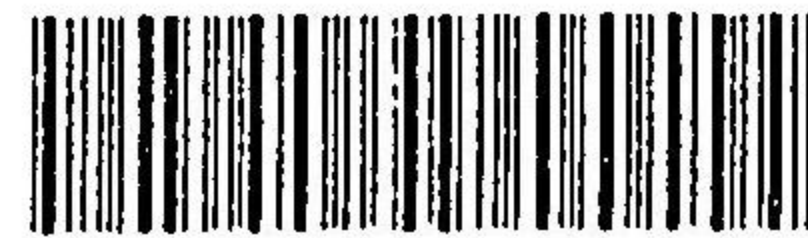
特11-67

午睡之夢

南柯亭 夢筆 / 著

M20

DBN-2202





No 4595

軍書 午睡之夢自序

曲亭主人ハ犬傳を編次し其第八輯の自序ハシガキニ記スル

して言へることあり曰く世人の大半ハ常を厭いと

ふて怪を喜ぶ是の故ニ徒いたづらニ鬼を聽くことを好この

めども鬼を觀ることを樂たのしまむ昔者葉公畫龍を

好このんで真龍を懼る當時畫龍と呈ていする者ハ賞ほめら

る致いたさる者ハ黜おろせらる余も亦婦幼なつかの爲め

真龍を呈ていすること久し尚な不幸さき母真龍を致いたす

此れ拙編わづかの今も行なる、所以ゆゑ儼まし

軍書

曲亭主人



余と愚を同くする者ありて思ひ此に及む、乃ち  
畫龍を觀るおと真龍を觀るが如く其れ油然  
として感ずる所ありて肅然として懼る、所を  
知らんと夢筆子も亦聊か曲亭主人と其愚を同  
くする所乃ものありて同狂人れ爲め、畫龍を  
呈せんとま爰ふ戦争れものたるや世人の大半  
の真戰を忌嫌ふこと蛇蝎も亦啻おらむし、兎  
角近隣に戰鬪なるれと祈らぬ者ぞなし然るふ  
其軍談戰話と聞くことを好めるは三食よりも

甚だしく爲め、漢楚軍談、三國誌の貸本屋乃土  
藏を作り甲越軍談、太閤記の軍談師れ米櫃とな  
るに至る真を嫌ふて談を好む世間の人情豈に  
亦奇ならむや西諺に曰く、戦争の談をとも行く  
こと勿きと東西の人情恰も符節を合はするが  
如し凡そ人情の實際之を見るの恐怖しきもの  
程文章に見談話に聞くことを好むの傾きある  
もの、如し社會に恐怖しきもの戦争より太甚  
しきにあはし是に於て乎先拈稱は凡そ讀書の樂



の英雄豪傑の言行即ち軍談戰記を讀む過ぐ  
るものありと試み今小説俗話類の如く人情再  
關係たる書類を讀む時其當座の何となく我  
が胸膈を閉ぢ精神を壓するの心地よく如何  
にも胸苦したることおきども軍談戰記を取て之  
を見る時の胸膈を開き精神忽ち爽快とあるべ  
し故に常に心を人情話の書類に歩をる人の何  
時となく度量狭小あるべく常に軍談戰記に眼  
を晒すの人の自然度量潤大なるべし嬉々軍談

戰記の功益豈に亦廣大あらむや軍談戰記の面  
白く樂き斯の如くにして且つ其讀者の胸膈を  
開くの功益ある此の如くなれば世間夢筆子と  
愚を同じし狂を一にする者少なからむ此等の  
軍書狂夫等の孰れも世間に行はるゝ軍書の大  
概讀了りて何が面白き軍書になきかと貸木  
屋を尋るゝ何時もお定りの吳越軍談、太平記等  
よて既に數回復讀したることなれば最早見る  
よ及む何んぞ其他珍奇しきものにあきり



と問ふふ曰く兩國士曰く烈戦功記這の少しく  
 珍奇一死に似たれども亦己に兩三回も復讀し  
 たれば是れも亦同トく見るよ及ばを是れより  
 の席亭の軍談の如何ふ少しの珍奇しき軍談戦  
 話もあらんかと思ひかきみて耳を傾くる程に  
 蘆州やら琴凌やら修羅場物語の最中あれば何  
 軍談ならんかと思ひかきみて耳を傾くる程に  
 軍談師の白梅亭の二階ふ聲高々講ずるやう  
 文勝の兵を引て趙雲を追龍長坂橋に近付て向

ふを見れば張飛只一騎橋の上よ馬を立丈ハの  
 矛を横とへ甲を脱て鞍よ懸け頭の鬚倒母上り  
 て獅子の怒毛の如く眼の逆ふ裂けく光り百鍊  
 の鏡に朱を洒ぎ怒まる鬼鬚左右ふ分れて惡鬼  
 羅刹も是きよの争で及ぶべき木音扇聲と聞こ  
 ゆるよぞ呆然々々是れも亦例の三國誌か聽く  
 よ及ばを此の上の最早見るものなく聞くもの  
 たる唯豊太閤拿破崙を同時に單出せしめて其  
 武を戦はしむるか孔明真田を一時に會せしめ



て其智を争ひしむるか左なくを關羽、加藤をし  
て一場に其勇を闘はしむるの一戦記あるのそ  
と或の口よ言ふものあるべく左らむも心よ此  
の空想を起せらん誰と誰との孰れう強くして  
何れか弱きと自ら心よ問ひ心よ答へ心戦を試  
むるの軍書狂夫社會の人情母して就中夢筆子  
は其狂情最も甚だしく終ふ其戯稿を起し見ん  
と思ふ母至りて其種々の因果を攷索あるよ悉  
く故事よ倣へば陳腐の役稿敢く見るよ足らむ

左りとして皆古戦を離るれむ無縁乃漫稿亦敢て  
讀むに足らむと考へ一え獲ることあく茫乎と  
して心の適く所を知らむ譬へば扁舟を泛べて  
以て滄海を濟るが如し既よして故事母倣ふが  
如く母して倣ひを古戦と離る、が如くよして  
離れむ即ち倣ふと離るとの間よ行かむ或の可  
ならんかど其意を得るよ及んで糊々然として  
獨り自ら樂み人の未だ見ざる所を視人乃未だ  
知らざる所を識りて謀計策略敢て載せざるか



く奮戦激闘敢て寫さゝるな一排纂稍々久くし  
て卒一冊を成す猶不彼の船人が漂泊て數千里  
一海島ふ至て不死の人一邂逅ひ仙と學び貨を  
得て歸り來て之を人間一告るがごとしと曲亭  
主人氣取て述べ來るに鳴濤ふれど聊か斯の如  
きものありしなり本書を午睡の夢に擬へしに  
固より寓言母して敢て真に其夢見しにあら  
ねども之を綴るの際這回の役は如何なる戦況  
よなして可ならんうと熟思百考終一獲る所な

くして枕に就くの夜真一夢見ること前後數回  
虚夢物語を戲著さんとして真夢は見るに至るに  
烈鹿夢一似る所ありて一奇と謂ふべし蘇長公  
曰く船を以て船を撐せば船行かむ鼓を以て鼓  
を打てば鼓鳴らすと去れば此の夢物語を以て  
夢母隣る人の睡眠を醒すこと能はがるか否  
な兵事は表裏極りなり孫臋の減電増兵の謀計  
以て敵軍と破り虞詡孔明の之を一轉し増電退  
軍の策略以て安々と引退さぬ電の一あり以て



進むの器とあし又退くの具とあす其要唯敵れ  
 心を測る加減あるの之本著の軍書あり夢物  
 語を以て夢に隣れる人の睡眠を醒まことなし  
 と謂ふべうらを聊う夢の筆揮ふて韓信任らぬ  
 自序を曹操、賈詡の如し

明治十有九年八月某日鐘の上野か淺草か風  
 がもてくる遠寺の鐘聲を半起半睡の耳に聞  
 きつ、東臺の南街螢雪堂戲墨室南窓の下に  
 南柯亭夢筆識しつ

軍書 午睡之夢

凡例

一本書の日本、支那、西洋、三國古今の英雄豪傑が  
 一時に輩出して戦争の状と聊か漢末の三國  
 誌に擬へて夢物語に戲著したるものなれむ  
 若し之を充分に書んとなさば數萬ページの  
 紙數も尚ほ足れりとせむ今夢筆子が差當り  
 胸中を貯へたる腹稿を記さんとまゐるも亦數  
 千ページを要すべしと雖ども當初書肆某主



人と約して本稿に着手する時既に豫定の紙  
數あれば夢筆子敢て紙數を伸るを得む始終  
前後を顧み苦心揮筆漸く數百ページの間  
首尾を収めて其局を結びしことなれば趣向  
の不充分なるに固より世間に知られざる英  
雄豪傑の名ふして本書の上ふ顯れざる者亦  
少なしとせざるべし故に讀者或は某氏の蓋  
世の英雄なるに今本書其人なし誰氏の絶世  
の豪傑あるに亦其者なし是れ本書乃欠典の

りと云ふ者何らむと雖ども若し各讀者の心  
を満足せしめんとて大概漏なく其姓名を書  
んとせば數百ページの皆其姓名を以て填め  
餘の文字の一言半句をも記すこと能はざる  
の恐れあれば己ことを得を多く之を略し  
ぬ讀者若し某氏などの非常の英雄あるに本  
書ふありとせば此處等の役はあらんと思ふ  
所は其人ありとして見るも亦敢て妨げあし  
但し近世の人特目下現存の武人の東西を



問のを憚りあると以て夢筆子故意大概之を略しぬ

一本書は固と幻夢として古今列國の猛將謀夫雄傑の士一時に會するの組織なれば其時の何時なりと確に定をむと雖ども夢筆子の心の拿破崙が常に宇内を併呑んと欲するの志を懐きたるに實史ふては其亞細亞に進入の第一着手たる彼の聖約大爾城を遂に拔くと叶はむして歐洲に歸りしを由縁も善く拿

破崙の舊友希里波の該城に居るを夢ふ計策の種子とし奇計と運らしと遂に該城を拔きたりとし其氣を乘りて歐洲古今の英雄豪傑を徵集して亞細亞に亂入ものを聊か主ふしぬるも乃ちあれば多くの拿破崙の時に従へり但し兵器の總て今日まで世にありしものを用う  
一同地ふして古今其名を異にせるもの往々ありと雖ども其處に出づる者古今の人あれば



其勢いさぎひ母より或あるに古名ふるなを書かくものあり或あるに  
 新稱しんせうを記ます者ありて一定ならむ之を要まする  
 一 古代の人の出づる紙面しめんより古名ふるなは用ゐる近  
 世の人の出づる紙面しめんより新稱しんせうを用うるの勢いきほ  
 ひあり但し支那しやいなを一字いつじより約記やくめいすときの時ときの  
 古今を問とひむ皆漢かんの字を用う是れ漢かんの字の  
 殆ほとんど支那しやいな古今の通稱つうしやうとあるもの、如ごときも  
 のあればあり

一 本書このほん虚うそなるかと問へば虚うそならむ實まことなるかと

問へば亦實まことならむ虚うそ入りて實まことは出實まことは  
 出ては復た虚うそ入り始終虚々實々或あるに古戦ふるたたかひ  
 一 倣まねひ或あるに人々の質氣しつぎふ従ふて職著しやくちやくしたる  
 ものあれば其故事そのことを暗くらむる者之を見れむ其  
 味あじひもあらんと雖ども之を知らぬ者之を見  
 るとき其味あじひなうるべし  
 一 左傍ひだりのかたはら雙柱ふたはしら即ちすなはち || 伏施ふせ一右側みぎがわより片假名かたかなを加くり  
 たるもの唐音たういんを以て充あてたる地名ちめいよりして  
 同じく左ひだりの傍單線かたはらひと即ちすなはち | を施おし右側みぎがわより片假



名を加<sup>か</sup>りたるものハ唐音<sup>たういん</sup>状<sup>じやう</sup>以て売<sup>あ</sup>てたる人  
 名あり但し歐軍<sup>イフロッツバ</sup>とあるハ婦幼<sup>をんがう</sup>等の如き洋語<sup>やうご</sup>  
 唐音<sup>たういん</sup>を解<sup>と</sup>せざる者の爲め其本然<sup>ほんぜん</sup>の全訓<sup>ぜんくん</sup>を施<sup>ほ</sup>  
 したるものな<sup>ら</sup>ず然れども是れ其煩<sup>わづら</sup>え<sup>い</sup>さふ  
 過<sup>あ</sup>ぐるものあれば之を讀むに<sup>い</sup>宜<sup>よ</sup>しく歐軍<sup>いぐん</sup>  
 と訓<sup>く</sup>むべし尤も歐軍<sup>イフロッツバ</sup>と讀むも亦敢て妨<sup>ま</sup>げな  
 しと雖ども活版<sup>くわつばん</sup>の都合<sup>くわい</sup>ふて歐の傍訓<sup>かひがら</sup>の歐軍<sup>いぐん</sup>  
 の二字<sup>ふたご</sup>よりけ<sup>い</sup>歐軍<sup>イフロッツバ</sup>とあるを唯だイフロッツバ  
 とのみ讀<sup>よ</sup>みてぐんの訓<sup>く</sup>を略<sup>りやく</sup>するハ大<sup>おほ</sup>く不可<sup>ふ</sup>

かり讀者<sup>よみ</sup>宜<sup>よ</sup>しく其心得<sup>こころえ</sup>ありたし其他<sup>ほか</sup>是れふ  
 類<sup>るい</sup>まるもの皆<sup>みな</sup>を然りと知るべし

一余新聞社<sup>いんぶん</sup>と退<sup>ひ</sup>きて著作<sup>しやく</sup>の職<sup>しやく</sup>に移<sup>うつ</sup>り之を専<sup>せん</sup>門<sup>もん</sup>  
 の業<sup>わざ</sup>とまること既に數年<sup>すうねん</sup>此間<sup>こゝ</sup>余が手<sup>て</sup>母<sup>は</sup>成<sup>な</sup>る  
 著書<sup>しやく</sup>大小<sup>たうせう</sup>合<sup>あ</sup>して百有餘種<sup>ひやくいうじゆしゆ</sup>あれど是を以て餠<sup>びやう</sup>  
 口<sup>くち</sup>の具<sup>ぐ</sup>となせし母より或ハ依<sup>よ</sup>頼<sup>ら</sup>者<sup>しや</sup>の情<sup>じやう</sup>母<sup>は</sup>制<sup>せい</sup>  
 せられ或ハ世間<sup>よ</sup>の人氣<sup>にんき</sup>即ち讀者<sup>よみ</sup>の好<sup>この</sup>と母<sup>は</sup>動<sup>どう</sup>  
 うされ常<sup>とこ</sup>ふ我が本然<sup>ほんぜん</sup>の意想<sup>いじやう</sup>を記<sup>し</sup>すこと能<sup>よ</sup>ハ  
 む其稍<sup>しやう</sup>々<sup>々</sup>我が意見<sup>いけん</sup>奇想<sup>きしやう</sup>を記<sup>し</sup>するものハ今日<sup>こんにち</sup>



に至て唯ただ僅わずかに黄金世界新説と本書の二種  
 過ぎぬ故に欣よろこ喜びの餘り聊いさ々さ此事凡例の一則  
 一附つくるよなん然しかども引用書の全ぜんらざ  
 ると地圖の乏せしきが爲め往々たう意いに任ませざる  
 所あり唯だ是れのみ甚だ遺憾こころのこぼなり

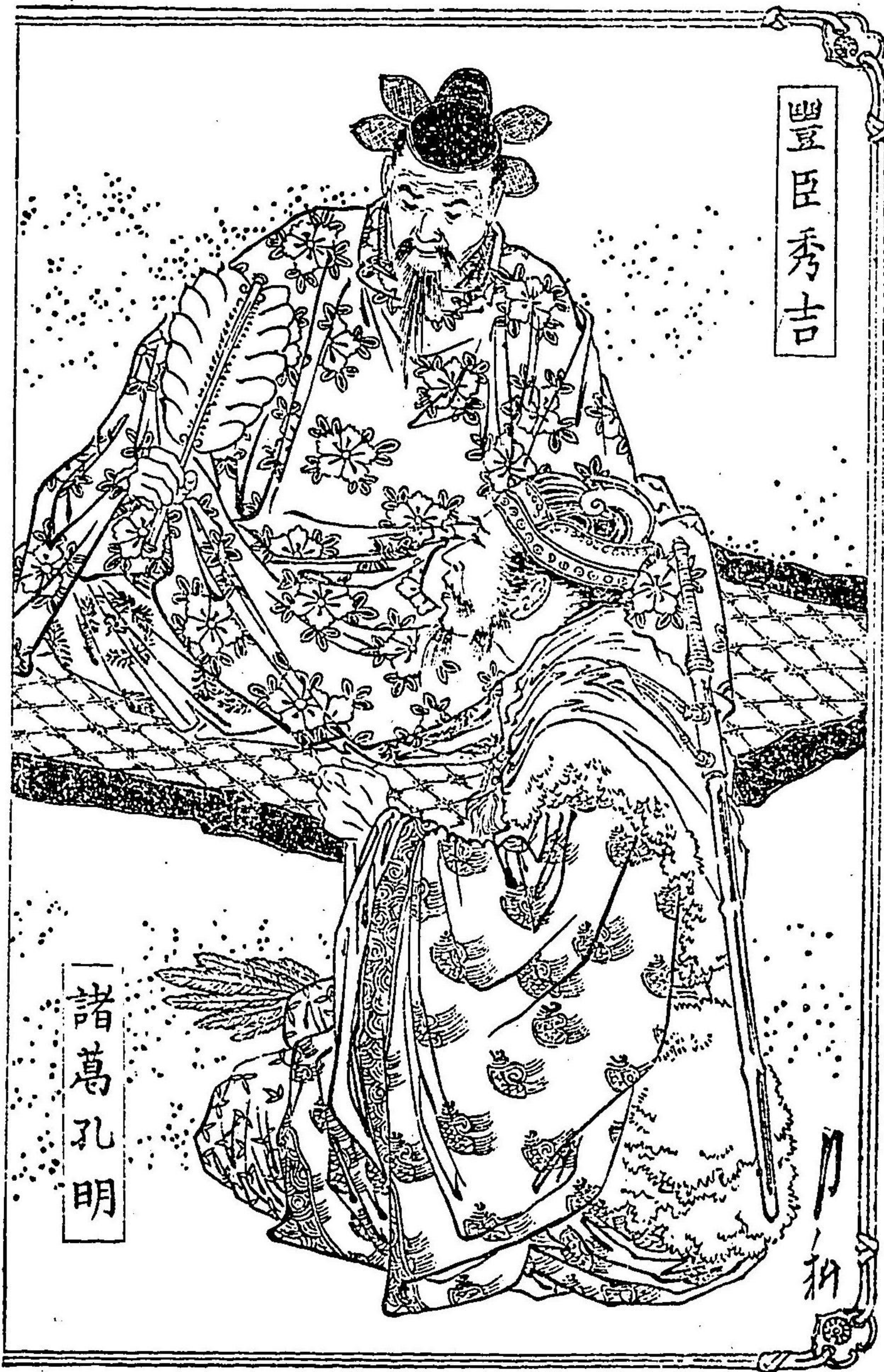
軍書狂  
 夫午睡  
 之夢



科



豐臣秀吉



廿四

諸葛孔明

月杓

拿破侖第一世



廿五



東半球の戦地圖



軍書午睡之夢目錄

○第一回

常の想像終に南柯の夢と爲る  
山の眺望終に戦争の状を見る

卅五丁

○第二回

拿破崙五洲併呑の壮志を懐く  
拿破崙聖約大爾の堅城を抜く

四十二丁

○第三回

拿破崙歐洲古今の英雄を徴集る  
亞歷山大、愷撒等の豪傑を拒む

五十八丁

○第四回

米國局外中立を布告す  
拿破崙、亞細亞を亂入す

六十五丁



○第五回

第一戰印度の大象、亞歷山大を破る  
第二戰亞歷山大、印度の大象と敗る

七十四丁

○第六回

亞歷山大、喜馬拉山を見て南方迂廻を欲す  
拿破崙力喜馬拉山を抜き氣亞細亞を蓋ふ

八十一丁

○第七回

急を聞て支那古今の群帥を招喚ぶ  
天下三分を定めて孔明黄泉を出づ

八十九丁

○第八回

北京の集會防戦の軍議  
支那海軍福州に進發を

九十七丁

○第九回

支那陸軍の大衆西境に進發す  
支那の使者説客北京を出發を

百五丁

○第十回

蘇秦張儀雄辯を振て徳川を説く  
徳川將軍利害決せむ外客を斥く

百十一丁

○第十一回

日本古今の將士江戸に馳集ふ  
援兵出陣の利害得失を軍議を

百十二丁

○第十二回

孫臏、蔡澤蒙古に至て援兵を乞ふ  
田單、范雎南蠻に行て出兵を請ふ

百廿八丁

○第十三回

火虎火蛇を放ちて田單歐軍を破る  
火虎火蛇は追返して愷撤敵を敗る

百卅四丁

○第十四回

歐洲の海軍兵、越の近海に到着す  
八百八人の謀計周瑜却て破らる

百四十五丁



○第十五回

歐軍敵を海上に迎ふ  
漢兵敵を陸地に誘ふ

百五十三丁

○第十六回

第一戦孔明、拿破崙を破る  
第二戦拿破崙、孔明を破る

百五十六丁

○第十七回

項羽拔山、蓋世の勇を頼て夜撃を企つ  
高祖、陳涉、項羽の計に従て大敗を取る

百六十七丁

○第十八回

漢兵敗軍祈山に楯籠る  
張巡奇計祈山を遁去る

百七十四丁

○第十九回

拿破崙、歐洲の變報を聞いて引返す  
曹操、拿破崙の退軍を見て追撃を

百八十六丁

○第二十回

成吉思汗、帖木兒、歐洲の虚ふ亂入を  
孫贖増兵、滅電拿破崙を欺て擒獲を

百九十四丁

○第二十一回

漢兵勝利の銳鋒を日本に向く  
日本諸將の軍議は奇人顯ゆる

二百四丁

○第二十二回

日本百虎百天狗の猛者を定む  
日本數百萬の軍勢韓國に渡る

二百十三丁

○第二十三回

和、漢兩軍の將士韓國に會戦す  
千歳の一遇孔明、真田智を争ふ

二百廿二丁

○第二十四回

盛政、張飛の互罵兵氣を勵ます  
和、漢兩軍の百虎其勇を闘はる

二百三十丁



○第廿五回

蒙古百萬の舟師九州海に沈没す  
孔明、真田兩將嚴令を士卒に傳ふ

二百四十丁

○第廿六回

和、漢兩軍大に順安近傍に戦ふ  
日本諸將再び韓國釜山に渡る

二百四十八丁

○第廿七回

漢、胡、韓三國の大軍蔚山を取圍む  
真田、加藤屢々奇計奇手を撃惱す

二百五十五丁

○第廿八回

豊臣秀吉疾に罹りて終に行營に薨す  
拿破崙臺灣を脱れて再び日本に起る

二百六十四丁

○第廿九回

第一戦拿破崙、徳川楠と破る  
第二戦徳川楠、拿破崙を敗る

二百七十二丁

○第三十回

軍書狂夫幼夢醒めて茫然自失  
古今列國の夢戰を述歴を三十回

二百七十九丁

軍書 狂夫 午睡之夢 目錄 終



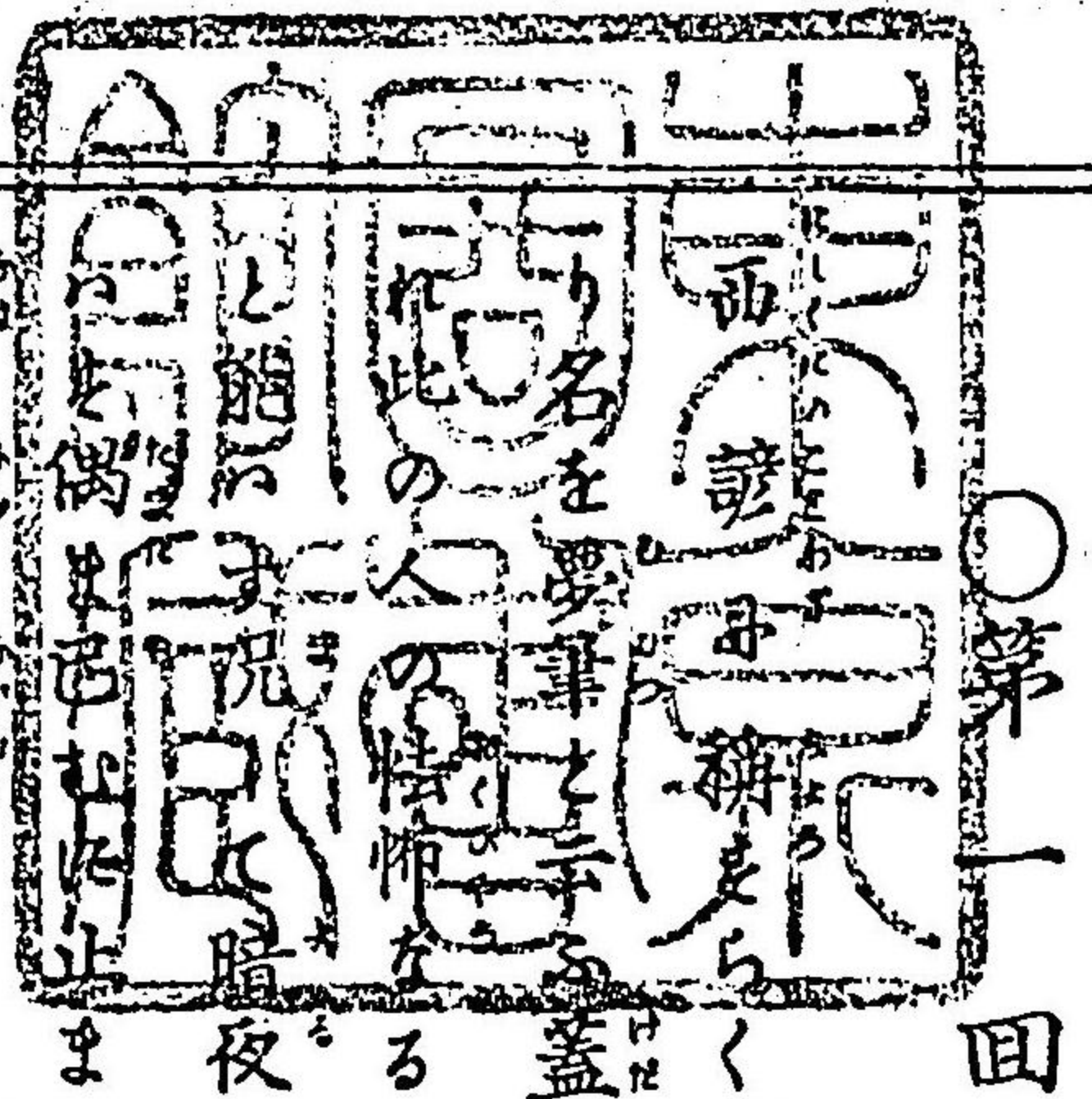
○再版小引  
 世間軍書好夫の多き故もや將た本作の珍奇なる  
 の故ふや當初出版發兌の日より未だ期月を出づ  
 るや出でざるも早や既も賣盡したり是を以て四  
 月早々再版母着手致さんとなしけるも印刷所殊  
 の外繁劇しくして急も印刷せる能はざれば已こ  
 とを得む本月を以て再版も着手を其間或は江湖  
 諸彦の渴望も背し向もあらんや并に鳴謝あいつ  
 茲も再版落成を告も因り聊小引を速ると爾り

明治二十年五月

南柯亭主人謹識

軍書 午睡之夢

南柯亭夢筆戯著



○第一回

常の想像終も南柯の夢と爲る  
 山の眺望終も戦争の状を見る

此の人の恐怖なるや白晝も少しく寂然としてもの淋しき處の通過るこ  
 り名を要筆とす蓋し文字の道は暗く無筆なるを以て其音母擬へたるお  
 西の語を辨まらる座にありて戦場の談易しと爰も一個の怯夫あ  
 りて此の人の恐怖なるや白晝も少しく寂然としてもの淋しき處の通過るこ  
 とを踏く蛇蝎と信し木蔭を望て冥鬼と認むことこの可笑さよ左もありつら  
 め其人とるや口も吹けば飛びやをらんると陸る、身ふあれど英雄亂れ



て奈の如くありしふにあらして天稟上糸細りし體なれむ殆んど見る姿だ  
 なく一目一々直ちに其怯夫たるを推知べき人あり然るに此人の常ふ好  
 んで和漢歐米の軍書を讀み人に遇へむ必き兵事を談を乃ち其談  
 を聞けば孔明真田が兵略も敢て奇とせるに足らざるもの、如く項羽、辨  
 慶が武勇も敢て恐る、に足らざるもの、如く又拿破崙の大山の崩れ、が  
 如き猛勢も今日英佛獨魯の精良ある兵器も敢て意とせるに足ら  
 ざるもの、如く彼の役は某氏の如何なる謀計を以て敵軍を破りしが惜  
 哉其謀計を用うる大奇ならざるが爲め之を破りしこそぞの小ありしや若し  
 余をして其任ふ當らるるに徳々の手術を以て大に之を損りしものを又某  
 の役誰氏の防禦の手段を失して大に敗績し若し余を以て之を防禦の  
 しめば斯々の方法を以て之を防禦し遂に防禦の軍を轉じ却て進撃の兵と變  
 へしものをなど、頻に大言と放ち去るに如何ある天魔鬼神も畏懼つべう

ぞ見えよなる嗚呼此の怯夫よして此の大言あるに癡か狂う將た白  
 痴の賢は驚愕べし然れども明治十九世紀天狗の社會誰か斯の如くあらざ  
 らん其能く斯の如くあらざる者殆んど稀れなり豈ふ敢て此の人のを答  
 めんや此の人嘗て三國誌を讀み巻を捲ふて以爲らく嗚呼盛大なる哉三國  
 の世や如何なきを斯く英雄豪傑の影しきや其勢ひは鼎足よして蜀丹孔  
 明姜維が謀士あれば則ち呉丹周瑜陸遜が智將あり魏賈詡司馬懿が軍  
 師あり又蜀丹關羽張飛が虎將あり則ち呉丹呂蒙甘寧が勇士あり魏の  
 許褚張郃が猛勇あり賢は三國各々英雄豪傑の多きこと恰も暗夜の列星  
 の如く殆んど數ふべうらむ是れ所謂目の寄る所ろよ玉の集ふものあらん  
 う戦争の奇觀古今列國の萬戰一冠たり余敢て奇と好む母にあらねど  
 も若し和漢泰西古今の英雄豪傑を一時ふ輩出せしめて彼の三國誌の如  
 く日本支那西洋の三國は鼎立せしめて以て權謀術數を運らし砲撃鎗闘せ



しめたらんふの一大奇觀より其愉快極まりならんと頻に孔明、司馬懿が兵略と補、真田が謀計と其優劣何如又織田、豊臣が武勇と亞壁山大、拿破崙が猛勢と其甲乙何如又項羽、樊噲が快力と辨慶加藤が猛勇と其上下何如若一此等の英雄豪傑をして或は其智を争はしめ或は其勇武闘はしめたらん母に豈亦一大愉快ならむやなど、空想を懐きしが其後も亦軍書を見る毎に此の空想をなしつつ、光陰は過ごせし程も數年前安南事件より清佛の葛藤を惹起しぬる時、會しけき右の空想益々盛にして若し克爾倍ふ代ふるも拿破崙一世を以て彼の聖約大爾攻圍の役遂之を抜きたりとし愈々進撃し印度を侵入り我れば妨碍る喜馬拉山あらんと奮進突行終に支那、蜀の地を撃入たりとし此方の劉銘傳に代ふるも孔明を以てし彼れが神機妙算を以て拿破崙の銳鋒は防がしめたらんよ、至極面白らんおど、頻に空想をなしつつ、ありけるが其後も此の空想の

止む時とてはあく常と思ひ想ふく消光せしは光陰箭の如く竟に明治十有九年の今日に至りける一日右の空想をなしつつ、南牒の下に据置きし唐机は片臂凭て居たりしが頃しも終夏のとよし有は未だ晝も長く早朝より軍書に耽たりしは最早十二時にも向々としよなれば精神倦み疲れ恍惚とし我れを忘れてすがく何となく心地よく半起半睡の間ありける程に鐘は上野の淺草かゴーンと一響の鐘聲耳原母徹りしと思ひしが五臟の疲勞にや有りけん夫きより後の稍々人事を忘れ羽翼の身は附さしか天狗仙人も化したる心地しつと想へむ何となく身の軽くあり忽焉として足下より白雲起りしと思ふ間も荒々の疾風東方より颯と吹き来り身の儼然として翔翥り一瞬間に喜馬拉山の絶頂にぞ至りける抑も喜馬拉山とし云へば地球第一の高山にして其絶頂の海面を抜出ること二千八百丈餘我が富士岳の一倍もあるまきは空氣の薄くして人得く登るべあらむ然るに軍書狂夫



今此の喜馬拉山の絶頂に登ること甚と怪しく疑ふべきに似れども夢  
 のものたるや嘗て視ざる所を見曾て馳かざる者を聞充經て食らざる物を  
 味ひ又殊て爲さざる事を做し絶て歩まざる處へ行くとしもあれば絶て  
 人の登らざる處と雖ども夢に登ることなしと斷定むべからざる實に夢に常  
 理を以て論ふべからざるものあり間談休題夫れより聽て喜馬拉山の  
 絶頂に腰打掛て先づ北方を眺むれば山又山の山續き山を離れて大平原あ  
 るに是れあん支那北部戈壁の沙漠なり遙に遠方を透見れば暗黒の中幽か  
 北極を見るべし眼を一轉して東方を望めば支那、蜀の地の一目下より  
 魏の地も亦判然と視るべし唯だ呉の地の稍々遠くして雲か山か吳か越  
 の水天駉驛て別つべからざる再遙か彼方ふ當て白帽を戴き魏然とし  
 て青雲と相接するも乃あるは見る是れ即ち我が富士岳ありなまは帽を脱  
 ぎ拜しけれども其餘のもの言ふべき騎もあらねば其儘又眼を一轉して南

方より廻らし日光の眼に入るを遮らんが爲め甲手を嚙し仰ぎて遠く大洋を  
 見渡せば音に聞えし印度洋にして渺々たる青海原の果しなかりけり試み  
 望遠鏡を取く之を眺むれば打寄す波濤の小浪大浪の絶間なく逆巻水の  
 甚と面白しども亦樂しけれ備て望遠鏡を側置き俯して近く千仞の幽谷  
 を見下せば緑苔の穹窿として瞑眩く葛藤の挂る處人迹絶えなく荆棘の織  
 る處鳥も通ぬ八丈が島なりて名よし負ふ喜馬拉山のことよしあまれば此  
 の絶頂に登りて之を見る者として古今余一人其奇其妙仙境に遊ぶ心地し  
 て夢中の夢あるかと疑はれける備て又眼を一轉して西方を見くあれば  
 喜馬拉山脉より續き一山又山の重ね重なりて殆んど歐洲に連絡もの、  
 如し再び望遠鏡と取て遠く歐洲を望見せば倫敦、巴里を始とし文明  
 國の各都府の官衙宮殿林立し爛熳華美中にも雲表に聳ゆる尖塔の金銀を  
 鏤めたる處日光に映して甚だ美觀あり活處に埃及の方より當て俄に殺氣



天を掩ひ紅海を渡く東岸に到らんとするの一群ありければ、這の何事の出  
 来しやらんのと尚ほも瞳子を定えて熟視れば、豈に圖らんや其群中の主將  
 の拿破崙一世にてありければ、故こそあらめと豫て發明し置きたる聽遠器  
 を取り出して耳に當て心靜し之を聽く、這の拿破崙が嘗てよその望を  
 しく亞細亞を蹂躪し遂に全世界を併呑んとするの征行なる由聞えけり  
 這の千歳の見物イデ、眼を張て之を見んと、血大の眼を見開て西方を守  
 りける畢竟拿破崙が紅海の東岸に上陸して後の物語り甚麼かや、開の次ぎ  
 の回に解分るを聽ねうし

○第二回

拿破崙五洲併呑の壮志を懐く  
 拿破崙 聖約大爾の堅城を抜く  
 身は是れ片田舎に生育ち漸く乳の香耗じ頃合略の萬國史を讀み了り、偶ま  
 西國立志編の譯書を繕き見て、忽ち青雲の志を懐き男兒志を立て、郷関

を出で學若し成るおとんば死すとも歸へらむとの一言を遺し、聽て郷里を  
 辭し去り笈を負ふて都會に遊學する者千人、千人、萬人、萬人問ひても  
 知るべき各々我れ一國の宰相或は天下に大學士にあらんと、空志あるを  
 又小力ありて村角力の關取としも稱せらるれば、忽ち鼻蠶めかして谷風、  
 雷電と雖どもよも我まよひ及ぶまじとて都會を出づまば、豈に圖らんや未  
 だ番附の内よだも入ること能はむ然れども、其人の心裏に入りて之を見れ  
 ば、皆を必を我れ終母に大關よならんと、空志あるべし、又餘菓子を嚙る  
 瘦商も我ま後に、新紀文たらんと、空志を懐き又穴堀大工も我ま終  
 まい今甚五にあらんと、空志を持くるは十が九までの人情母して可笑  
 うりたることおき間談休題此の如き者すら尚や且つ皆を斯乃如き空志  
 ある社會なれば、拿破崙の如き真に蓋世の雄略ある者おでう、大志おからざ  
 らん、既に聞く亞壁山大愷撤成吉思汗帖木兒の如き諸英雄が東半球を震



動たることいしもあれば今拿破崙の武勇此等四英雄を併せたるものふ  
 數倍するの實力あるなれば全世界地のあらん限りの皆を蹂躪り終ふ地  
 盡れば地を掘り大道を通じて地獄に攻入り閻魔王を擒み牛頭馬頭を鬼  
 の一聯の珠數に繼附率兒もて来り我が諸將の馬の鑣奴にせんをどの大志  
 を懷さけるが意大利地方を征制して佛國に凱陣の後其身問暇よりて更  
 其勇を施し其力を伸る所あきなき憾とけるが程よく行政總官より埃及  
 征行の事を督すべき旨命せられければ時機こそ至れりと竊に喜び臆  
 中 海を航して埃及に至りけるに埃及の兵卒固より蓋世の豪傑に  
 勝つよしなきはきび大尖塔近邊沙漠の一戦以て忽ち壓服せられ風を望ん  
 て拿破崙の麾下に属したるも拿破崙以爲らく埃及尚不且つ此の如く況  
 んや其他の邦國に於てをや大石を以て小卵を壓するが如く亞弗利加中敢  
 て征するに足る者なし去らば是れより兵鋒を轉じて亞細亞に赴かんと心

既母決せしかば先つ其地理を探らんとく輕兵を出し拿破崙自ら之れに將  
 として紅海を渡り東岸に到る是れより亞細亞の地あるが拿破崙小勢と雖  
 ども其勢ひ宛然龍の水を離れ虎の山を出づるが如くありければ誰か之  
 れふ當る者あらん皆を風を望んで靡さける然るに獨り聖約大爾城堅守を  
 て下らむ城將西德納、希里波の二人能く兵を用ゐる之を防ぐ希里波の嘗  
 て拿破崙と同窓の下に學びし者ふて拿破崙が手を變へて攻れば希里波も  
 亦術を化へて之を防ぎたるよど此城何時落つべしとも見へざりける斯く  
 て二ヶ月経ぬる程に寄手漸く糧食の欠乏を告ぐるに至りければ佛軍今  
 の退くの外其術をかりたる是を畢竟拿破崙が敵を侮りしより招けるの孽  
 ひおれば天を咎むべし亦人を咎むべし然れども拿破崙は拔山倒  
 海の勇あり且つ軍略もあるなきを豈に唯だやに止まん窮迫終ふ妙算を思  
 ひ出でたり丹を如何よと云ふ一夜拿破崙密に陣營を出つ、も弓を持し



西德納の守口母廻り一封印の書翰を城中射込ミ一折しも城中夜廻りの兵卒之状見付けて西德納お呈しける母西德納怪しみ訝りつ、聽て之を披見るに即ち其書母曰く

一別以永らく音信不通に打過候處足下益々強健之由大慶に存候陳者足下内應之趣箭書以て被傳候段忝委細領承仕候就者正に明夜を期し拙者も其手筈を可致ふ付足下宜に内應被下候也

とありければ西德納愕然として大母驚き側の人を謂て曰く彼れ内應の密計あり我若し之を知らむもあらば真に大事も及びつらんに寄手誤りて我が守口を知らむ不覺に返書を射込しに未だ我が運命の強きよあらんむらめイデ其義ならば彼れ希里波を捕へて其首を刻んを備て其手術に明朝防戦の計議ありとて無何心體母彼れと招き豫て屈強の兵士

二三十人を帷幕の内不藏し置き其来るを待ち談議半ば母して我が動瞳子するを合圖に俄然おツ取り圍んで之を撃取べし密に漏せりと令示せし程に此の物語を傍聽せし一人の兵士嘗て希里波に恩を受けたることを思ひ出で其舊恩を報ゆるに此時なりを想ふものうら密やかか抜出て急足しく走り去りつ希里波の陣營に行きて對面を乞ひ耳に口當て其聽つる儘を私語さ示しつ且つ片時も早く落行き給へと勧るを打聞長歎母得堪へず乃ち其士卒に謂て曰く拿破崙に我が舊友なりと雖ども我々豈に義に背て内應せんや是れ皆を拿破崙が胸三寸の計策にて西德納をして我れを疑ひにめいて防士の力を減殺んが爲めあり西德納善く兵を用うと雖ども之を悟らぬ是れ拿破崙に我が舊友なる故よぞあらを蓋し其疑ひに一朝一夕はあらず必を籠城の始めよりして此疑ひ有りし今此事あり我れ如何に之を解くとも西德納まで其言解聞かん這に泰鏡に掛けて視るよりも尚ほ明



かあり嗚呼己むを得ざることを裁足下の勸め母從ひ夜に紛れて落去んと密に夜廻りの目を忍んで落行さける此方の拿破崙、希里波が我が舊友なる由縁あるをまじく西德納の其言解と聞かざらんことと悟り若しも密に落延んこともあらんかと豫て幾多の士卒を四方に遣し置きける。希里波城外に出づると間なく一手の勢に出合て捕へられけるこそ拿破崙の計策善く其圖に當りたるをまじく聽て希里波を拿破崙の陣營に引きもて来よけまじく拿破崙急しく出迎へ自ら其繩を解た上座に推据て言ふやう貴兄一列以米恙もなふて健全なるの大慶の至り賤弟も亦歡びしふに存するなり從て賤弟這回淺計を運らせしに折りしも善く其圖に當りしに僥倖の三貴兄幸ひ我が陣に來る這も亦天幸と云はまくの三貴兄若し賤弟を見捨給はむんば願くは城を抜くの計を教へ給へと夫れまで頭を俯て聞き居たる希里波ををら頭を擡げて言ふやう被謀は愚將亦た何をか云はん聞く

敗軍の將に敢て兵事を云はむと且つ其計議に關るときは夫の内應の事固と虚に出で實に屬を不義馬れより甚だしきにあし豈に愚將に於て反恥らしきことならむや然りと雖ども舊友の愚將に尊敬こそ其分は過ぎたり故に一言も吐露で止まんは這も亦不義の嫌ひなき能はむ免ても角ても不義に陷るあらば敢て大不義に陷らざるの分別こそあれと彼れを思ひ此れを想ふ折らば僅に一言を吐く即ち城將西德納常云ひけらし拿破崙輕舉濫進速く來る糧食固より欠乏を故に彼れが利と見る所は早く勝敗を決する母あり然る母決運命しき勝敗をなけれは間もなく糧食盡て退き去らん其時追撃して彼れと破らんむと此言以て計策を運らまの參考母供するのみ其餘に貴將の胸中もあり愚將の敢て云ふを欲せざる所宜しく計策は運らまべしと拿破崙屢々點頭を舊友善くこそ金玉の一言を教へらまけるが去らば其手術をささんと先づ部將阿塞羅を喚び近かづけて令するやう



汝今夜一手の勢を引て城の裏手の山に埋伏し城兵我が退くを追撃んとて城外に出づるは窺ひ遠く城を離したるとき急ぎ引き違ひて城中に入り遣りし兵卒を蹂躪るべしと次ぎに部將密羅を喚び寄せて令するやう汝の明朝一手の小勢を率ゐて途中の左なる森中に至り紙旗を散亂々々翻へして偽兵の計をなせと亞ぎに又部將馬塞那を喚び近づけて令するやう汝の一手の小勢を以て明朝途中の右なる林中に埋伏し城兵密羅が偽兵を見て躊躇ふ所を窺ひ濟して數十挺の鐵砲を一度に切て發つべしと既に三將へ傳ふるの令命果きたりし頃しも秋の冬にして最と夜の長くとも最早丑の頃三時よも向々としふければ夜の明くるに間もあらむと暫し假寝の枕より間睡ける此方の西徳納夜の明くるを待ち早朝ふ使を以て希里波を招けるに希里波居らむなりふたる趣知られければ備て早くも我が密計を彼れに傳へし者あはけるまふチエ一悔しきこととしてけるやと

悔て返らぬものから暫し茫然として居たりし折から一人の士卒来て昨夜希里波落去たりと報されば西徳納之を聞き其士卒を責て曰く汝昨夜希里波の落去たるは知りつゝおどて其時直ちに報さざる今ふして之を報するに六日の昔浦十日の菊堂も亦遅緩からずや其人對て曰く臣嘗て彼の人を恩を被りしことあり然るに今彼の人捕へられて首を刎らるゝこと一もあらむ臣の彼の人を報ゆるの期茲に絶ゆ然らば臣到底不義の人たるを免むむ且つ彼の人と爲り舊友なる故を以て貴將に叛き候者あらむと思ふものから恐むながら貴將の密計を彼れに告げ知らせけるに彼の人の言へるやう我れ固より叛くの志あし若し此の志あらば豈に後悔今日も及ばんや然れども我れ拿破崙と舊友乃由縁あるなれば西徳納我が言解を聴くことあらば是れ此等の點を考へたるより出づる拿破崙の計策を西徳納も亦後し此事知る由あらんと其儘落去候へぬ然し彼の人寄手の陣に降



りいあるまじとい臣が推察あれども何ふ致せ彼の人の落去一旨を貴  
 將報せも侍をば這も亦不忠ありと思ひ只今報するえのなり忠と義との  
 二字ふ迫りて計ること斯の如く母候此上臣を相應の罪一行われたと  
 又他事もなく言ひるゝことの道理あれば西徳納始めて夢の覺めたる心地  
 し汝罪あり汝は是れ忠義の士なり多く得難し希里波の恙あり汝の功  
 なり希里波の存命あらん母の復た遇ふ時あらん是れ皆を拿破崙の計る所  
 母して之れ欺れたる我が罪あり豈天を咎め人を咎めんや開の夫れ  
 て宜し昨今寄手の内實を聞く糧食愈々欠乏し今明日をも保つべあらざ  
 る由それらあらぬか城櫓母登りて其動靜を窺はんと懸て城櫓登り甲手  
 を騎して遙か寄手を見渡すは砲鎗の夥しきおと宛然大竹林異なら  
 る又旌旗指物甚と多く埃及の方を指して退くの體ありければ夫も寄手の  
 糧食盡さて退くや衆卒早く追撃て之を破れい疾々と急がし立て城門ハ

文字母押開かせ西徳納の騎馬の泥障を蹴鳴一衆卒の咄と喚て慕直す  
 追ふたりける既二三里も追ひ来ぬらんと思ふ頃漸くして其後殿の軍  
 は近づきぬきバイテ蹂躪らんむと又一層足を早やめる折うら向ひの左な  
 る森中へ幾荒かの旌旗散亂々々見えければ備て敵軍埋伏の勢を彼の森  
 中へ置けるよ否々這の偽兵の計もあらんむらんかと一進一退躊躇  
 ふ所を見濟したる馬塞那の右の林中より數十挺の鐵砲は火蓋は一度は控  
 と鑽て發てば其音凄然と宛然萬雷乃一時に轟く異ならねば城兵誰か  
 驚らざらん思ひ掛けなきことと皆を愕然として大驚れ彼處母伏勢あり  
 と思ひしに此處母も亦伏勢あるよ然らば其他も亦伏勢あらんと  
 西徳納を始め衆卒皆を膽を冷し周章狼狽甚だしく皆々聖大約爾城を  
 指して亂走りける既して西徳納城下に至り仰て城櫓を見揚れば這の抑  
 も甚麼此の如何驚章旗纒然と風靡さけるよ西徳納驚一驚愕一愕一





五十五

西速納我  
 旗不敵  
 の旗了  
 見一  
 一

日科



五十四



其計はかりごとのなきん所ところを知らず茫然ぼうぜんとして城を眺むる折をりから阿塞羅城アセロ櫓うらに登り大音聲おほいこゑに呼よりて曰く西德納何處シドナか歸かへへらんとまゐる汝なんぢ豫あらかじめ勝敗かたまりの機きを悟さとり到底到底我が軍に敵てきをべうらざるを思ひ手付けを當城あけわたを閉渡あけわたせしゝる去りとも亦欲もしふいなまて此處こゝに來りしかと衆兵しゅうへい咄わらと笑ひ々れば西德納シドナ忿怒いんぐやるゐたおく憎惡にくま彼奴やつが口くちを引割ひきき吳んぞと教圍いさまたる勢いきひ猛たけく令けいまれども既すでに其膽いそを奪うばはれたる士卒しそなでう戦たたかふの勇氣ゆうきあらん今いまに主あまれ命いのちなりとも誰たれありて聽きく者ものなき折をりららナボレオン拿破崙ナボレオンの本軍ほんぐん取とて返かへして此處こゝに殺到ころしたうしけまば西德納シドナ己こゝろむを得ずナボレオン拿破崙ナボレオンの軍門ぐんもんに降くだりたるナボレオン拿破崙ナボレオン厚あつく之これを對遇たいぐうける備そなへて西德納シドナ降くだりて後のちちナボレオン拿破崙ナボレオン問とふて曰く貴將きしやうは率ひらうる所ところの軍勢ぐんせいは固まより多おほらざるナボレオン今日けふ斯かく諸方しよほうに手分てわけしぬらんナボレオンに定さだめて本道ほんだうを退ひくの軍少ぐんせうなかりぬべきナボレオン敗まく將しやうが城櫓やしろに登のぼりて見みしとたに頗おほる大軍たいぐんの如ごとく見え常とこの全軍ぜんぐんよりも多おほかり

なんうと思おもひれける程ほどかれを伏勢ふせいのあらんどの夢ゆめも知らず亦少またしも疑うたがふ由よしなく終つひに事ことの茲こゝに及およぶるナボレオン抑おさも如何いかなる故ゆゑにぞありつるか後學こうがくの爲ためめ聞きのまナボレオン一ひと拿破崙ナボレオン答こたへて云いひけるやう左ひだりればとよ其事ことを我われが軍ぐんに固まり小勢せうせいのことことをみしあれば少々せうせうの軍勢ぐんせいありとも之これを引分ひきわければ忽たちち其全軍ぜんぐんにあらざることを見透みとおされん然しかるナボレオンとき伏勢ふせいのあらんこと敵てきの推知おしえる所ところとあらんと思おもふ所ところうら一人ひとりに二個ふたごづ、の砲てつ鎗こうやう或あるは旌旗せいし指物さしものを持もたせ之これを左右さゆうの肩かたに擔かせ且かつつ城中じやうちゆうより此為體このための真情まことを見定みさだめ得えざる町程ちやうりやうを測はかり聽きて其處こゝより退軍たいぐんの體ていを見みせるナボレオンあり敢あて奇あとあまよひ足たらねども僥倖ごうしやうにして偶たまたま其圖そのずに當ありしシドナ西德納シドナ之これを聞きて曰く貴將きしやうの神機しんき妙算めうざん我々われらの企くはく及およぶ所ところにありナボレオン貴將きしやう我が抗敵かうてきの罪つみとも亂た給たまはで却かへて厚あつく對遇たいぐうする、に忝かたじけなくも亦難また有ありナボレオン願ねがは今日けふより犬馬けんばの勞らうを盡つくさんと是れより此邊このへん拿破崙ナボレオン抗敵かうてき者もの一人ひとりもななりける



○第三回

拿破崙、歐洲古今の英雄を徴集る  
亞歷山大、愷撒等の豪傑を拒む

拿破崙既に聖約大爾城を抜き西德納を降しけれども此の東行の國と地理を採らんが爲め母ありて敢て諸城は攻落さんが爲めよあらむ且つ輕舉濫進大に其力を勞し稍々悔る所もあり又其本旨とする所の地理も既に其大略を採り得たれば敢て又進撃を一先づ土京若士但丁に退き埃及に殘し置さざる將士兵卒を招喚び又歐米古今の英雄豪傑をも檄文を以て徵集へ復た更めて亞細亞に亂入り波斯、印度に一撃の下に蹂躪り若し喜馬拉山我れを妨碍ることしもあらむ踏崩して通過さ支那母侵入らん孔明、司馬懿如何なる神機妙算ありとも我が猛勢以て雷擊ぬらんよ彼等あてう之を防禦ことを得ん去来左らば一先づ君士但丁に退んとて聽て諸軍を率ゐて君士但丁を指してぞ去りよける既にして君士但丁に入りよ々

まむ有司ふ命じて檄文を作らし之を歐米各國に觸せしめしける即ち其檄文ふ曰く

保那巴爾の大仁大義を以て歐米各國母布告す開闢の初めより今日に至るまで凡そ五千有餘年の永き星霜を経ぬれども社會一日片時も干戈止むときなく古今都て戰國の世の中よて常は萬民其害毒を被るは是れ何等の故母ぞありつる即ち慈母彼の洲此の國と境を區ち域を畫るより各國互は愛國報國等表公襄私の偏頗心を生じ權利を損り名譽を傷くとか針小のことは彼是争ひ終母絶は鎗よと叫び針として砲鎗よ變へ干戈を交て骨乃山を築き血の川を造るは豈母歎息の至りあらすや故に今余歐米各國古今の英雄豪傑を會して亞細亞に進入んむ余言は隨ふ者い乃ち余麾下に屬せしむべし余言は從いざる者い乃ち皆を蹂躪らん又此の檄文を觸れたる國々の内若し余が言は隨いむして来會さ



る者ありば同く之を蹂躪らんを既に黄泉の旅行しぬらん者其地其地より別使を立て之を招喚べし未だ生きざる者其地々々の醫師を命じて早ふ生れしめよ余此の征行稍々暴に似たれども之を烈風甚雨ふ譬ふべし一時樹木を倒し家屋を覆ふ等の損害あり又一時幾多の人命を犠牲に供することありとも之れが爲め地上の汚物を洗除めく新鮮き空氣を通ししめ又千古より積重りし腐敗の流弊習俗を洗拂ふの功益あるべし且つ文明の爲め必要なる交通の通を開くの便利と與ふべし斯くて天下を一統したる後の彼此洲國の境域に皆其區畫を擊破り以て地球を一大帝國となし余之は大帝たらん然らば彼の境域を異にせるより起る所の戦争に此時よりして皆お止まん既に境域を異にせる戦争にして止まんは社會殆んど干戈を交へるの害止みおんう然らば則ち余が此の舉に大仁大義の美舉なり 歐 米古今の英雄豪傑よ仁義の師を

興し来く救世の會母赴き汝の身を犠牲になして永く天下の干戈を絶てよ是れ所謂身を殺りして仁とおもものなり檄文到らん日速に奉行すべし

右の檄文を見たる諸國の英雄豪傑に何れも皆お驚愕一愕して暫し言句も出でざりける中母も希臘の亞歷山大、羅馬の愷撒、英吉利の格朗究等の地下より有りて采然としく彼がが大膽よあきき數傑一場に會して計議を以て多く諸國を蹂躪り或は武力以て一國の政柄を握りしと雖ども今彼れが大膽あるに我々がが大膽なるに數倍を然れども我々も亦各々一世の大豪傑おでう今彼れが下風お就ん去れば其招母應ぜざれば彼れ必ず此の地下に攻来らん其時我々諸人之を防禦ことを得んか彼れが勢ひの猛さ我々の防戦覺支おし這に如何にせまると各々意衰を吐露つ、計議を凝



らせしかども未だ孰も決せざるも亦亞歷山大、愷撤、格明  
 究等の何事も皆一世の豪傑としも稱せらるる人々なれば容易く我  
 が概文に従ふまじと豫て思ふ所ら密に地下より辯士大摩斯塞尼士、西  
 塞羅の二人を招き寄せ厚く之を待遇し遊説として亞歷山大以下の諸雄會  
 せる處に遣はしける聽て二辯士地下母歸り亞歷山大以下の諸雄計議を  
 疑し如何にせまじと各々頭を項垂て其計議未だ決せざる所へ行さければ  
 皆々大に歡び二辯士に能くこそ来ましたれ来ざ上座へと請はけるが  
 二辯士は左右なく上座ふに就かむ諸將の皆な一世の大豪傑あり我々  
 なでう各々方の上座ふ就くことを得んと言ひつゝも其下座ふぞ就き母け  
 る其時牛づ亞歷山大二辯士母向て曰く各々方も亦既し知りつらん這回  
 觸れられたる拿破崙の概文の一條這に如何にせん今方諸將も計議はあせ  
 し未だ其決まる所あらざる折ら二辯士の来臨多く得難き仕合各々

方の智慮に富めることなればさぞ能き思慮もありつらる願くは一考の  
 思慮を惜むことなく其去就を決せられんことを望まされければ大摩斯塞  
 尼士答て左ればとよ其事なれ我れ熟々思考るは古今に永く列國の多き故  
 英雄多く豪傑少なからむと雖ども未だ嘗て拿破崙の如き龍の水を離れ虎  
 の山を出づる猛勢ある大英雄にあらじ所謂古今獨歩は豪傑とて此人や云  
 ふらん今貴將等諸雄の爲めに謀るは各々方の何事も皆な一世の豪傑にて  
 嘗て東半球を震動せしこともあまはば拿破崙と淮雄を争ふふ足るる  
 武勇あるふに相違ありと雖ども結局の勝敗は我が知る所ふあらむと言へ  
 ば西塞羅又語を繼て言ひけるやう無禮ながら今各々方と拿破崙が武勇の  
 實力を比較れを稍々其差あるふ似たり何ぞや各々方の古代四境悉く弱  
 敵の世の中ふ輩出たるものよして之と蹂躪りたるを以て英雄と稱せられ  
 たるものなれども拿破崙の之れと其情勢を異にし近世四面皆を強敵の社



會あひま生は出だたるものよいて諸國其威風を畏懼ること鬼神を恐怖るも亦た嘗たらざるを以て推測れば蓋し非常の武勇なくんばありむ是れ英雄中の英雄  
 豪傑中の豪傑と謂ふべし然らば各々方はして拿破崙ナポレオンに抗敵んよの結局の  
 勝敗豫あを知るべし既かに勝敗の豫め知れたる戦争を試ことんとするに智者  
 のなきる所なり諸將暫く此點こゝに熟考じやくかうて決する所ありしと此言を聞  
 て一座初めて夢の覺めたる心地しつ成程我々の身の實力知らずして彼れ  
 一抗敵んとしたまじも智者の思慮ありて甚と深し斯く強弱の判  
 然しぬる上の躊躇べらむ早く其招きまねに應じて辱を免まきん二辯士にの  
 我々われら先ちまち拿破崙の陣營ぐんやに至り此義宜よしむ傳へてん後より馳付んと  
 先づ二辯士には立たせ各々其手下の將士兵卒を率ひめて君士但丁コンスタンチノープルを指して  
 ぞ急いそぎける亞登山アレキサンドル、愷撤シヤン、格朗究クロンウエ等一世の豪傑がうけつにして尚ほ且つ此の如く  
 かれを歐洲各國誰たの其檄文げいぶんに從したがひざる者あらん皆を翕然あつぜんとして其徵しるし

應おけけるよう歐洲の諸道しよたうの四面八方より君士但丁コンスタンチノープルに馳上る軍勢晝夜引ひき  
 も切らざりけるに甚と凄然せきぜんかりける光景あけざあり

○第四回

米國局外中立を布告す  
 拿破崙、亞細亞を亂入す

去程こに拿破崙の檄文げいぶんに應こたへて歐洲諸國より君士但丁コンスタンチノープルに馳上る軍勢の夥多  
 しきこと何百萬と云ふことを知らず宛然あつぜん群蟻の四面八方より集あふ如く最  
 とも凄然せきぜんじき情態じやうたいに誰か驚かざる者あらん之れを觀る者皆を愕然おつぜんとして  
 大に驚おどき世界開闢せかいかいびやく以來未だ嘗て聞きざる所の集兵ありとぞ言合いける所  
 く夥多おほしき集兵あつへいなれば其何れより集あひし兵あるを詳記しやうきをことごとに到  
 底凡筆の及ぶべき所ところを試こみ其大家なる者を舉あげれば希臘ギリキより非立ヒリツ、  
 亞登山アレキサンドル、羅馬ローマより細標ホニベ、愷撤シヤン、魯西亞ロシアより彼得ペートル、亞勒山アレキサン、  
 魯士ロシアより非德黎フイデル、伯里折ブリス、摩爾的管モルティグ、比斯馬克ビスマルク、本國佛蘭西フランスより查爾曼シャルマン



路易十四世、羅肥以爾、英吉利よりの黒公子華義都、格朗克、納爾森、密林  
 發、戈登を始めとし其他、奧地利、日耳曼、伊太利、和蘭、瑞士、瑞典、連馬、  
 西班牙、葡萄牙等の諸國よりも亦皆を一世の英雄豪傑と稱せらるる將  
 帥或は二十萬或は三十萬の軍勢を率ゐる其多きは五十萬六十萬殆んど  
 百萬に近かるもあり少なきも十萬を下る者稀きあり又埃及に残りし兵の  
 其勢敢て多るらむと雖ども將士は百爾智、孟西、入爾倍、百爾那德的、斯  
 密、伯立奴、蘭奴、摩爾智、納、達伯的、百西得爾、笈勒爾曼、路伯爾、百里  
 希央、塞立里得、馬克德那爾、烏日諾、比克的爾、克勒倍、幼塞奴等後は武  
 功を顯はすべき英將あり之れは加ふるに加爾達額の勇將漢尼巴を以てし  
 けきバ、統の如く其體小其軍少ありと雖ども其勢は甚と猛りける且  
 つ拿破崙の是れまで率ゐたる將帥は密羅、阿塞羅、馬塞那第の英雄あり  
 又近く土耳其全國よりの擧て來會しなれば其盛大なること開闢以來何處

にも未だ嘗て之れあらざる所あり其盛其大筆舌の能く及ぶ所あらむ右に  
 唯だ其百分の一を記しる止まれむ其餘の想像に任じらるるあり斯く  
 て歐洲古今の英雄豪傑の集ふもの無慮一千萬の夥多しき及びけきども  
 未だ亞米利加より一人も來らむ是れ或は其路程の遠けき未だ若士但  
 丁母到着するの時に至らざるが爲めなるかと計議し時を移せし折ら忽  
 ちビーンと電信の報あり這は何事の出采しやらんかと其電報乃表を見  
 るに亞米利加、合衆國華盛頓府より大統領華盛頓の通信する所のものお  
 りなれば如何なる旨趣あらんかと急ぎ見るに即ち其報文は曰く  
 北亞米利加、合衆國大統領華盛頓南北亞米利加諸國の總代とし拿破  
 崙、保那巴爾的閣下の檄文に答ふ檄文の旨其故なき母あらねども深く  
 之を熟考すれば其所爲或は暴に渉るの嫌ひなき能はざるや天下洲國の  
 境域と擊破り戦争の基て起る所以の者を絶んとする其志や良し然れ



ども是れ到底能くまべきことあらむ蓋し閣下れ武勇を以て天下を横行  
 せむ或は一時其目的を假達することを得べしと雖ども斯の如き所爲は  
 其人存すれば則ち其事行はるべきも其人亡れば則ち其事息まん人間  
 僅り五十年古米六十年の壽を保つ者稀れなり閣下既に常命の半生を過  
 ぐ閣下十年にして宇内を一統はるの功業を遂ると假定れば夫れより天  
 下太平鼓腹の樂をなすべたに似たれども多手兵を動かしたる後の消費  
 疲弊は容易く愈えむ蓋し數十年の後ならて其消費疲弊全く愈ゆるの  
 時運母至らざるべし然るに人類社會不死の仙藥あらねば右の消費疲弊  
 漸く愈えむなるともるに至れば則ち閣下の既し黄泉の旅行しぬらん這  
 も亦知るべららず嗚呼非常の資本即ち人血を以て買得たる品物の未  
 だ我が手ふ入らざる先ちて再び原との諸洲各國を復るの時機に至る  
 ことあらんと考ふれば餘り善事とも思われを況して其再び原との諸

洲各國を復るときは又勢ひ干戈を交へざるを得ざるは不幸あること疑  
 ひなければ此の舉害は毒を重ねて一利をだえ見る能はざるの結果は及  
 ひぬらんか此の理あるを以て南北亞米利加諸國は閣下乃檄文を應むる  
 こと能はざるを去りして又亞細亞も左袒を列國公法に從ひ堅く局外  
 中立を然れとも此事若し閣下の御意に適ひて亞細亞と同じく蹂躪らん  
 むとの御決斷もあらば這は是非は及ばず我々も亦戰備をなさん然れど  
 も我々の固より道を守る者なきを我々よりの決して手出せむ唯だ閣下  
 より兵を向くることしもあるば己むを得ず防戦のみ乞ふ賢察あれか  
 一再拜

拿破崙此の電報を見て勃然として憤怒ること太甚だしく滿面朱を注ぎた  
 る如く兩手を握り固め張臂翼の如く左右に擴げ最も苛めしと大の眼圓  
 と見開き天地を響く大音振立て、曰く彼れ華盛頓如何なきは斯くの無禮



を極むる我れ生ながらよして従れが肉を食むんを止まむ今亞細亞アシア向  
くるの兵鋒ヘイゴウを轉じて亞米利加アメリカに向けんと其憤怒イキダシ烈火の如くなりければ  
諸將諫めて曰く大王の御憤ミイダシ御尤ミトコのことにて侍れども兵鋒ヘイゴウと亞細亞アシアに  
向けんとて兵備ヘイビ是れまで整へしものを今よして俄ヒトナリ母兵鋒ヘイゴウは轉じて亞米利  
加カ母向カモウ々んとせば恐らくは兵氣ヘイキを挫折クサセん如るト先づ亞細亞アシアを撃つ然して  
後亞米利加アメリカも及ばんふは大王オウ忿怒イキダシを止め心静ココロシヅカし熟考ジュコウあらんこところ望ま  
しけれと然きども其憤怒イキダシ尚ナも止まむ暫チカし忿怒イキダシに時を移せしが程經て稍  
々其忿怒イキダシ静まりければ又諸將シヨウ云々諫め漸くよして兵鋒ヘイゴウを亞米利加アメリカ轉  
むるの議ギに止トまる茲ココに於て諸將シヨウ又拿破崙ナホロンの氣を看んとく甘言カンゴンを進め  
曰く大王の武勇ブユウ古今天下コノテンカふ其比ヒあるを聞かむ其實力ヘイリキありて其實力ヘイリキ相應の  
位イ母即カモトるしめざれむ近臣キンシン後世ゴセの讒ソウを免メむ故ユ臣等衆議シヨウギを以て謹んで大  
王オウは歐羅巴イフロッパ大帝ダイテイに奉ホウぜんと拿破崙ナホロン心竊ココロニヒソカニに歡ウレシぶと雖レども先づ之を辭せしに

諸將再三勸めて止まざるを以て己むを得ざるの體テイにて其位イ母即カモトんことを  
許ヨしたる斯くて前代未聞ゼンダイミケンの盛禮セイレイを以て其位イ母即カモトきけれども這コの詳記セキせむ  
既スに即位キツイの禮レイも了りければ左サらむ亞細亞アシアに打立ウチタテんと急イソがける併ヒて其行  
軍クンの情態セイタイを見てあれば陸軍先鋒リククンセン第一陣ダイイチジンに希臘ギリキヤ山サン大其軍オウ七十萬第二  
陣ニジンに羅馬ローマの愷撒カイサ其勢セイ五十萬第三陣サンジンに同ドウトく羅馬ローマに翹標セウヒョウ其兵ヘイ三十萬第四陣  
に佛蘭西フランクスの查爾曼チャーレマン其卒ソウ四十萬第五陣ゴジンに同ドウトく佛蘭西フランクスの路易ルイ十四世其軍クン三  
十萬第六陣ロクジンに同ドウトく佛蘭西フランクスの羅肥得ラベテ其勢セイ二十萬第七陣シチジンに總大將オウダイショウ歐羅巴  
大帝オウダイテイ拿破崙ナホロン保那巴爾ボナバル的テツカ親シンら之れを率ヒツゆ其兵ヘイ百萬拿破崙ナホロン此の日の打扮ウチハキに  
金剛石コンゴウシもて作ツクれる最イと高タカやかなる帽子カボチを頭上カウカウに押藏オシサウき布目フメ尤トと細ホソやう  
に其色ソノイロ直ナ黒ク黒ク助伊奈利オウナリをも壓オシつべき濃アヒ黒クある軍衣イクニを著キるがし深紅フカニに金  
銀ギンの數線スウゼン入りたる片襟カタカサを右肩ミダカより左サ乳ニ下掛ゲけ斜カに懸カけ下ゲし左腰サウに黄金オウゴン  
造ツクの寶劍ホウケンを帯オビび足タラシに亞非利加アフリカ山中ナカに生長シヨウてる麒麟キリンの革カもて製ツクれる珍



靴を穿ちける左らでも天粟の體格頭大にして額高廣く顔色淡青く頭髮  
眉毛黒栗色ふて眼光爛々人を射仰見るべうしざるの恰も電の如く鼻口  
の甚と美しく亞利比亞馬の驪く大く逞して千里壓虎と名づくる名馬を寛  
と打跨り左手ふ白と紫を漆分たる腰鞆を搔繰り右手指揮旗を持ち定瞳  
子向ふは睜り其爲體の威風凜凜然堂々如何ある天魔鬼神も畏懼つべきぞ  
見よける第八陣の魯西亞の亞歷山大其卒五十萬第九陣の英吉利の黒公  
子華嚴都其軍十萬第十陣の同じく英吉利の格朗究其勢三十萬第十一陣の  
同く英吉利乃空林登其兵二十萬第十二陣の加爾達額の漢尼巴其勢二十  
萬其餘の將帥軍勢の皆あ夫々の下は附らしめけるにぞ總軍殆んど一千萬  
に近う、今此の大軍を以て押出す情態の何は譬へんう天下殆んど譬ふ  
るゝ物なし數千萬の旌旗指物の秋風靡靡然と空中中母漂へるの甚とも  
凄然と數百萬の砲鎗の針山は驕驕たり騎の勇めは心もいとく響の音

が金響尾落々々蹄の拍子がしつとんと其馬の嘶く聲の合はく雷となり  
て囂然たり先鋒の既は亞細亞の地に入りけるも後軍の未だ君士但丁を出  
でぬ然るのみあらむ初め諸國より君士但丁は會する時其軍勢甚とも夥多  
しくて限りある君士但丁は集ふこと叶はねば唯だ其の大將分の者のみ  
君士但丁は入り其餘士卒は都外に兜せしめたり中母は後より馳付たる者  
の土耳其はだも入ることを能はで遠く希臘地方もある者も亦少からむ是  
を以て亞歷山大の軍勢既は亞細亞に入りも後軍の未だ希臘地方を出でん  
去らざる者あり數百里の間野は充ち山は蔓々甚とも凄然とさま有様にて打  
立ちける儲く又海軍先鋒第一陣の案内者としく佛蘭西の克爾倍其軍十萬  
第二陣の英吉利の義律其勢十五萬第三陣の魯西亞の彼得海軍大將として  
其兵五十萬第四陣の英吉利の納爾森副將として其卒三十萬第五陣の軍  
艦不足あれば暫らく其製造を待て打立んとして先づ第一陣より第四陣ま



で出帆せり此軍勢亦數百萬直ち支那の東南吳越を襲はんとす船中縦横  
舟引ける綱に宛然蜘蛛の巣に異ならぬ旌旗の返鑑として風に揚り蒸氣の  
黒煙の空天舟靡さてむら雲の如く氣笛の百千台して雷とありよける這も  
亦甚と凄然と々々隣り亞細亞大陸の一撃の下に蹂躪られんをと陸を  
たる

○第五回

第一戰印度の大衆、亞歷山大を破る  
第二戰亞歷山大、印度の大衆と敗る

前回演る所の軍勢一千萬とい餘り多き母疑ひを懐く者何るべしと雖ど  
も歐洲各國の常備兵の一世の人員を徵集ふるも尚不且つ數百萬を得つべ  
し況してや這回拿破崙が徵集へる所の軍勢は歐洲各國古今の人員をまじ  
むる讀者其軍勢の多きを疑ふこと勿れ間談休題去程に拿破崙の陸地一  
千萬の大軍前後十二段舟備へ聽て小亞細亞舟進入ける母此邊誰一人の

敵する者あらん皆を風を望んで靡さける斯くて先鋒亞歷山大は早くも幼  
爾入捫城ふ入るよける此の城は舊王輦一乘ありけるが其輦上は一繩  
結を繋ぐものありて甚と固く結きて解ることなし傳へて云へらく神あり  
て指示を誰か能く此の繩結を解く若し之を解く者あらば其人即ち亞細亞  
全地を保さん誰か亞細亞全地を統理する者乎と亞歷山大之を聞き乃ち其帶  
ぶる所の利劍を抜きて曰く我歐羅巴大帝保那巴爾的氏に代りて此の繩  
結を斬開るんと一撃の下ふ之を斷ちよける之を見たる衆人發聲と斗りよ  
驚然と輦に鳴りも止まざりける斯くて衆人の言ひるやう保那巴爾的氏部  
下の一將尚ほ能く斯の如し況して保那巴爾的氏とや其れ必む亞細亞大地  
の君とありぬらんと亞歷山大又兵を進めたるは波斯近傍亦一人の敵なき  
故に益々前み進んで印度の地舟入りよける此處に固まり頑固の土人多け  
れば大軍とも恐れを十萬餘の土人巴得達西百斯河の畔に集ひて抗敵せん



とどふにける中母も小賢こさか一者數人會くわいして軍議いんぎをるやや歐人イフロッパの固かたより象戰ゾウせんに習なひざることをなれば百千の大衆たいしゆを以て戰たたかひ、彼れ必かなず亂みだれふんと既に軍議いんぎ決きせしうば懸かく多く大衆たいしゆを集つへけるは間まなく亞歷山大アレキサンデルの大軍押寄おしよせ采さいつ乃ち戰端せんたんを開ひらきたるは印度インディアの土人どじんの數百千の大衆の背せに櫓やぐらを組くみ立て數人之れは打乘うちまうて最いと長ながやうなる鎗うしを打揮うちかふて人獸等ひとけものらしく敵陣てきじんに亂入みだれいりけるは歐軍イフロッパ嘗かつて話はなしの傳つたへ聞ききしおともあまど實地じつち之れと戰たたかふに始めての者多おほければ之を防かぐの術わざを知らず或あるは象の長鼻ながびもて拂倒はらひたされ或あるは大足おほあしもて踏殺ふみころさき或あるは上うへなる兵へいは突殺つぎころされ其甚おほだしきふ至いたてに此の爲體ためいを見て逃にげんとしけるに大軍のこどもしあれば味方みかた同士どうしは踏殺ふみころされ或あるは我が劍つるぎに刺貫さしつらぬかる、者も少すくなるらむ數拾萬の大軍見み苦くるしくも皆みな這々はらの體ていまで敗走やぶれりけり亞歷山大アレキサンデルの彼かき土人どじんの烏合うがの雜集ざしつなれば之と破やぶらんこと一撃いつうたの下ひもとありと侮あはれるものから敢あて充分じゆんぶんの備そなをも立てて戦端せんたんを

を開ひらけることの敗因やぶりなとありしは今更いまら悔くて及およばねど敗兵やぶりへいを點見ちんけんるは殆たいていんど五萬の軍兵ぐんべいを失うひけき安やすき心こころもなく如何いかんとか計策けいさくを運はりして會稽けいの耻はぢを雪ゆめんと思慮しゆりを潜ひそめて熟考じゆくかうるものうら遂はし妙算めうさんを思おもひ出いでたれば獨ひとりり竊ひそか笑わられけるを近臣かたはらの者ものはそれかあらぬか知る由よしなく敗やぶれて笑わらむおとの最いも怪あやしく訝いふしく疑うたかひ茫然ぼうぜんたり亞歷山大アレキサンデル大先おほづ部將ぶしやう格里智西グリュチウシを身邊みへ近く招まねき寄よせて命いのちするやう汝い今いまより十萬の兵へいを以て多くの蕪あと取集とへて明日あしたの戰場いくさば母持はち來きるべしと格里智西グリュチウシ其何そのなにの意いたるを知らず命いのちを受うけて退出ひける次つぎは部將ぶしやう巴爾米紐阿バルメニウアを身傍みへ近く招まねき寄よせて命いのちするやう汝い明日あした一萬の人夫ひとふ小囊こぶくろに盛もたる火藥えんせうを持もつしめて戰場いくさばふ來きるべしと巴爾米紐阿バルメニウア亦また其何そのなにの意いたるを知らず命いのちを受け退出ひける亞あぎ部將ぶしやう波密ボミを身側みがは近く招まねき寄よせて命いのちするやう汝い明日あした一ひ百ひゃくの兵へいを率ひ率ひる豫あて大帝保那巴ボナバ爾ニ的テ氏シより授さづけらるし大砲たいぱう三門さんもんを持もち來きるへしと波密ボミ亦また其何そのなにの意いたる



るを知らず殊に僅の一百人を以て足れりとのことなれむ甚だ人員の少きを疑ひ何れども遠を問はんも流石にて命せを受けて退出ける次ぎに部將安智格紐面と身邊近く招き寄て命をるやう汝に明日五萬の軍勢を率いて真先母進み兵を交へ偽り敗れ去るべし但し左右も迅速く逃走り決して後退くべしと安智格紐面亦其何の意たるを知らず命を受けて退出たる既其命令了りければ夫れより亞歷山大に竊に手下の兵卒を命て數千個れ蕞人形を作らしめける這に其密計の敵母漏んことを恐れまくり斯くて翌日となりぬれば印度の土人兵に昨日の勝利に心勇も又も大衆を以て蹂躪らんと前みける小歐軍よりも安智格紐面が率ひたる五萬の軍兵進みけるよど間なく戦端は開ける母暫時にして歐軍亂れければ印度の土人兵に勝母乘りて追蒐けるよ皆々蟻子雖と散まが如く左右も逃走りけるよど左右孰れよか追行ん去りとも軍を二ツ母分けて左右も追行ん

りと轡に猶豫ふ折から思はむ向ひを見る母數多の敵軍ありけまば彼奴逃走して彼處母居るか左らずに新兵の來ぬらんを孰れまれば早く蹴散せと令び下より數百千の大衆皆を長鼻と振立々々進まけるよ這は抑も甚麼に此の如何に動物ふにあらで蕞で作りし人形に軍衣を被らせたるものなりければ呆然る、まで母腹立たしけれども今の欺かれし味方の無智を悔ゆる母も斯くては長居に無用ありイテ退んとしけるよ近邊數里の間蕞の山を築たる如くなれば怒氣を静めたる群衆に之を見ると蟻も喜んで鼻蠢めしつ、食氣も奪心なれば前へも進まむ後へも退るを押しも率けども動かむころ橋上なる衆兵是れよ困じ果たる折から何處ともなく大砲を彈丸二三個天地と響かして來りけるよど近邊の蕞母燃附けるよと見る間も荒々の火燭四面八方に傳はりて數里一面乃火炎となりしに豫て用意の火藥散在けるを以て斯くの火傳へ迅速あるあり左なきごは蕞に最とも火附早きも



のあるは火勢を助け導く母火薬と以てしぬるものおれを焔煙天に漲り地  
 ふ溢る象其體大なりとも今何の用ふの立たん人獸火炎中泣叫ぶこと  
 の憐れさよ其號哭と叫ぶ聲の數里の外に聞えける釋迦が傳へし地獄の責  
 ん斯くやありぬらん土地に是を釋迦誕生乃國此處母地獄のあるらんか  
 と思ふ斗りありけり是に至て讀者始めて亞歷山大が妙算の仕組を知り得  
 て奇と稱へ妙と叫び思ひを掌を拍つもあるべし然らば何故は昨日より  
 して此の思巧を明らさざりしや抑も計策の密あると以て貴とす敵に知ら  
 せじと思ふ秘密の味方も知らせざるを要を左りとも前日之は知らせね  
 ば其用辨をなさざることに已むを得ざりとも右の計策の如く其準備こそ  
 前日より要をることとあれ其趣向の如く前日明かすの必要なきを以て  
 之を秘め置き翌朝に至り始めて明らして遽に其手配りをあいつるものお  
 れは夢筆子も亦之を讀者に告ぐるの暇なうししかり凡る兵を用うる者の

箇ばかりのことの思慮なくして叫ぶまじ

○第六回

亞歷山大、喜馬拉山を見て南方迂廻を欲す  
 拿破崙力喜馬拉山を抜き氣亞細亞を蓋ふ

去程は二陣三陣も程近くなり追々四陣以下の後軍を進み来りなれば亞歷  
 山大も亦打立ちける母最早一人乃抗敵する者をなれば只管行先の道路を  
 急ぎける程は早くも比哈而斯河ふぞ至りたる此處に亞細亞の中央母しも  
 あれば歐洲を去ること頗る遠遠を覺え希臘地方よりも亦既に千有餘里を  
 隔てぬるは國土風俗總て一變をふまば士卒多くの郷里を想ひ出で老いた  
 るの故郷を遺せし妻や子の如何にして居るらん我が愛子のさぞお大さ  
 ふいなり々を今方の胃寒などいせぬか心許おしと想像り若きの國を出つ  
 るとき離れし父や母やの如何にして御座する持病の出でいせぬか彼を  
 を思ふは付々ても父や母のさぞな我が身の歸るさと俟木樂てぞ在まらぬ



と想像し精神を傷めぬるものから前へ進むを欲せざりける爲體を見て亞  
 歷山大太后怒て曰く汝等何とぞ躊躇て進まざる速征し郷里の事おも想  
 ひ出でざるか左りといふ亦女々しきことある哉嘗ての速征に我が事あり  
 が今日の速征に我が事ありす即ち歐羅巴大帝保那巴爾的氏の事あり若し  
 嘗て我が遠征の如く此の河よりして道を轉じて歸途を就くことしもあら  
 む我が罪免れ難し況してや拾九世紀の今日に至りては既に交通の利器た  
 る電信郵便蒸氣船車の發明も成りたれば全球面をして殆んど拾分の一舟  
 狭縮たる一等し去れば希臘と印度との隣家たるに異ならむ今や未丁年の  
 女子獨身して萬里の異域に遊ぶの社會なるは汝等にも而も男子にして殊に  
 武人ならん且つや其人も頗る多かるは何とて一女子にだも若ざるや心恥  
 かしふにあらぬか如何にぞやと其言懲試るが如く訓辭の如くよして道理  
 あれば皆々恐れつ恥ぢつ奮勇日頃を拾倍してぞ進みける去程は日ならむ

して喜馬拉山の麓まで達しける抑も喜馬拉山と云へば地球第一の高山  
 よしもあれば其絶嶮さごと云はん方かく各々仰見て苦と斗りし驚愕た這  
 の逆を通過べきやうなして亞歷山大は其旨上進しぬれを亞歷山大も亦  
 之を見て如何様當山の通過ること叫ぶまじと思ひければ早速使者を飛ば  
 して拿破崙の本陣に伺ひけるやう先鋒亞歷山大の軍勢早くも喜馬拉山の  
 麓まで達しけるお其山の絶嶮さごと逆も通過すべきやうなして見受候就ま  
 道を右の方緬甸に取らんか這にチト迂遠なきとも己むを得ざる儀と相考  
 候命せ承はりしとあり拿破崙之を聞いて曰く先年歐洲に朕を妨碍する亞力  
 伯山ありし一今又亞細亞に豈に朕を妨碍する喜馬拉山あらんや然れども  
 彼まに亞力伯山よりも亦一層高く且つ嶮したことおしあれば若し朕が行  
 軍を妨碍することしもあらば踏崩し通過べし朕が心既に決せり何んぞ道  
 を轉ぜん暫らく朕先鋒に進まん程は汝疾く歸りて主なる亞歷山大に云へ



保那巴爾的喜馬拉山を踏崩して通過るを電鑑よし後より續々と懸て先陣  
 一進ミ士卒ヲ命じて大砲を車より下し之を空木に入れ一門數十人をして  
 運轉さしめ輜重糧食亦盡く兵卒試して之を負擔にしめける殊に大砲を  
 轉運ぶ者の難役なるを以て之を勵まさんが爲め約して言へらく能く一門  
 を運ぶの一組は一千「フラン」を賞せんと兵卒悦ばせしめて曰く唯だ名譽  
 を受けんのみ何んぞ金貨を望まんと勵精奮力曳々聲して遂に進んで山腰  
 母至りたる是れより上の空氣薄き登るべうらざれば中腰を越して進み  
 ける此時まで喜馬拉山の絶頂に腰打掛て見物し居たる軍書狂夫即ち夢筆  
 怯夫の拿破崙の軍勢見えむありければ這の何處へ行きけんと思ふに虚勞付折か  
 ら俄然山の腰下震動しうべ這の何事の出来しやらんかと思へば手足戰慄  
 鼓動て最と怯怖らしなれども其處が怯怖さも見たさの人情なれば鼓動  
 つゝも瞳子を定めて樹木の間と透見せば豈母國らんや這の何處へ行きけ

んと思ひし拿破崙の軍勢れ過るよ其猛勢宛然喜馬拉山の崩れミ數千萬  
 の獅子の奮然荒出たるが如くありなれば夢筆怯夫驚一愕愕精神殆ん  
 ど天外母飛び去る者の如く讀者或は拿破崙の行軍の見えむなりしを疑ひ  
 怪しむ者あるべしと雖ども這の燈臺下の闇さよて樹木の爲めは掩れて見  
 えすなりしなり間談休題去程母拿破崙の喜馬拉山あること數日數夜  
 終母東隅に達しければ一息つぎ茲母暫らく後軍の續くは待ちけるよ  
 懸く程おく亞歷山大來りなれば拿破崙大に歡び卿早くころ續きたれ卿の  
 一世の豪傑古への天下を震動せし者固より其筈なれと云ひつゝも亞歷山  
 大を携ひ一層高さ處に攀登り下を視て曰へるや支那十八省我が目中よ  
 あり日おらむ取て以て卿に予んのと亞歷山大拜して曰く幸甚し拿破崙  
 其耳母附せ語て曰く洛陽長安の古代帝王の地卿亦洛陽若くは長安母居ら  
 んとする乎曰く然り拿破崙曰く不可朕嘗て地圖を觀るふ此れより迤北數





拿被崙力  
喜馮拉山  
拔身之氣  
亞細亞之蓋



月新



百里地百り北京と云ふ東の渤海と襟し北の長城を帯ぶ是れ天府の王城あり且つ朕之ヲ益得斯答に聞く京都を南方に建つる者ハ常に北地を失ふの患を免れぬ鼎を北方に定むる者ハ南面して全國を控制ること頗る容易しと蓋し此言北半球に就て論ふるものにして人情暖きを欲しく寒きを避く故に京都を南方に建つれば則ち人民ハ皆を南方に聚集して終に北方を空虚とせざるに至らん然るに鼎を北方に定むれば則ち京都を慕ふて寒地に行くもあるべく又暖地を欲して南方に赴くもあらん況して方今の北部蒙古、韃靼里地方も亦支那の版圖に属することおまは卿宜しく此に居るべし支那古人の南面の天子と云へるも亦其れ此等の故にあらんむらん當清朝の此ふ京するも亦故ある哉卿決して此の地を轉むること勿き亞歷山大曰く謹んで教へを奉ると是ふ於て諸軍に令し吐番即ち古へ南蠻と稱るの地を望んで下らしめけるよ山坂壁立母して且つ高山のことよしあれ

む四時雪を被さるよ又加ふるに時しも冬よ向ひぬれば雪ハ皆氷と化り滑なること云ハん方おく其疾きこと瀛車をも厭あつべかりければ一瞬間に山麓よ下りける其状態ハ義經、嵯越の坂落ふ驂驛て其山嶽の險阻と其軍兵の猛勢ハ彼れよ數倍せり

第七回

急を聞て支那古今の群帥を招喚ぶ  
天下三分を定めて孔明黄泉を出づ

亞細亞大陸の東南隅ハ一個ハ巨人あり其體甚と大ありと雖ども支那ふてもあつるか將ヲ其腹の内の漢土にありけるか抑も亦所謂獨活の大木とでも云ひつべきや何れ其邊ならん昔し若かりとさハ血氣盛ふして何くれとなく最と類敏りしが大く年寄りて返兒もや致しけん何よつけ漢母つけ甚と愚あることのみぞ多かりある昨今の睡眠を催ふし世乃中よ寐る程樂ハなかりけり浮世の馬鹿が起て働くと出放題ある狂歌を詠ひつ、



も懸て脈を曲て之を枕と一樂亦其中母ありふど孔子其寐言を吐きつ、横  
 臥しが後の白川夜舟轟々然たる雷轟暫し假寐の枕母間睡ける程は忽ち歐  
 洲よりピーンと響く電信は驚き覺め兩眼を摺りつ、之を視まば豈に闖ら  
 んや拿破崙が聖約大爾城を抜き一たび土京若士但丁に歸り歐洲古今の英  
 雄豪傑を徵集へて將に亞細亞に亂入んとす宜しく防禦の手術をなまべ  
 と自國人の彼地母ある者よりの忠告ありければ驚一驚愕一愕胸を潰し  
 其あさん所と知らむ暫し茫然としくありけるが斯くてあるべきはあらざ  
 れむ我邦古昔より英雄豪傑に乏しうらむ片時も早ふ八方は使者を遣はし  
 今現存する者の固より既ふ黄泉に旅行しぬらん者又は未だ生れざる者  
 にも皆其危急を告げふば自國の存亡誰の未會せざる者あるべきと思案  
 しつ急ぎ八方に使者を遣はし都會々々の電信あるの地は急報が通ちけ  
 るより古今の英雄豪傑驚愕こと甚だしく皆々取る物とも取り敢て北京を

指して飛ぶが如く馳集ひける其軍勢幾百萬と云ふを知らむ人心胸々々  
 那本邦全土駭然たり虚談妄説紛々一犬形を吠ゆれば千犬聲を吠え針小の  
 事も棒大に傳へ歐洲の海軍に既に吳の地福州に侵入をり陸軍も亦已に喜  
 馬拉山を踏崩し吐番の境界をも打越る蜀の地母亂入れり去れば片時も安  
 居なり難し北に逃んり將た東母走らんか一部一地乃兵亂おれば逃走るべ  
 き處もあれど今ふも支那全土に一大戰場と化るべけむを何れへも逃走る  
 べき處はなし吐嗟悲哀べし天我々を見棄給ふも亦甚しき哉斯く浮死目状  
 見せんよりふどて寧ろ大地震等をもて一時に殺さるるやなど、咄やくも  
 あり老人婦女子に號哭と泣叫ぶ其混亂筆舌の能く及ぶ所ならむ讀者宜し  
 く其時の形勢を想像るべし去程に名ある主將、謀士、勇者に皆を集ひ来り  
 又朝鮮よりも數多未會しぬるは如何致しけん獨り孔明見えざれば皆々不  
 審し此席に孔明の居らざるは缺典なり早く使者を以て招喚べしと計議



のうち劉備進み出て云へるやう孔明の人と爲り誠忠無類今此の危急存亡の秋に際し此の會に來らざるに其故をあらめ然れども彼れ一たび來る以上は必を鞠躬盡瘁死して而して後ち己ん諸詮誰彼と云はんより拙者舊縁もあるなれば其使者の拙者行かん但し副使母の蘇秦、張儀の二辯士を附けられたしと諸將皆を曰く是れ適任あり既に斯く決定る以上の片時も早ふいテ疾々と急がし立つれば右三氏の去來と斗り馬に乗り今の臥龍岡にあらで黄泉を指し急ぎたる既にして伏龍が又黄泉に新築一茅廬に來りければ三氏馬より下り柴の扉戸を敲きけるに最と愛らさ童子出で來りやを扉戸を押排さける其時劉備の曰く仙童伏勞せしむ先生は居まいたるう故舊劉備來れりと報せ給へ童子阿と應をしつ後堂に入りて斯くと告げれば孔明の以前に變り既に君臣の縁を結びし由もあれは急がはしく衣を整へ冠を正して出迎ふ劉備、蘇秦、張儀の三客にさらば御免蒙

ると進んで客室に就きにける送の口議果しかば劉備乃ち曰く先生の定めて這回乃一大事を知りつらめおどて出て來まさぬぞ是れ母の深き御思慮もあらんむらん厭はしむらむの聞らまふし孔明申したるに某とても敢て深き思慮あるよのあらねども普通の考へを以てするに拿破論が勢ひの猛烈こと譬へん物なく龍の水状離れ虎の山を出づると云ふも愚か地球の破裂る、と云ふも亦之甚しや及ぶべき之れに加ふる母其軍勢夥多く其兵器精良おれを謀計も殆んど施すに道なからんと思える去れば結局の勝敗を豫め知らるもの、如し去るを懸ひし某出でたればとて何うせん到底無益の徒勞たると免れぬ是甚し某が出でざる所以なり惡くか思ひぞ蘇秦曰く失禮ながら先生開の謬見くり拙者見る所の之れは異おきり拙者之を其拿破論に聞く德行に力の身體の力も十倍すと信し然りと謂ふべし去れば智惠の力も亦猛勢の力も五倍前後乃重量を持てること推知



べきのみ彼も拿破崙の猛勢は古今其比試問かむと雖ども先生の兵略も長  
 ずるも亦東西其類あるを見む去れば彼れは社會第一の猛勢者此き天下  
 第一乃謀士兩者既も世界第一と第一なれば則ち智慧の力の猛勢の力も勝  
 つべきや彼も拿破崙も亦既母許を所なり何んぞ謹慎の甚だしきや孔明曰  
 く辯士開口辯論を知りて實際を知り給はぬあり其嘗て此處に在る劉備  
 主事へて漢末割據の世も出て鞠躬盡瘁死して而して後ち己むも呉魏だ  
 母併せること能はむ却て司馬懿の爲めは屢々困苦られしこともあり其  
 が死後未だ幾許あらむして司馬懿の爲め母天下を一統せられたるは其が  
 甚だ遺憾と思ふ所なり併しが是も皆な其が成敗の道は暗きの然ら  
 むる所なれば天と咎めず人を咎めず唯だ其が短才と悔るの嗚呼僅か一  
 國內の小亂をら尚不且つ斯の如し況んや這回の一大事をや迎ても其が及  
 ぶ所ならむ張儀進み出て曰く先生開口謹慎の甚だしと云ふものなり先生

はうばりの道理を知らぬ者もあらむ去れば母や先生も亦嘗て司馬懿と魏  
 延を併せて焼殺さんと充分に謀りしことの折しも俄然降り来る驟雨の爲  
 めは画餅とありしを聞き天を仰ぎ長嘆て事を謀るに人にあり事を成すに  
 天もありと云われしああらむや拙者聞く成敗を以て人を論ふもの天命  
 を知らざる者なり拙者又之を英儒 斯邊撒母聞く世の英雄豪傑を果し  
 て何物あるや唯だ其は社會一人ありむや然らば彼れ英雄豪傑と稱する  
 者も社會より生出すものとして始め社會全體の性質に誘化せらるるは遂に卓  
 見高識を得るに至るものあり若し夫れ始め之れは誘化せらるることな  
 かりせば卓見高識は遂に養生せられざるべく又英雄豪傑は決して生出さ  
 れざるべし英雄豪傑彼れ決して自ら其偉業を奏したるはありむ其時勢能  
 く其偉業を奏さしめたるなりと我々東洋人より耳新らるる論にて能くこ  
 そ英雄豪傑の事實を穿てる言と謂ふべし就て思ふも拿破崙の英雄たり豪



傑たる所以のものも亦拿破崙其人母あらむして今日の歐洲の社會にあは  
 彼れ拿破崙夫子自ら云へるの言は稱をらく偶達英雄をなますと左れば  
 や拿破崙若年のとき常は我れ屍隊の大佐たれば足れりと云ひしと聞き  
 ぬ是を以て之を觀れむ拿破崙の眞の英雄と稱し豪傑とあまは足らざるな  
 り然るに先生の大廈の將は傾かんとせざる漢末の世を一木一身を以て能く  
 えあれまでの支へたれ關羽張飛馬超黃忠趙雲が五虎の幫助あるもの  
 如しと雖ども此等の人々の必竟先生の器械即ち大廈の將母傾うんとする  
 を支へし棟梁なる先生の使用ふ鑿鑿たるは過ぎず先生の如何ともまべが  
 らざる時勢を能くもあままでの支へざるなれば社會の爲めに謀士たらし  
 めらまじしよあらず社會を左右しぬる眞の謀士あり拿破崙と日を同うし  
 て語るべからむ先生謹慎は過ぐることを勿れ今や我邦の危急存亡の秋なり  
 先生漢末の小亂をら尚ほ且つ之を救へり今此の大危急のとた母迫り何ん

ぞ之を救はざると流石の孔明も二辯士は説かれて小首を傾々轄一言句も  
 なかりたるうち劉備又云々と依頼ければ今に遁るゝ道なく既に濟世を  
 棄てたる孔明も亦再び戰場は出んと約して云へるやう其思ふは世に終は  
 日本支那西洋の三國分らん天下を一統するに逆も及ばざる所又仁義  
 の所爲はあらず然れども其三分の一たる支那丈の免ふ角致さんと三氏は  
 伴はれて北京まで至りたる

○第八回

北京の集會防戦の軍議  
 支那海軍福州母進發を

印説孔明の劉備等は伴はきて北京まで至りたるふ其聚集一軍勢の夥多しき  
 と云はん方なく宛然崑崙山を此處は移せしが如く甚と凄然うりたる状態  
 あれば流石の孔明も膽を潰はまでお驚愕さける斯く夥多しき軍勢なれば  
 固より皆な北京は入ること能くを遠く數十百里の地母ある者少なからむ



去程は孔明北京城に入りたれば愈々軍議を開るんとて千疊布に大廣間  
 名ある主將、謀士、勇者及び辯士等數百人さら星の如く母ど居並ける斯く  
 多くの人集會するも空前絶後の一大事の評議なきを各々謹み慎んで敢て  
 輕々しく發言せざれば暫し程の音もせむ折々咳拂の聲のみぞ聞えける  
 斯くて互に見合ふてのみ母て果しなかりけむ蘇秦先づ口を開き云  
 ひけるやう貴人の多かる中一賤夫憚りもなく發言するに甚と鴨澗ふれど  
 も斯くて各々謹慎を旨とし發言せざれば何時果つべうもあし小田原評議  
 小日を暮さば其うちよの海陸の敵兵共一我が境域に入らん我等既し孔明  
 を伴ふて来れり諸將何んぞ議端を開かざると此の一言一座上漸々動搖  
 いづると見えし程は張儀進み出て凡そ事を議するふに之を決する議長な  
 るべからむ乞ふ先づ議長、副議長を投票せられたしと言ひけるは皆々  
 然るべしと同くたれば是に於て投票したるも多數よりて孔明を議長と

し孫武と副議長と決定するを二氏云々と辭退しが諸將他事の會議なれ  
 む免もあれ軍軍の計議は於て二氏の當撰の固より其所至極の適任誰か其  
 任はあらむと云いんとて敢て許さねば己むことを得ず二氏衆望を従ひけ  
 る聽て孔明議長の席は就き衆に向て本計議の第一着奇の開戦非戦の孰き  
 にあるかを決はるはあり開戦と希望する者起立るべしと言ひたるは總起  
 立なれば則ち開戦と決を次ぎ孔明、主將、謀士、副謀士の三役を定められ  
 ざしとて投票致させんとあしける折から魏の曹操進み出て其投票の暫ら  
 く見合のききたし拙將言ふよしありと言ひければ諸將何事やらんと衆目  
 曹操の方を打守りける程は曹操又語を續ぎて曰く謀士、副謀士二人の投  
 票の議長の申せる如くよて敢て差支なく其儘投票致して宜しかりふんど  
 雖ども主將の事に失禮ながら今當座中を見互すに衆は離れたる名將ある  
 かし皆お伯仲の間はあり偶々其器に當る才能即ち兵智を有する者なき母



あらねども其者は心術正しむらむ又其心術正しき者の敢て其任に適えむ  
 或は湯武の如き其心術正しく且つ其任に堪ふる者かたはあらねども其人  
 々の今當場は會せむ假令此處に會することあるも彼の人々の聖人今日腕  
 力社會の軍事は其當任にあらざるべし今當座中より一人拔れて主將と  
 おさむ其餘の者の必ふ氣分を惡しくどおほらる是き人心の和を得ざる所  
 以の原因なり嗚呼人心の和を以てきるも尚や且つ防禦あるべきや否やと  
 估む一大事の戦争に若し此時に當て人心に和を得ざることにえあらば劉  
 底拿破崙の銳鋒に當ること叶ふまじ故に所詮誰れ彼と云はんより寧ろ  
 障りなく當清朝の君をして其任に就らしめらむと但し總べての兵事を  
 其謀士に當撰る、者をして大元帥として之れに任まべし諸將果して拙將  
 が意見に同するや否や諸將皆を尤もと同じければ謀士、副謀士は二人を  
 投票せしに又々多數によりて謀士の孔明副謀士の孫武と定めけるを孔明

の謙遜く曰く諸將某をして兵略に長たりと思へるにチト見込違ひふも  
 やあらんをらん好しや兵略に長けざりとせんか若し果して然りとせば其  
 兵略の何處より得たるかと問ひざるべからむ某思ふに這は天賦としも思  
 ひれを即ち孫君の遺書に因て得たるは外ならむ去きむ某が謀士たる所以  
 のもの孫君母ありて我れはあらむ是れは由て之を考ふるは謀士の任に  
 孫君おそ然るべしと辭退けるを孫武に急し押止め諸葛先生は這は怪し  
 からぬことと云ふもの哉我が兵書十三篇の後世諸謀士の因て以て敵を計  
 るの資となりつらんと雖ども人各々能不能あり左ればは太史公も亦嘗  
 て史記を編次なし我れと吳若の傳下は評を附して能く之を行ふ者未だ必  
 ずしも能く言ひを能く之を言ふ者未だ必ずしも能く行ひむと云へり我れ  
 兵書を著ること其能とをる所にして或は諸人は優る所もありふん然れ  
 ども實地戰場に臨んで敵軍を破ること其能とをる所にして諸葛先生



の備て置き司馬懿、孫臏等の諸氏にも亦劣れり今日の座上の空論を草く  
 とさふありむして實地戰場に臨て活物を敵手母まると死なれば謀士の固  
 より諸葛先生の任あり但し參謀の爲め母の我れ副謀士の任を受くるによ  
 うんなん孔明又云々と言わんとせしを諸將抑止を今の云々と謙退辭譲と  
 きよあらむ其儘衆望に従ふて然るべしと言ひけるより由り孔明も亦今の道  
 る、道なく謀士の任を受々ふける是ふ於て孔明を大元帥とあし孫武を  
 副元帥とあしふたる既母正副二元帥の任定まりたれば又議事に取掛らん  
 と王孔明衆に向く歐軍の海陸二隊に別れて攻米らんとか聞さぬ去れば我  
 れも亦二軍に對て之を防禦さるべからむ就て考ふるに我れの長むる所の  
 陸戰あり且つ我が墳墓蜀の地の最も早く彼れ陸軍の侵入る處にも當  
 れば我れの陸軍拿破崙を防禦ん孫君の齊人よりて吳王闔閭主母事へしこ  
 としも何れに蓋し水戰も亦習ふよしあらん程に吳越海岸防禦は將とあ

り彼得、納爾森に當られたしと云われけるに孫武も亦其言道理ありと思  
 ひたれば異議なく其意に従ひける周瑜進み出て人各々長むる所を異しせ  
 ると云ふこと、先刻より諸將の云ふ所にして固より然り因て考ふるに我  
 ら吳人と越人の皆を擧て孫將に従ひ海岸防禦の手は附んと欲を齊人楚人  
 及び朝鮮人も亦其半は、此手に附けらまんとこそ望ましむと言ひけ  
 る母衆皆然るべしと同くければ是母於て海陸二軍に別かる、人々決し  
 吳越の人の悉く海岸防禦の軍に屬し齊、楚及び朝鮮人の其半は此の手  
 に隨ひ其餘の皆を陸軍に従ふべしとぞ定められたる孫武曰く歐洲の海軍  
 の漁船を以て來ることなきは甚と迅速うりなん去れば戰端は先づ南方  
 より開けん既し海岸に向ふ人々も定まりぬれむ片時も早ふ打立つべしと  
 て其準備を分りしける既にして其準備整へたれば先鋒より漸次ふ打立  
 ちたる其行軍の光景を見てあれば先鋒第一陣の劉銘傳其軍一萬第二陣の



林則徐其勢五萬第三陣の陳化成其兵五萬第四陣の馮煥其卒五萬第五陣の國姓爺其軍十萬第六陣の周瑜其勢三萬第七陣の陸遜其軍五萬第八陣の孫權其勢二十萬第九陣の海軍元帥孫武其兵三十萬第十陣の海軍副將と一三太公望其卒五萬第十一陣の管仲其軍五萬第十二陣の闔閭其勢十萬第十三陣の夫差其兵十萬第十四陣の伍子胥其卒五萬第十五陣の勾踐其軍十萬第十六陣の范蠡其勢五萬第十七陣の闔廬其兵十萬第十八陣の孟珙其卒五萬第十九陣の張世傑其軍五萬第二十陣の文天祥其勢五萬第二十一陣の李舜臣其勢三萬其餘の皆を某々の下に附かしのける總軍合せて百萬餘野に充ち山ふ巖こり數千萬の旌旗戰艦の秋風靡靡然として空中に漂ふ其狀恰も長魚の水中に躍るに騁驍て甚と凄然とくも亦奇觀ありけり斯く總軍福州を指て急ぎたる斯て其道をがら齊楚吳越の人東西より馳承りて加りけり福州母到着しぬる頃既に其軍勢二百萬の上よどのなりける

○第九回

支那陸軍の大衆西境に進發す  
支那の使者説客北京を出發す

既し海軍の人々を打立せければ孔明は是れよ陸軍防禦の軍議をおさんとしけるに韓信進み出て曰く聞く拿破崙が兵を用うるの迅速なるおと死然瀛車の走るに騁驍て其進撃疾雷耳を掩ふに違あらむと云ふが如しと去れば今の長軍議なすべきときよあらむ萬機元帥の胸中し任せたり若し欠典もあらば其と充補はん諸將の意見如何ぞやと諸將皆然るべしと同ト々れば是きより後の計ひの皆を孔明に任せたる孔明困じ果たる面色母て衆の論み従ひ萬機獨斷したる備て孔明の云へるやう我を嘗て南蠻王孟獲を六たびまで生擒し六たび放ちやりしに彼れ又もや懲むまた我れみ抗敵しぬるを我れ又生擒母し這回も亦放ちやらんとしけるに彼れ七たびめし心服して其子々孫々覆載生成の恩を感むと云ひし義もあり且つ南



蠻ばんの我邦わがくにに先まちて拿破ナポレオン崙わんの進撃しんげきを蒙かうる處ところも當あたれむ先まづ彼れかれに命いのちて歐軍イフロッツム  
 に當あたりしめ以もつて彼れかれ拿破ナポレオン崙わんが兵略へいりやく強弱きやうじやくを試こころみん其使者つかひの我れわれ思おもふ義ぎあ  
 り田單てんだんを正使せいしとし副使ふくしの辨士べんし一人ひとり以もつて附つん蘇秦そしん、張儀ちやうぎの我れわれを招まねきし行  
 きし勞らうも何なにれは這回こたひの范雎はんきうを勞らうせん二氏にし疾しやく々しやくしやく行いきねとの命いのちに從したがひ田單てんだん范  
 雎はんきう阿あと應おうを一つ旅装たびのよそぢをふし聽やがて北京ペキンを打立うちたち南蠻なんばんを指さしてぞ急いそぎける乳  
 明めい又また云いへるや南蠻なんばん王わう孟獲まうかくの許もとへの使者つかひ以もつて打立うちたせ々しやくしやくれば又また別わかれ二人ふたりを撰えら  
 んで外部かんごりー蒙古モンゴリーの成吉思汗ジンギスカン帖木兒タメルランの許もとに遣つかはさん其人そのひとの我れわれ思おもふ義ぎあり  
 孫臏そんりんを正使せいしとし副使ふくしの辨士べんし一人ひとりを附つん蔡澤さいたくの燕人えんびんのことよしもあれ  
 ば其人そのひとの蔡澤さいたくこそ然しかるべし二氏にし疾しやく々しやくしやく行いたねとの命いのちに孫臏そんりん、蔡澤さいたくの阿あと應おう  
 をしつ旅装たびのよそぢをふし聽やがて北京ペキンと打立うちたち蒙古モンゴリーを指さしてぞ急いそぎたる但たゞし孫臏そんりんの  
 管かつて兩足らうそくを斷たじしを以もつて北京ペキン城じやうを打立うちたち折既せつぎ母車ぼしやを命いのちせしあるべし孔明かうめい曰い  
 く是れこれよて外境ぐわいけいへ遣つかはさるべき使者つかひも皆みなを打立うちたせければ是れこれより諸軍しよぐんの備そなへ



を整ひんと時に韓信進と出て曰く元帥の指揮に欠典のあるまじけれども  
日本へ援兵を請ふの使者を遣はさきて然るべしと存ぜらる開の後廻し母  
致さる、ものよもやあらんすらん秘密るらずの聞かまふし孔明曰く去れ  
ばとよ其事をれ我れも亦其思慮をさ母あらねども思ふよ日本の獨立の氣  
象に密む義もあれば恐らくは援兵を出まことあるまじ是れ我が日本へ使  
者を遣はさる所以なり陳平進み出て曰く元帥の遠慮其故をさふあらね  
ども我が思ふ幾の否らむ這回拿破崙の擧の守内を併呑んとする母あれば  
日本も亦憂慮其をさん所知らざる折かとなり且つ我邦破るれを日本豈  
に唇亡びて齒寒きの患をさを得んや幸ひ蘇秦、張儀の二辯士未だ何處へ  
も行かむして此處母あれを成るか成らぬか試みよ蘇秦張儀の二辯士を遣  
はして見給へ成らば幸ひ成らざるも敢て不幸を増すよあらす孔明曰く覺  
支ふ事なれども試みよ遣はすも亦可かなん併し固と覺束なき事なき



正しく我が政府の使者として遣はるべき不可あり宜しく私の遊説として  
 行くべしとて蘇秦張儀の二辯士其意を得させつ聽て日本に渡海せしめ  
 られける孔明曰く既ふ遊説の辯士をも亦打立せしむば愈々陣立をおして  
 西境に出陣せん我邦古昔より主將、謀士、勇者、富めること歐洲列國を  
 併せたるものよ敢て譲らむ故に我れ今百將、百智、百勇、三組を作し陣備  
 と百陣、ふあし一陣、每一將、一智、一勇を附けんと欲す百勇又一よ呼んで  
 百虎と名をべし是れ其平均を得んが爲めなり古來智ある者の勇なく勇あ  
 る者の智なく遂に全勝を得難きを遺憾とせざるもれ少なるらむ今我が陣法  
 の此等の欠典不足なからしめんとほるふありや衆皆を歡喜て曰く是れ新  
 策最と面白ろし早く其人々を定められたし孔明曰く去らむ先づ主將より  
 定めんとて其名を呼ぶを聞けむ即ち五霸七雄を始とし秦の始皇、同ト  
 く白起、同じく王翦、同トく蒙恬、楚の項羽、陽城の陳沙、荊王劉賈、西漢の高



祖、同じく蕭何、同じく曹參、同じく周勃、同じく英布、同じく希布、同じく魏  
 豹、同じく彭越、同じく灌去病、新の王莽、東漢の光武、同じく董卓、同じく袁  
 紹、同じく袁術、三國の劉備、同じく曹操、同じく司馬懿、同じく司馬師、同じ  
 く司馬昭、晋の司馬炎、是れより以下一々記せるは違あらねども其重なる  
 者を擧ぐれば唐の太宗、元の太祖、明の太祖、元璋、清の太祖、愛親、覺羅等、一百  
 人次ぎは百智の名を告るを聽くは即ち司馬穰苴、吳起、樂毅、范增、張良、韓  
 信、陳平、廉翹、龐統、姜維、荀彧、荀攸、賈詡、王朗、郭淮、鄧艾、鍾會、李靖、張  
 巡、李謹行、王德等を始めとし、一百人の謀士何れも皆な奇才子なまむ人々  
 是れく感づける亞ぎ母百勇即ち百虎の名を云ふを聞くは孟賁、夏育、  
 成荊、王慶忌、太史噉、任鄙、卞莊、鞠躡、藺相如、烏獲、籍荅、倉海、樊噲、呂布、顏  
 良、文醜、關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲、許褚、典韋、胡車兒、龐德、張郃、尉遲恭、  
 秦叔寶、王彥章、岳飛、李勇、始め百人の勇者何れも怪力の者あれば人々



愕然として驚くまで一感じける自餘主將、謀士、勇者と名づくべからざる者、皆其々の下、一附るしめたる既母して軍備整へければ先鋒より漸次、西境蜀の地、指して進發しける其行軍の狀態を見てあれば先鋒第一陣の蜀主劉備、謀士龐統、勇者關羽、其軍三十萬、第二陣の秦主始皇、固と謀士勇者ありけれども多くの主將にふらせしを以て欠乏る所出采しとして蜀の姜維、張飛を借りて之れ、一充つ其勢五十萬、第三陣の楚の項羽、主將、勇者を無ね謀士范增、其兵三十萬、第四陣の漢主高祖、謀士韓信、勇者樊噲、其卒四十萬、第五陣の魏主曹操、謀士賈詡、勇者許褚、其軍三十萬、第六陣の司馬懿、主將、謀士を無ね勇者張郃、其勢二十萬、第七陣の燕主昭王、謀士樂毅、勇者、一孟賁を借る其兵十萬、第八陣の齊主泚王、謀士田單、勇者、一夏育を借る其卒十萬、第九陣の唐主太宗、謀士李靖、勇者尉遲恭、其軍二十萬、第十陣の司馬師、主將、謀士を無ね勇者、一典韋を借る其、一十萬、第十一陣以下、一々記す



違<sup>い</sup>あらむ第百陣まで次第と追<sup>お</sup>て進<sup>ま</sup>みける總軍殆んど一千萬に近く數百里の間野<sup>の</sup>ふ充<sup>み</sup>ち山<sup>は</sup>に蔓<sup>は</sup>りて押<sup>お</sup>し出<sup>だ</sup>せる状<sup>さ</sup>に恰<sup>あ</sup>も長城の推<sup>お</sup>し行<sup>い</sup>は異<sup>い</sup>ならむ數千萬の旌旗<sup>は</sup>戰<sup>せん</sup>幟<sup>し</sup>の懸<sup>けん</sup>然<sup>ぜん</sup>として空<sup>そ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に躍<sup>を</sup>りて人目を眩<sup>くら</sup>ましむ中<sup>ちゆう</sup>にも百勇の人々少<sup>す</sup>持<sup>も</sup>てる兵器<sup>へいき</sup>の何<sup>なん</sup>れも百斤前後の擊<sup>う</sup>ち物<sup>ぶつ</sup>なれむ觀<sup>かん</sup>る者誰か驚<sup>おど</sup>愕<sup>がく</sup>ざらん皆々膽<sup>たん</sup>を潰<sup>つぶ</sup>しける斯<sup>か</sup>くて整<sup>せい</sup>々<sup>く</sup>堂<sup>たう</sup>々<sup>く</sup>として進<sup>しん</sup>み國境<sup>こくさかい</sup>ふぞ在<sup>あ</sup>陣<sup>じん</sup>しける

### ○第十回

蘇<sup>そ</sup>秦<sup>しん</sup>、張<sup>ちやう</sup>儀<sup>ぎ</sup>雄<sup>ゆう</sup>辯<sup>べん</sup>を振<sup>ふる</sup>て德<sup>とく</sup>川<sup>せん</sup>ふ説<sup>せつ</sup>く  
德<sup>とく</sup>川<sup>せん</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>利<sup>り</sup>害<sup>がい</sup>決<sup>けつ</sup>せむ外<sup>がい</sup>客<sup>かく</sup>を斥<sup>しやく</sup>く

南<sup>なん</sup>蠻<sup>ばん</sup>、蒙<sup>もう</sup>古<sup>こ</sup>への使<sup>つか</sup>者<sup>しや</sup>も日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>への遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せつ</sup>も同<sup>どう</sup>日<sup>じつ</sup>ふ北<sup>ぺい</sup>京<sup>きやう</sup>を打<sup>うち</sup>立<sup>たち</sup>けるなれども南<sup>なん</sup>蠻<sup>ばん</sup>、蒙<sup>もう</sup>古<sup>こ</sup>の使<sup>つか</sup>者<sup>しや</sup>の陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>を歩<sup>あ</sup>むのよして日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>への遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せつ</sup>の海<sup>かい</sup>路<sup>ろ</sup>を行<sup>い</sup>くものあれば南<sup>なん</sup>蠻<sup>ばん</sup>、蒙<sup>もう</sup>古<sup>こ</sup>二<sup>に</sup>國<sup>こく</sup>への使<sup>つか</sup>者<sup>しや</sup>未<sup>ま</sup>だ其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>の都<sup>と</sup>城<sup>じやう</sup>未<sup>ま</sup>だ到<sup>いた</sup>らざるよ日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>への遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せつ</sup>者<sup>しや</sup>の早<sup>はや</sup>くも長<sup>ちやう</sup>崎<sup>き</sup>よぞ着<sup>ちやく</sup>ける是<sup>こゝ</sup>に陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>よ未<sup>ま</sup>だ鐵<sup>てつ</sup>道<sup>だう</sup>の設<sup>せつ</sup>けなきに海<sup>かい</sup>路<sup>ろ</sup>に既<sup>すで</sup>に漚<sup>あ</sup>艇<sup>てい</sup>のあるに因<sup>よ</sup>るあるべし既<sup>すで</sup>にして蘇<sup>そ</sup>秦<sup>しん</sup>、張<sup>ちやう</sup>儀<sup>ぎ</sup>の二<sup>に</sup>辯<sup>べん</sup>士<sup>し</sup>の長<sup>ちやう</sup>崎<sup>き</sup>



一到着しければ一辯試ひまをたこと申しける。此處こゝの王城わうじやうふあらねば辯舌べんげを費す  
 も到底徒勞つまらぬたるを免れぬ如ごとく覇府はふ江戸えどへ行かんよとて懸かぐ又瀛船えいせん一  
 乗のりて江戸えどを指さして急いそぎける本著ほんしやくの固こと夢ゆめふして古今列國ここんれつこくの英雄豪傑えいゆうごうけつ一  
 時ときに會あはするの組織くみたちあれど其時そのときに何時いつあるう是れまで記す所ところにて定さだま知  
 るべうらざれば讀者よみもの或あるは之これを疑うたがふらんと雖なほども夢ゆめのものたるや今前いままへの時  
 を見て居ると思へば忽たちちよして後のちの時ときに移うつり後のちの時ときを見て居るかと思へ  
 を後のちた前いままへの時ときに歸かへる等取留とらひどめあさむ其常そのつねあり是れ本著ほんしやく其時そのときの定さだま別わかたざる  
 所以ゆゑなり然れども夢筆ゆめふで子の心こゝろに拿破崙ナポレオンが常つねに宇内うちうちを併吞あはせんと欲ほするの志  
 を懐いだけるふ實録じつろくふては彼の聖約サンシャウケル大爾城たにんじやうを遂ついに母はは抜ぬくこと能あたはむして歐洲イッロツパに  
 歸かへりしを由縁ゆゑも善よく拿破崙ナポレオンの舊友ふるとも希里波シリバの談城だんじやうに居ゐたるを夢ゆめに計策けいさく入い種しゆ  
 子こよ一奇計きけいを運たらして遂ついに談城だんじやうを抜ぬきたりとし其氣そのきふ乘のりりて歐洲イッロツパ古今ここんの  
 英雄豪傑えいゆうごうけつを徵集めいしつして亞細亞アジヤに亂入みだれいも亦またを聊いさか主しゆふしぬるものなれを多くは



拿破崙の時より従へり但し人物器械等の總て今日まで世よりありしものを用  
ふ今本回より日本の都城を東京と書かして江戸と記したるは拿破崙の時より  
従へるなり間談休題去程は蘇秦張儀の二辯士の江戸より到着しけれ  
ば旅宿を求めて暫く休息する蓋し其時市中の演説講談師或は軍譚落語家  
の蘇秦張儀の渡海着京を聞いて其辯舌の雄能を聴かんとして旅宿より訪ふ  
もあるあるべし是も亦間談なれば休題べし門前より弟子の學にぬ教讀む  
とかよて夢筆子も亦辯士の事を記きに當り思ひを鏡舌仕りぬ我れ豈に辯  
を好まんや其勢ひ茲に至れるあり是れいゝ驚きたりいゝ言ふ事毎に皆  
お賛言あり已むを得ざれむ茲に一法あり即ち辯舌條例なるものを設けて  
賛言を禁止して本項より入らん偕て蘇秦張儀の二辯士の聽て徳川幕府の  
吏員に就く將軍家より拜顔を請ひまつりたき旨通じけるは將軍家も亦嘗て  
より彼等の辯能なる由、耳せしこともあれむ其辯舌如何あらんむらん



此時ふ當り之を試みんも亦一入のことあらんと思ふ所ら外客と速く召  
 連来よと命すふよど吏員の阿と應をしく殿を下り外客ふ將軍家の旨と傳  
 へければ蘇秦、張儀の大王喜び去らば案内願ひまつるとして聽て吏員ふ連  
 き立られて將軍家の前よど至りたる其時將軍家云へるやう二叟千里を遠  
 とせむして来る亦將ふ吾國を利するあらんとする乎蘇秦先づ對て曰く王  
 何んぞ必むしも利を曰はん夫き一利と興まの一害を除く毋若む大王も亦  
 定めて聞き及びつらん這回拿破崙が聖約大爾城を拔き其氣も乘り歐洲古  
 今に英雄豪傑を徵集へて我が亞細亞を亂入すると思ふよ海軍の間も  
 かく我邦兵、越の海岸よか来つらん又陸軍の既ふ印度邊よど到らん何  
 れよせよ是れ亞細亞一殺の患とほる所あり合て強とあり離れて弱とある  
 の普通は道理外人大王乃爲めに計るふ弊邑と合従一力を一よして彼もよ  
 當らば拿破崙の銳鋒も亦敢て恐る、よ足らむ五指の更るく彈くの捲手



の一極ひとしきも若わかくも萬人まんじんの更さらるゝ進すすむに百人ひゃくにんの俱とも母も至いたるゝ如ごとくを貴國きこく一將いつしやう  
 を遣つかひて漢かんを助たすけて以もつて之これを招聚まねまつへ其力そのちからも因よて以もつて西境にしきまを捍禦まもるは是れ  
 名和なわを以もつて漢かんを援たすけて其實そのじつ漢かんを以もつて和わを援たすくるあり和何わなんんぞ歐おうを患うれんや  
 願ねがはくは大王おほきみ弊邑あやむちと從親まがらみし亞細亞あしあ一ひととならば則すなはち日本にっぽん必かならずを患うれおけん徳川とくせん  
 將軍しやうじゆん曰いく子の言則ことごとち可たがなり然しかれども寡人わがひと思おもふ母貴國ははのくにの大國おほくにとして沃野よくや千  
 里殆ほとんど歐洲いふろつ列國れつこくを併あはせたるもの下くだらむ且かつつ甲帶かたたい數かず百萬ひゃくまん古來こらい英雄いゆう豪傑ごうけつ  
 の多おほきこと河原かはらの砂石さいしの如ごとく殊ことも孔明こうめい、孫武そんぶか如ごとき歐洲いふろつ社會しやかいも未いまだ嘗かつま  
 あらざる所の謀士ぼんしあれば拿破崙なぽれおんの進撃しんげきを防禦ぼくごんこと甚いと易やすかりおん假令かしや  
 拿破崙なぽれおんの兵鋒へいほう銳利えいれいくして防禦ぼくごんことあり難がたく終すまは貴國きこく十八省じゅうはちしやうを横行たごり蹂躪しよくする  
 ことありとあるも我邦わがくには又一また海水かいすいを隔へだてぬれば彼れ疲勞つかれの上うへ容易たやすに進入しんじゆ  
 らし然しかると懸あひは援兵えんぺいを出だすことしもあらむ彼れ拿破崙なぽれおん憤怒ふんぬし乘あり波風なみかぜ  
 を冒をかして渡海たか侵入しんじゆせんも亦また測はかり難がたし去いれば今日けふ我邦わがくにの安全策あんぜんさくに敢あて動うごか





蘇秦張儀  
類に辯を  
振ふに徳川  
將軍  
説く

蘇秦

張儀



徳川將軍

徳川



ざるよありなんか張儀進み出て曰く外臣大王の意見に逆ふに死罪を免さずと雖ども知る言のぬに不忠ありと聞きぬれに聊う外臣が思ふ義を述んと欲を勝敗の時の運路め知るべからむ若し歐軍勝ちず弊邑にぶることありやせんう果して然ることありとせば貴國の唇亡びて齒寒く骸傷つきて心痛むの患なきを得む且つ對岸に火災も亦安心あらむ松枝町の出火隅田の流を越て延焼ぬるに近き假令一海水を隔てぬるとも拿破崙の抜山海倒の猛勢あれば何でう帯小き海水注意とせんや喜馬拉崙の大山を崩し其土を運び海を填め日本、支那を一連の地續よあしても采らん左らむも朝鮮と對馬、對馬と壹岐壹岐と肥前との間よ三大橋を架ても至らん其時果して防禦なるべきや貴國の四面海水を以て圍繞し天府れ固とあし虎貴の士百餘萬、騎萬匹積粟丘山の如く殆んど十年を支ふべく法令既し明うよ士卒難く安んじ死を樂み主明のふして以て嚴かき將智

よししく以て武く且つ古今英雄豪傑よ之しからむ殊母奇將豐臣秀吉の如き者あり又楠、真田が謀士あり又辨慶、加藤の勇者あれば或は防禦なるべしと雖ども彼れ拿破崙の猛勢の和、漢未だ嘗て其比を見ざる所あれば或は防禦あり難きこともやありあんか遠も亦知るべからず其時後悔臍を噬るとも最早先き母の立たむ其詮あかるべし若し又弊邑勝つことありとせんか果して然ることありとせば隣國の危難を袖手傍觀して援兵を出さざるに隣國の好情を知らざる不人情ものありとて其怨を含むに自然の情勢あり既し心中怨望を懐く日常交際の間事毎に外面に顯われざるを得んや這に未だ其輕きものあり其勢ひに乘り或は其兵鋒を貴國に向くることなしとも斷定べからむ是豈に貴國の利あらんや是の故に願ひくは大王熟ら之を計れ徳川將軍曰く二叟姑らく舎し就け寡人熟考んと畢竟徳川將軍援兵と出まや否や開け又下田は解分るを聽ねるし



○第十一回

日本古今の將士江戸に馳集ふ  
援兵出陣の利害得失を軍議を

斯くて徳川將軍の二人の外客を退る一つ免きを遣うさま思考たれども這  
の未曾有の一大事なれば一慮見よの行き難しイテ古今の英雄豪傑を召集  
へて計議せんとして懸て八方へ至急電報を掛け其電信局おれの地の其最寄  
の電信局より別使配達を以て達しける既に黄泉に旅行しぬらん者の闇魔  
の魔ふ達して出頭を命せ未だ生れざる者の醫師に命て早く生れしめ以  
て古今の英雄豪傑伏會しける去程ふ五畿八道(今日の北海道を合せて九  
道なきども當時蝦夷即ち今日の北海道の公然日本の版圖に入らむ且つ北  
海道ふの未だ敢て英雄と稱し豪傑と呼ぶべた者なきは茲ふ會せむ故に  
八道と記しぬ)より或の漁船に或の瀛車に或の馬車、人力車母亦乗りて  
飛ぶが如く馳集ひる人々の丘山の如く殊母黄泉路の千年以来の武將一

時母出で来るものあれば道路の混雑云々ん方なく宛然日枝、神田の祭禮  
に騁騁て後の人を押さ自然に任するの外其術なうりける幸ひにして衆人  
の志す所江戸の一途母ありたるを以て思ふも増して足の運びに早あり々  
る然きども辨慶、加藤の輩に類し心焦燥て雑兵下卒を搔摑みて衆人の頭  
上は置きつ前は進みける尤も軍勢を要するや否や未だ定りし知れざるこ  
とおれに諸將敢て大軍率率あざれども萬一の用母なきんが爲め母とて各  
々少許の兵卒を引き連れ来るなり然れど其一人一千年の間母生れし者  
なきば其大將分の者のみふても千人前後あることよて各將少なくも五百  
や千の士卒を率ぬ者おければ蓋し合計數十萬の人数ありて斯くの混雑  
しぬるなれ間談休題去程未だ期月ならむして名ある武將の皆お江戸  
母を集ひける懸て徳川將軍、諸將の早く来りしを勞ひて偕て言語を更め  
て云へるや諸將も亦定めて聞き及びつらん這回拿破齋う聖約大爾城を



拔た其氣イフ乗り歐州古今の英雄豪傑を徵集へて亞細亞に亂入り今にもあれ支那チヤイナの侵入おかしらをとの由就きて彼の國より二辯士ふたりの采たそ我れ再説くこと頗る務るもの、如く其一人の古昔戰國の世三寸の口舌もて山東の六國を合従しぬる蘇秦そせんとして其一人の同じく三寸の口舌もて其合従を破り以て秦に連衡せしめたる張儀ちやうぎなり右二辯士打も揃ふて采ぬるの我邦の大利ありむんば必む大害なり彼等の我れは援兵を出さべし是れ萬全の策ありと云ふ其事未曾有の一大事なれば容易く我が獨斷ひそり母もあらむと得ず諸將を招きたり這の如何いかよせんかと問われ諸將暫く答へ難く満場ぢやうじやう恰も水うちし如く靜然しやんぜん母て無人の家屋いへより異ならざりけるも既して一人進み出でもの言いんとしぬるの體なれば人々誰あるやらんと此と其方を守り視まば即ち豊臣秀吉ありければ柴田、瀧川等の諸將の猿面奴諸人ひとは憚りの關せまあらなく何なにを云ふらんとて耳穴みみあなをぞ浚あける乃ち秀吉

の言母曰く未だ諸將の一言を發せざるも猿面先づ發言せんとするの憚りありさよ似たれども斯く無言にて果しなれを以て聊の發言せんと欲を這の黄塚あをくちばしの前座の役目真議士まぎしの後より出席あていしと云へば皆々咄はなと打ち笑ひける开が中なかに柴田、瀧川等の諸將の苦笑がわらして吐嗟あは斯る會席くわいせきふて戯言ごうげんを吐く其意を得こころおど、竊ひそか吟うたやたけり間談まんだん休題きゅうだい秀吉又語を繼て曰く今日の腕力うでぢから社會しやかい今我を援兵えんぺいを出さることありとも支那チヤイナ豈あへ母敢て我れを徳とせんや好しや假令たとへ之を徳とまるとあるとすも咽下のど過あぐれば熱を忘る今日けふの仁義じんぎの爲めは奔走ほんそうまべ丸時まるときあらむ唯だ我が寶刹ほうしやくある所是れ務むべきのみ猿面さるめ聞きく兩虎争ふときの一虎ひとの死して一虎ひとの傷きずごとくと歐支イフ戰せんの一方ひとの疲勞つかれれて一方ひとの滅亡めつじやうんこと必せり其時そのときに當て其疲勞者つかれしものを撃たば一舉いっぎよにして兩敵りうてきを打平うちたんこと最と易かりてん是こゝ下莊げしやうの術じゆつ又職人しやくじんの利とも云ふべし乎諸將の意見いけん如何いかよやと云ふ口の下より一人少



しく憤懣の色にて進み出てれば人々誰やらんと其方試見れば即ち平常豊臣と大中慈の柴田勝家なりければ這い〜と斗り母人々争論こそ起らねばよろしと估みたる聽て勝家形を正して曰ひたるやう豊臣氏母の奇怪あること云ふもの哉彼の仁義のおともしも我れ固より聖人ありねば姑らく开を附不問も隣國の好情のなくて叶ぬものなるは唯だ單へふ利己主義を主張て隣國の危難を傍觀座視て啗之を救はざるのミならむ若しも疲勞ることあらば其の弱氣ふ乘りく之を撃んとしぬるは死ぬ兒の咽喉と繼ると云ふもこれにて不人情馬より甚だしきいなし若し是れをしもなすべくんば如何なる惡事をもあま可きが如し嗚呼亦恐るべし徳川家康進み出て曰く兩將の意見互に其極端に走る争論に此の席上は要あり始らく我が思ふ義を聽ね夫れ一國社會をなま以上の固より隣國の好情をも思はざるべらむ然れども又自國の利害をも想はざるべらむ彼れを思ひ此を

を想ふて其善た所は従ふこと穩當あるべし真田幸村進み出て曰く這い又大御所の意見としも覺え申さむ凡る事を決まるは先づ彼を不隨ふとか將た此を従ふとの孰れう其主義目的定まらざれば事は躊躇ふ之を決する再難あるへし無主義の文明人の忌嫌ふ所あるとか聞きぬ去れば善きまれば惡きまれば其主義を決定せざるべらむ即ち隣國好情の爲め仁義を主義とまると將た自國の利害を謀るを目的とまると孰きか其一ツは決意せざるべらむ諸將の意見の孰れあるか各々其意見を吐露せたり織田信長曰く今日の腕力社會あり我れ獨り仁義を守るも若し彼れ怨を以て徳は報へむ將と如何せん他人の斃んとしぬるを起し我れ又其人の代母斃るの不幸母陷るは豈に又馬鹿々々しきことならむや去れを我れは我が利害を謀る母あるのみ天將ふ歐、支を中原に争はしめ以て一方を疲勞く一方を滅亡しむ是を取りも直さむ天の我邦に與ふる獵利あり天乃與ふ



るもの取らざれむ却て害を被るゝ至るべし諸將何の躊躇ふところかと此時  
 小松重盛、畠山重忠、北條泰時、楠正成、同正行、大石良雄、等稍々不満の色あ  
 りたるが平将門、源為朝、平清盛、源義平、同頼朝、同義經、北條時政、足利尊氏、  
 北條氏康、同氏政、武田信玄、同勝頼、上杉謙信、同景勝、毛利輝元、由井正雪、西  
 郷隆盛等の諸人織田の説を賛成しければ多數を以て兩勇闘ひ一人の疲勞  
 れる一方の滅亡るを待ち一舉して兩勇を併呑んことふぞ決りたる楠正成  
 進み出て曰く我れは専ら利己主義のみ走るの望ましからねども事既に  
 決まる以上の亦何を云はん已むを得ず多數の意見に従ふのみ然れども  
 彼の遊説者の固と公の使者よりあらねども其實政府の内命を受けて承ぬ  
 らん者は相違なく去れむ假令援兵を出さざるも其返辭の禮義を以てし決  
 して無禮の所爲あるべからむ即ち我邦多年疲弊て兵を動さざること叶はざ二  
 隻歸國の日に此義宜しなむ傳へてん若し萬々一貴國 戦ひ破れて危急は

迫るとしもあらば其時の疲弊を冒しても多少の援兵を出すこともやあり  
 おんうこの斷言をべらざれど此言の序母傳へてんと此言以て宜しく彼  
 れに答へよ彼れ或は其飾辯虚辭なる義知ることありとも表す禮義あれば  
 如何とも云ふこと能はざり又敢て深く怨みともせまぐと満座の列將皆然  
 りと同くければ徳川將軍より此旨以て外客に答へたるよぞ蘇秦、張儀の  
 二人の備てこそ孔明の推察違はらむと雖も總て漁船に打乗て本國指してぞ  
 急ぎける去程は日本の諸將の片時も早く兵備を整へんとて黄泉は殘せし  
 衆卒を徵集へ諸港を封鎖し周圍の海岸を甚も嚴重く守りけるるふも九州  
 地方の海岸の水を漏さぬ如く衆兵を布列べ數十箇處に礮臺を築丸砲口揃  
 へ素破鯨倉と云ひ、歐軍まれ漢兵まれ打拂はんとす待構へたる其狀宛然  
 海岸一圓小長堤を築丸し異ならむ其盛大なること人々の想像し任する  
 よも他事なく筆舌の能く及ぶ所あらざりける



○第十二回

孫贖、蔡澤蒙古に至て援兵を乞ふ  
田單、范雎南蠻を行て出兵を請ふ

日本への遊説者よ次で達したる者の蒙古への使者なり是れ南蠻より其道の近きよ因るなるべし孫贖、蔡澤の二人の蒙古の地下を指して急ぎける程よ十萬億度の里程も僅か四十九日よしくど達したる聽て閻魔の廳に至りて言申さんとぞ鳴りける程母一人阿と應をして權門母を來りける其爲體を見てければ其顔色青く尖針の如きもの滿面よ林立一口の鱗に鬚鬚て耳の邊までぞ割れたりたる頭上よ二本の角を蠢かす腰ふの猛虎の皮を纏む右手に百斤前後の鐵棒を突鳴し左手よ張臂甚とも奇かめしく四大の眼八角と見開き采意如何ふぞと問はる、よ二人の怯怖たる氣色なく我々の本部の使者孫贖、蔡澤是まなり成吉思汗、帖木兒の二將よ拜顔しまつりたき旨申述て此の意御傳あれと頼みける是よ於て青鬼早速其意を傳

へけるよ成吉思汗、帖木兒の二將の急がしく正服を整へて二使よ面會致しける其時孫贖曰く此の黄泉も亦既よ風聞ありけりこの這回拿破崙が亞細亞よ亂入の一條よ就き當本部急を八方よ告げられけるよ此邊よ未だ未だ采まきぬる思ふよ山川の障得よ暇とれて今よ采らぬか貴將等の采會あらむとく元帥孔明我々二人試して使者とし貴將等を招きよ達せり成吉思汗貴將の子孫よ采支那の舊土新地合併の一國となりぬるものなきは舊土の憂い即ち新地の患あり貴將等各々力、山を抜き氣、世を益ふの大豪傑なれむ拿破崙の銳鋒を折挫も最と易りてん且つ彼れよ近世の英雄貴將等の中世の豪傑軍書狂夫午睡の夢は是れ千歳の一過此の好時を失はむとて彼れと雌雄を決するに豈よ亦一大愉快あらむや成吉思汗曰く左れむとよ其事よ未だ本部より急を告ぐる者あらねども拿破崙の事はしも世の風聞よ隠れなく此の地中ふも亦既に一ヶ月程以前よ聞えたる夫れより我



又は出陣の準備とあし今方準備整へ々をば打立んとをりける折うら貴使  
 等の御足を勞るるに會ま去らば片時も早ふ打立んとしてけるを孫臍急母  
 押留めて云ひたるや貴將等援兵を出すと決心せむ今は其心のこよく足  
 りまん敢て兵と動きよ及び其故の箇様々々と耳語たる其密語は曰く  
 昔者魏・趙と韓は攻めたるよ韓・急を齊よ告ぐ折しも我れ齊ふありて計る  
 らく其援兵の直接は韓の地ふ出さむして却て魏の虚ふ乘る間接は魏の大  
 梁よ出しけるよ魏將龐涓・韓よありたるが之と聞て忽ち韓を去て魏よ歸  
 りけるを滅寇増兵の奇策を運らして龐涓を馬陵よ打取けることあり彼れ  
 拿破崙未だ茲ふ遠慮あかるべし故に孔明が兵は交へると待ち其戦争方よ  
 關ある時を窺ひ歐洲の虚母乘りて彼の地を襲ふべし拿破崙之を聞かば必  
 ず取て返さん其時我れ臨氣應變の計策を獻つるべ々れを貴將等は昔の  
 武勇を顯はし歐洲列國を蹂躪り給へとなれば成吉思汗・帖木兒の二將よ

覺爾として笑れける开が中よ蔡澤の昔し應候に遇ひし時と異ふし一辯を  
 も振ひまして其用便じける是も成吉思汗・帖木兒の二將の支那ふ縁ある  
 母因るなるべし开の借て置き川孔明が孫臍よ正使を命するとき吾を思ふ  
 義ありと云ひしが我れ其時何の意たるは知らざりけるよ想ひ合はすれば  
 今孫臍が深謀遠計の孔明の豫め期する所母して口もて言はむ唯だ其人は  
 用うるよ因て自然ふ其謀計をあさむるものならん其口もて言はざるも  
 亦孔明の方寸よありて拿破崙を破る秘密を他よ漏さじとの遠慮あらん今  
 覺り得て奇なり孔明屢々錦囊の計を用ゐしが這回に不言の計を用  
 うるか這に亦妙なり我れの舌頭の辯口ころ其妙を得たれ如何よして籌策  
 を帷帳の中ふ運らして勝つことを千里の外母決するを得ん童ふ其計ひを  
 あまこと能はざるのみあらで既よ其籌策よ用ゐられし人と千里同行して  
 覺めを今よして漸く悟り得ぬるに我れあがら愚ありけるよと心竊し想ふ



のミ敢て言母の出さゞりける去るうらゝ孫贖は蒙古に留り蔡澤は返言申  
 さんとて獨り本土より歸りける蓋し北京に歸へらむして直ち蜀乃地  
 向て行くあるべし開の借て置きつ南蠻への使者田單、范雎も亦只管路次  
 を急ぎける然れど里程の最と遠なれば急には行きも着るざりける漸  
 く百ヶ日の頃及ぶ孟獲の在すなる地下より達したる聽て田單這回拿破崙  
 が亞細亞へ亂入の趣き云々と述て言語更めて大王の墳墓南蠻は我邦よ  
 先ちて拿破崙の進撃侵入を被る處よしも當きは早くこそ兵を出して然  
 るべし且つ我が元帥孔明は舊恩もあるれば其恩義は報いんが爲め愈  
 ら出陣おそ然るべしと云へば范雎又語を繼て曰ひたるやう彼の舊恩を報  
 ゆるの時來れるあり去れば表より支那の援兵と稱へて舊恩を報い裏より  
 自國の危急を救ひ心竊に支那の衆兵を却て己が後詰に使用ふと思ふ  
 幾あるなきば出陣母は多く利ありて少しも害あるなし愈々以て出陣こそ

然るべし孟獲曰く其義は最と易かりん左を辯を費して他邦の境を守る  
 母あらず自國の域を禦ぐあり人事あらず我事あり人に依頼れども必む  
 出陣せん況んや孔明が舊恩あるをや如何で此時母當り其舊恩は報はて止  
 むべきや左なきだす拿破崙、亞細亞に亂入の風聞はしも貴國よりも近  
 きことふしあれば過ぎよし仲秋の頃拿破崙が君士但丁を進發せしときに  
 於て早や既よ之を傳聞候故其れより日夜軍備をおし既よ整へしことふも  
 あれば今よもあれ拿破崙來らば撃拂はんとぞ待ち居る所あり又昨今巷間  
 其雜説よは拿破崙印度の土人兵と奮闘の最中なりと云ひ或は彼の土人  
 兵をも既す打平て喜馬拉山に近づきぬと云ひ或は喜馬拉山は亦已に踏  
 崩して我が國境に近く寄すと云ふもありて其風説紛々なれば何ぞか真  
 るを知るよしあなれど日ならむして我が國境に來ぬらんこと疑ふべうも  
 あらむかし既よ我れ既に金環三結、董茶奴、阿會喃等を始めとして八蕃九



十三句の洞主の申よしを及ばず帯来洞主、納洞主木鹿大王及烏戈國の兀突骨に至るまで皆々示し合せつ今方我も打立んとて其準備を整ふる折から貴使の来るに會を去来左らば片時も早く打立ん程は二使の歸國して恩人孔明が義宜しなふ傳へてん田單曰く元帥孔明我れを當國へ正使たらしむるとき云ひけることあり曰く我れ思ふ義あり田單を正使とす我れ其時何の意たるを知らざりしが今想ひ合はる義何り後こそ知らぬ范睢氏に歸國して返辭傳へてん我も藉らく當國に留まらん是れ元帥不言の謀計なりと范睢は藉々其意を得覺爾として笑る、のみ敢て言よに出さむして歸國をしようける田單乃ち當國に留る讀者其意を得ざるべし開を知らんと欲せば次ぎの回に解分ると聽ねうー

第十三回

火虎火蛇を放ちく田單歐軍を破る  
 火虎火蛇狀連返して愷撒敵を敗る

歐軍先鋒亞歷山大が拿破崙尾ふて喜馬拉山を打越々吐蕃の地を望んで下りける事の第六回末段に見えしが第七回より第十二回までは時を戻して支那日本の事を記しぬ蓋し拿破崙が君士但丁を發進して喜馬拉山を打過まで乃月日は支那に於て其急を聞て古今の英雄豪傑を招喚るより田單、范睢の南蠻に到着せしまでの光陰に當るなるべし實事は彼此同時に於て演をべきも筆舌の不完全なる彼此の有事を同時記すこと能はむ孰も前よして何れか後ふせざるを得む曲亭主人ハ犬傳を編次なし犬坂毛野が鈴の茂林に於て父の仇敵龍山近東太緑連假名龍山免太夫緑連と擊果す事を寫すに當りて言へることあり曰く這日毛野、莊介、小文吾們が敵と三所の挑戦は皆な是れ同時の事にして長譚、綴語の上にもあらむ各々其首よ刃を交へて勝者は勝ち負者は負け奔者は走り逐者は逐しのミ都て小靈時の事おれども是れを文に綴るときは形容あり語勢あり三方四方を一



緒に合して寫し得べきにあらざれを思ふも似を長くおれる状徳にあら  
 けと言ふもあらん歟今母寂めぬ事あがら只瞬息の事なるを數方言に綴る  
 も則ち是れ文字にあり又數百年の長々しきを數行の筆に約舒るも亦是れ  
 文字の上ふあり升を思はむ目前の理を推考者は古語母云ふ琴柱に膠す  
 るあるべしと間談休題去程母亞歷山大は喜馬拉山を下ると先再び先鋒  
 母復り吐蕃の國境に侵入ける此時孟獲諸軍と共に西境に出陣せしと先  
 母當りける其事は前回母記しぬる所なるが茲に至て兩軍端なく出合ひけ  
 るあり其將に戰端を開うんとしぬると先格里智西、亞歷山大に勸めて  
 敵を撃んよの宜しく奇兵を出して之を破るべし印度の戰爭善た段鑑なり  
 と云ひけるよ亞歷山大曰く鷄を割くよ馬んを牛刀を用ゐん今彼等鳥合の  
 弱兵を撃んよ何の奇兵を要するおとの之れあらん先きよの大衆ありたれ  
 ばこそ一時は假敗しぬれ今に猛獸あるふし何んぞ鷄を敵手よ大任掛しく

牛刀を振らんや進めや進め去來進め彈丸は霞と飛び采るも野蠻人の砲發  
 放屁に似たれを其彈丸何てぞ痛傷るべき唯だ屁氣よ馬騾く火藥の具氣あ  
 るは又劍は林をなまとも兒戯の銀紙刀よ異なるらむ何んの其の猶豫こ  
 とか行々や行け々皆を諸共よ引くな進めと令まる程ふ端雄の壯士の  
 砲口揃へく進まざるよ怪むべし何物とも知れを敵陣より尾に炎々たる炬  
 火を照たる四足の獸幾千百と見分ぬ程荒出さるまよ、箱々近づきぬれば  
 這の何物やらんと熱視れば這は甚麼如何よ此は如何よ鷄を割くよ牛刀を  
 用ひすと云ひしが火牛よ勝る火虎豹、火豺狼、火蛇蝎等なりければ皆々驚  
 愕て我よ漸く象鼻を適れよに又虎口よ遇ふ我々嘗て同じ人類とい戦ん  
 と期しされ未だ異なる猛獸毒蛇と聞いんと期せざる所ありと云ふ間も荒  
 々の猛獸毒蛇の何の會釋もあらばおそ尾の熱さふ堪り得ず牙を張り爪を  
 舞し怒り猛りて陣中よ突き入り縦横無碍よ憤奔怒走よ何よのい以堪



るべき或は啖殺され或は踏殺され或は獸尾の火に焼爛れ半死半生の間  
 ふありて苦聲もありける程に木鹿大王田單を謀士とし五萬の猛卒を率ゐ  
 火獸火蛇に尾ふて来りし者咄と嚙た中軍目的に突撃けるふぞ歐軍先鋒總  
 敗軍となり第二陣愷撤の備に解れ蒐りける亞歷山大は此の爲體を見て烈  
 火の如くは憤怒り馬上に直立揚り大音聲を呼りて曰く蓬き味方の舉動か  
 お下等の動物たる獸蛇母だも敵を能くす何で上等の人類と戦ふこと  
 叶はんや耻辱は知らん者取て返せと鞍を打叩き鎧を踏鳴はも誰か耳に  
 入る者あらばころ大軍の亂れ蒐りし習慣とし四零八落右往左往ふ散亂ぐ  
 れば亞歷山大心而已の前もあるも其身の識らむ知らむ敗衆と共に後邊に  
 ぞ下りける是に至て讀者中始を孔明が思ふ義ありとて田單母南蠻の正  
 使を命せたるの意即ち不言の謀計は或は悟り得る者あらんか若ん果して  
 之れあらば莞爾と一々笑るべし這の明々地は孔明の意を顯はさむして讀

者其意を推察を以て味はひありとす是れ孔明が孫臋を思ふ義ありとて  
 蒙古の遣はしたるの例を推む容易く知り得ることおれども讀者或は孔明  
 田單の故事を知らざる者あるか或は之を知るも悟り得ざる者ありては折  
 角筆子が彼れを知り我れを知りて企てたる謀計も水泡に屬するの恐も  
 あれば聊る孔明の意を現はさん昔古田單即墨に籠城せし母燕將騎劫水  
 も漏さぬ斗り取圍けるに田單に敢て怯怖たる氣色なく千餘りの牛に皆  
 な五綵の龍文を書きたる絳繒衣を被せ兵刃を其角に束ね脂灌げる筆を尾に  
 結び其端を焼た城内より外にかけ數十個の穴を鑿り夜竊ふ其火牛は密手  
 の陣に縦ち城中の壯士五千入其牛尾を隨て人獸奮激突戰大に燕軍を破り  
 しことあり又孔明嘗て南蠻を征しとき孟獲木鹿大王の援兵を得しとき  
 虎豹豺狼蛇蝎等を放ち一たびの蜀の軍を損りしことあり是等の故あるを  
 もて孔明の思考ふるやう這回も亦南蠻の猛獸毒蛇を驅集ることもやあ



りふんと思ふ所からして之を指揮するに田單こそ然るべし敢て口もて  
 言ひざるも田單をしく彼の地は違ひさば田單必我が意を悟らん是れ秘  
 密を他母漏さるの策ありとて言ひを語らず唯だ思ふ所ありとて田單を  
 正使に充てたるあり備て田單の兵刃を束ねべき牛も亦く又牛は易ふるも  
 信乃が火猪もあければ兵刃に附くことならねども兵刃は勝る猛獸毒蛇  
 なりければ兵刃あしとて之れは増をよしあらんとて尾は炬火を結びし  
 のミよて放てるなり斯くて田單が放てる火虎火蛇の益々猛り荒て歐軍第  
 二陣愷撤の備へ近づきける且つ烏戈國の兀突骨が藤甲の軍及び孟獲が  
 慄悍の士等數十萬の軍勢火虎火蛇は尾ふて殺到しけるより隣れ愷撤の備  
 へ亦一蹴散しの下は蹂躪らまんを状態に見えよける去程愷撤の部將  
 安的尼急足しく愷撤の前母来り敵の放てる火虎火蛇の勢ひ猛くして殆ん  
 ど當るべからざるもの、如一寸時早く奇兵を出まか左らむば早々虎

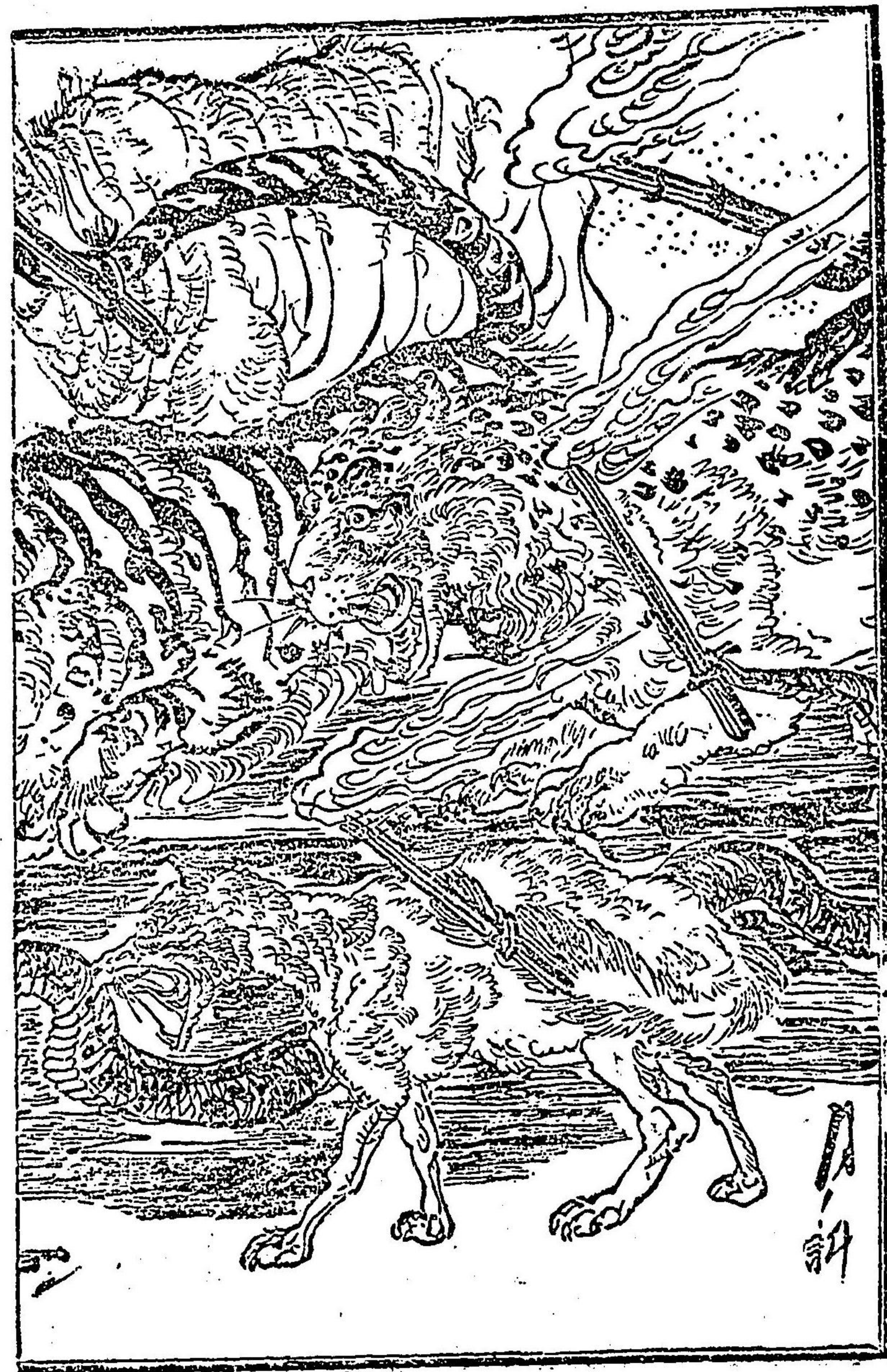
口を避々て然るべしと云ひけるに愷撤曰く左ればとよ其事なれ昔者木鹿  
 大王が虎豹豺狼蛇蝎を放てるるとき孔明の木製の甚と大きある獅子と造り  
 て戰場母出敵の真獸を走らしけるが今其法は習ふこと能はる然る  
 一宗の王徳が敵軍邵青と對陣せけると先邵青が火牛の謀略と用ひけるに  
 王徳笑ふく同謀を二たびするは奇あり今我れ之を追返さんと云  
 ひつゝも備へを嚴重く固め敵の火牛間近くなりぬるまでは敢て動かを既  
 よして近づきぬるを圖り數千萬の鐵砲の火蓋を一齊に鑢て發ちたる母ど  
 火牛は愕然として大に駭き頭を立直し味方邵青の陣中へ荒入たることあ  
 りしが我れ今王徳の法は倣はんと欲を我れ又同謀二たびする母似と  
 れども勢ひ迫れば己むことを得去来左らば砲隊の皆疾々前軍母布列  
 ぶべしと令の下に砲口揃へて布陣しける間も荒々の火虎火蛇等は皆を猛  
 り狂ふて愷撤の陣近くなるまゝ母數万の鐵砲の火蓋を鑢り天も崩れよ地





田單火角  
 大蛇と  
 殺す  
 飲す  
 小

百四十三



百四十二

月計



も壞けよと發ちける其音萬雷の轟く母驕驕て凄然じかり々れば火虎火蛇  
 等は大小駭き始めの氣色何處へやら皆々頭を東母廻し味方の陣中へ荒入  
 けるより南蠻の勢は案外の事驚くこと限りなく上を下への混亂云  
 はん方なく殊母鳥戈國の兀突骨が藤甲の軍に其甲固と藤を油浸して日  
 光に曬せしものなまば刀劍鎗矢は透らねども火は最と傳り易きものな  
 れを竟に鐵砲の火燃え添り全身猛火とあり苦聲と泣叫ぶの憐れと云ふも  
 亦愚なり地獄の責も斯くやあらんと思はれける是に於て愷撒を始め鐵砲  
 を連發てる後は敢て勞せむして敵軍を破り遂に大勝を得たり彼の藤甲の  
 軍を損りしが如きの全く事の案外ふ出て奇功を奏するに至りしものあり  
 南蠻に此の一戦は最大敗を取り最早歐軍は抗敵の勇氣なかりける讀者或は  
 亞歷山大の田單に敗て愷撒の田單に勝しを見て忽ち愷撒の武勇亞歷山大  
 の右にありと早想する者なきにあらざるべしと雖ども是れ其前後の勢ひ

然るもの母て敢て其武勇の優劣に因る母ありを讀者此の義を思ひねか

○第十四回

歐洲の海軍兵、越の近海に到着す  
 八百八人の謀計周瑜却て破らる

暫らく筆を閑さる歐洲の海軍の地中海を發端するにけるに此時未だ  
 細亞亞、亞弗利加地嶺即ち蘇彝士地峽の掘割あらねば直ち紅海に出で  
 印度洋に航すること能はざるからし力山を抜く拿破崙の猛勢もて百萬  
 の人夫を役して掘割んとお志けれど否々掘割て居らば却て間とれん少  
 しく迂遠も寧ろ喜望峯を廻りて航せんとて聽て地中海の口もと  
 母出で遠く亞弗利加を一周して印度洋に向ひける頃も秋のことおれ  
 ば空天模様定めなく猫眼の如く變るる朝の晴天も當てならぬ暫しが程  
 か中天より寸丸炭驕驕むら雲の現はしと思ふ間もあらせむ荒き嵐し風  
 南方よりぞ吹き来りむらくと散るむら雲の色黒々と物をごく一天忽ち



搔き曇り指墨流は其風情吐嗟甚としく怖しや細繩おせる暴雨の斜に承り凄然とく軍艦大ありと雖ども亦妨碍なれを得を斯ること數回大く間とれて陸軍の吐蕃境に入りける頃漸く安南海母に至りける此處母聊か黒旗軍の妨害ありしうと固より螳螂の龍車に向ふが如く一撃の下ふ塵粉になしてければ又軍艦を進めける程一周間餘りして支那福州を去る殆んど十里斗り沖中ニ錨を下し敵の動靜如何と暫く窺ひける此方の支那、吳、越の海岸ある物見臺に豫て置きたる遠見の人甲手を翳して遙に南海を望めむ雲か山か鳥の舩の水天駘驤て別つべからざるも此處彼處に黒煙の立上るの噴火山としも覺えぬを備てこそ歐軍の進入たるよなき去来左らば望遠鏡もて見んとく望遠鏡の据置れし處母走り寄りつ左眼と閉ぢ右眼もて熱視れば混るべうもなき軍艦母て其夥多したこと殆んど際なく呂宋にも連續るもの、如くおれば急がしく物見臺を下り来りつ斯くと告

げ、れば先鋒劉銘傳の急ぎ戦備をふし母ける斯くて劉銘傳の閩河口を避ること約七里ある處土人の之を稱して馬尾と云む西人の巨大なる古塔ありける狀以て巴格達安哥勒日と唱ふる地にして即ち福州造船局のある處又此乃地と河口との間西岸相逼れる處に二坐の砲臺あり此の峽を金皮島と云ふ劉銘傳の指揮せる軍艦一百十艘に此の馬尾の造船局を守護る爲め其前面へ鶴翼即ち新月形に備へて羅列ける母歐軍先鋒案内者克爾倍の軍艦五十艘水雷船二十艘約六百尺程の下流に添ふて同く鶴翼を作り漢艦と對陣なししける頃、幻夢元年十一月二十三日即ち赤壁の戦争の當日に先つこと一日なり豫て克爾倍の二十四日を以て開砲すべいと公告なしければ劉銘傳の真と信し堅く其約を愚守しけるに克爾倍の兵は偽を嫌はずとて約せし期日は先ち二十三日午後一時三十分とも覺はしき頃突然無二無三ふ發砲おしける音凄然とく萬雷の轟くは駘驤を海水に鳴り亘り山嶽



母應へ怒濤を起し天海顛倒しぬるかと怪まきたる程よしあれは何母か  
 以て堪るべき漢軍の先鋒ふ浮べたる揚武號と名くる軍艦の見るくうち  
 に沈没らまける其状宛然暴風雨の一時驟来り一異あらを僅ふ四分時  
 の間ふありけるよぞ餘乃漢艦の之れ一氣を奪われ膽を冷し戦ふの勇氣あ  
 らばこそ少く應戦を試みよまども堪り得ず亂走しぬるを歐艦の道さし  
 と追撃烈しく發砲したりける程に漢軍先鋒の軍艦の大半撃沈めらまける  
 漢艦の轟撃を受けたる後潮流は漂へるを見れば上甲板上満面死骸散亂て  
 腥血淋漓とし夕日に映じて赤光眼を射たりける其甚としく物をぞく隣  
 れと云ふも愚るありる漢軍先鋒劉銘傳第二陣林則徐第三陣陳化成は敗  
 走して臺灣の道れ山中に逃籠りける一歐艦の後世千八百十四年の役と異  
 一し此の役は拿破崙が全世界を併呑まくするの大舉よして海軍も亦數百  
 萬の多きありければ臺灣島の周圍を數萬艘の軍艦を以て取詰十里廿重殆

んど潮流をも堰留やらんを状態の愚か東洋の海中臺灣島あるを掩蔽しけ  
 り去程漢軍第六陣第七陣第八陣の三將周瑜、陸遜、孫權の一場ふ會し如  
 何なさんと議しけれども這回の敵の水戦ふ暗き曹操ならで却て我れより  
 水上に習ふ所の者よして且つ軍艦堅牢兵器精良のことよし何まば殆  
 んど謀のなさん所を知らず暫し三將茫然としてもの言のざりけるよ周瑜  
 進み出て曰く事既に茲よ及べる以上の躊躇ふべきときあらを早く援艦を  
 出しく劉銘傳を救ひざるべからを成るる成らぬか昔し我が赤壁の水戦よ  
 施したる八百八人の謀計を用ふべし且つ夫き今の十一月の末よしもあま  
 を常よ西北の風の吹けども嘗く東南の風の吹くことなし去まば孔明、風  
 外が風折をも要せむして全く其事行われなん陸遜曰く同謀を二たび  
 まるの計の最とも拙きものよし約し敗る、の道なり然れども敵の心  
 を惑はし其目を眩まして故意と同謀と二たびまるの亦一入のことよ



て大い味ひあらん周將しゅうしやうの其邊そのへらの速謀すみはかりありてのおとあるか周瑜しゅうゆ曰く左ればとよ其事そのことあれ我れ察さつするふ歐人いおうじんを我が曩なまに用ゐたる八百八人即ち風火ふうかに謀計はかりごとの得て知る者ものをかかるべし之を知る者ものをけられむ我まは同謀どうぼうを二たびまるも彼れは其同謀どうぼうたるよしを知らむ始めての奇計きけいと思惟おもふらん去れむ同謀どうぼうふして同謀どうぼうあらむ假令かじやう彼れ衆中しゆちゆう赤壁せきの役やくを知る者あるも之を知る位くらいの者ものの必かならずを兵事へいじに賢かしこき者ものにて速慮すみおぼ過ぎる我々われらも同謀どうぼうを二たびまる者ものならじと信まをぢらん是れ孔明かひやうめいが增かま電でん退軍たいぐん能よく司馬懿しやまゐをしをて速慮すみおぼしめたる所以ゆゑなりと陸遜りくせんの未だ不安心ふあんしん覺支かくしをいせして云々言ひけるを孫權そんけん進すすみ出でく曰く陸將りくしやう左ひだりを疑うたがひど我が海軍かいぐん副將ふくしやう太公望たこうぼうの言こと稱なづせむや兵へいを用もちうるの害わざはひは猶豫じゆい最も大三軍だいさんぐんの災わざはひひ狐疑こぎし過あやをばなしと又古人またこじんの言ことふ稱なづす猛虎まうこの猶豫じゆいの蜂はちの蟄せりを致させし若もかを騏驎きりんに踟躕ちゆうちゆうの驚馬おどろまの安歩やすほに若もかを孟賁まうへんれ狐疑こぎは庸夫おんぷの必至かならずに如ごとかを舜しゆん禹うありと雖など

え吟ぎんを知て言ことひさきは瘡しやうの指麾しゆい母はは如ごとかを今いまの狐疑こぎをべきときあらす疾々しやくしやく用意よういありて然しかるべし陸遜りくせん未だ心こゝろの覺支かくしなしと想おもへども孫權そんけんが斯かくまで云ことふを又押返おしかへをもさまがよて己おのれを得えむ其議ぎに従したがひける周瑜しゅうゆ孫權そんけんは多く燒草やせうを用意よういして臺灣たいわん島しま近づちかづき歐艦いおうかんに對たいしける程ほどもあらせむ義律エリザベツトが陣中じんちゆうより水雷船すゐらいせんを放はなせしるに周瑜しゅうゆが率ひらゐたる軍艦いぐさかんは一瞬間いつしゆんかんふ數艘すうざうを顛覆てんぷくさまけるよど疾雷しやくらい耳みみを掩おほふ違ちがはなく八百八人の謀計はかりごとを用もちうることを得えればこそ見るくうちよ大半たいはん沈没しんぼつらまざる實じつに兵へいの拙ちやくの速すみなるを聞く未だ巧たくの久ひさしきを觀みむとにて早くも此事このこと義律エリザベツトの軍艦いぐさかんより軍用ぐんよう船せんを放はなちて彼得ペートル、納爾森ナールセンの陣じんに傳つたへしかば彼得ペートル、納爾森ナール森は數百艘すうひやくざうの軍艦いぐさかんを走はしらせつ周瑜しゅうゆ、孫權そんけんが退路たいろを斷たちぎけるふみ辛からふじて逃にげ延のびぬる者ものも此處このところに至いたて遁のがる、者ものなく周瑜しゅうゆ、孫權そんけんも亦また今いまも魚腹いさぶくに葬はならるゝの外ほか其術そのじゆつをぬりたる然しかるに陸遜りくせんの始はじめより不安心ふあんしんに思おもひぬることよしあまは故意こぎと周瑜しゅうゆ、孫權そんけん



一後きて軍艦を進め其心八百八人の謀計を以て敵艦を燒撃せんおとを思  
 はむ必む味方敗れて米ぬらん折之を救ふの軍よあさんと想ひつ、專其用  
 意とあしむる所へ周瑜、孫權敗走しけるを彼得、納爾森其退路を塞ぎ頗る  
 難戦の状見えければ軍艦を走らせ米りつ突然無二無三に歐艦目的て發砲  
 おしける程一歐軍も亦一時の辟易ぎたれば周瑜、孫權は此間ふ率ふて  
 逃げ延びたる陸遼は一時歐艦と挑戦けるが彼れは悉く海上熟練の兵  
 にして且つ軍艦兵器皆お堅固精良のことふしあれば到底敵をること叶  
 わざして苦戦の折から函癩、國性爺、孫武、太公望、管仲、闔閭、夫差、伍子胥、勾  
 踐、范蠡、闔廬、孟珙、張世傑、文天祥、李舜臣等の諸將援艦を出しければ陸遼  
 も亦漸く遁る、ことを得たり終りの兩軍稍々互角の勢ひを顯したれど元  
 始の歐軍の大勝を得たれを這回お役も亦漢軍の敗とぞ決しける 歐支  
 海上の戦争固より然るべし噫

○第十五回

歐軍敵を海上に迎ふ  
 漢兵敵を陸地に誘ふ

支那敗軍の諸將の一場再會して軍談しける折から此の手の元帥孫武が曰  
 く彼を知り己れを知らば百戦殆からむ彼を知らむして己れを知らば一勝  
 一負彼を知らず己れを知らざれば戦ふ毎必ず敗る人の固と神あらぬ身  
 よしあれば能不能有りて完全なる能はず測るよ此の手に向ひ一歐軍は海  
 軍の妙を得て陸戦は習ひを然るよ我々の海邊ふ人となりし者なりとの雖  
 ども我邦古昔よりの習慣として陸地は戦ふもの其常母して水上は闘ふえ  
 の稀れなきは海 戦は不得手よして陸 戦こそ味方の得手とする所なれ  
 然るを是れまで海上に敵を向ひし即ち彼れを知らむ己れと知らざるも  
 のなれば戦ふ毎に敗れし固より其所なるを知らず兵を交へし我れな  
 がら愚なりき悔いて返らぬことながら實母悔しきこととしてけるなり故ふ



今彼を知り己れと知る所より測れば彼を陸地母誘導くも若くはあし是れ萬全の策なり諸將以て如何とあす太公望曰く開の拙將も同意なり而て其陸地母誘導の方法は如何にして可ならんか聊か拙將の存じよりもあれは試みに之を迷んば天下を利する者の天下之を啓き天下を害する者の天下之を閉づ即ち拿破崙の天下を害する者なれば終に天下拿破崙を閉ぢ地球の廣さも五尺の體敵を容る、處あきよ至らんこと必せり然れども差向海上は兵を交へるに敵に得手なる所にして且つ其兵器精良なるは引換へたる味方の不得手なる所にして且つ其兵器精良ならずも到底勝利の覺支あし左りとて陸地母誘導くことの甚だ難し假令一時誘導くことを得ると雖も敵若し其不利なることを知らば後に容易く上陸あきや唯だ吳、越の海岸を砲撃し此處は顯れ彼處に出で東南の海岸を荒さんこと秦鏡は掛けて視るが如し敵の出没別たざるときは際一夫れ東

を防げ南を守れと彼是は奔走らば其備へ必む亂ん然るときは敵は此機に乗じて上陸して思ひの儘母荒れ廻らん其時よ至らば如何にして之を防がん智將も亦其術なかるべし前さにも云へるが如く拿破崙終に天下の閉づる所とならんあはと豫め知る所あれば我々の敢て敵は勝つを要せむ唯だ程能く相手は敵を防ぐを以て其務めとあまべし管仲曰く望君の意見至極せり然れども其程能く相手ふと云ふも亦程こりあれ愚案母據まば到底多少の損害のあるものをなれむ不本意ながら濟、吳、越等の海岸の住民をして數里の内へ退かしめ我々も亦海岸を隔つること數里の内へ陣を布き夫れ夫れ奇兵の手配をもなし置きて姑らく孔明が拿破崙を破るを待たん拿破崙の根本より彼得、納爾森等の枝葉なきば若し拿破崙だに破るれば海軍の戦ひを以て損れなんこと亦明かあり斯く海岸を清めば敵艦如何に破撃せると雖も驢母云ふ蛙面も尿よて敢て意とまるよ足らむ敵若し心焦燥



て上陸すること一もあらば孫君の所謂彼を知り已れを知るにのよて味方の得手敵の不得手思ひは儘に謀り撃つべしと諸將皆然るべしと同しければ早速齊、吳、越等海岸の住民母對しく數里内は退らしめ諸將も亦各々其備へをふしむける斯れば歐軍も亦一時の諸方の海岸と破撃しけれども蛙面母尿ふて敢て驚くの氣色もなく少しも其功あるおれば心煩は焦燥て上陸おさんとしなれども納爾森深く兵略母通し敢て輕々しく上陸おさしめを始らく敵の動靜を拿破崙の進撃其勝敗の報を待ちたるよぞ海軍の始らく休兵の姿とありよける

○第十六回

第一戰孔明、拿破崙を破る

第二戰拿破崙、孔明を破る

再び筆を陸軍に戻さん拿破崙は吐蕃の戦争も亦印度の合戦と同じく親ら手を下まし及ばせりて早く勝利を得よければ其氣母乘り一掃お蜀の地を

蹂躪らんと欲し地球も崩れやらんを猛勢ふて雷進したる程は稍々蜀の地ふぞ近づきける此方の孔明此由を聞き備ては孟獲も田單も拿破崙の猛勢よの當ること叶ぬる左りとい亦聞さしは優し思ひしは踰したる武勇よなよし其事あらば我れ亦其計ひこそあきとて第三陣ある漢の高祖を招き命をるやう貴將の嘗て蜀の棧道を破壊し復た之を修繕ひ兵事母於て土木の功著しければ我が襄八陣の陣法を布くの地持を務むべし昔者三國の世數回施したる八陣の表八陣母して襄八陣の陣法に我れ未だ嘗て之を用ゐたることなく姜維母も亦傳へを故に世得く之を知る者おし今回敵手が拿破崙にして尋常の者おらねば平凡の陣法の施さとも其功なけん故に千有餘年秘し置きたる襄八陣の陣法を用ゐんと欲を貴將慎し務めて忍よすべからむ其陣法の圖に此なりとて一面の圖を渡されければ乃ち高祖披き見るよ休生傷杜景死驚開の八門あること表八陣は異おらねど元陣



中縦横なかつまこ一引ける朱引しゆりきの道路みちに悉く生道いきみちとして其餘いそぎの皆を死地しじあり死地しじの  
 即ち地ちを掘ること數丈すうぢやうとして薄うすき板いたを以て蓋かた状じやうとし少く土つちを載のて平面たいめん  
 此地こゝに偽造いつはりつくりり其上そのうへに蕪人形わらにんぎやうを散在さんざんせしむるものありければ高祖かうそ轄とらし感歎かんだん  
 の聲こゑを得斷えだたを既すでにして高志かうしに又樊噲はんくわい等ら命いのちせて右襄うら八陣はつじんの地ち持もり取掛とりから  
 一めける斯かくて孔明かうめいの夫つまきくの手配てくばいをもなし既すでに備そまはりなれば今いまや遲おそ  
 しと待ちかけたる程ほどに歐渾イフロツムも亦程またほどなく蜀しやくの境さかい母ははを迫せまりける拿破崙ナポレオン嘗かつて聞  
 く兵略いりさふたぐの漢土かんちで孔明かうめい日本にっぽんで楠くすのきと然しかるふ支那チヤイナ陸軍りくぐんの元帥げんしゆに孔明かうめいなり  
 と聞きぬれば之れに逢あふて其武そのぶを比くらべんこと最さいと一愉快いちたうきこと母思ははをひ  
 ければ親おやら陣前じんぜん母馬はを出だし左右さうぶに亞歷山大アレキサンデル、懼おそれを備そまへ孔明かうめい母逢はて一  
 言ことを申まをさんと呼よびりければ漢軍かんぐんの陣中じんちゆう母門かど旗はた飄ひらと開ひらけて劉備りうひ、曹操さうそう左右  
 に分われて馬うまを躍おどらせ一隊いちたいの大將だいしやう次第しだいを亂みださむ兩邊りやうへんに備そまへ孔明かうめい四輪しりん車くるま母端はたん  
 座ざし綸りん巾きんを藏いたき鶴つる氈のけこもと被まて右手みぎてに羽扇はうせん握にぎり中央ちゆうやうより推おし出して向

ふを此こゝと望のぞみ使つかひを以て支那チヤイナの元帥げんしゆ茲こゝにあり拿破崙ナポレオン出いでよと呼よびらせけれ  
 ば拿破崙ナポレオン近々ちかぢかと馬うまを出だし通辨つうべんを傍かたはり侍はべらし孔明かうめい能よく朕わがが一言いちごんを聞き玉たまへ  
 朕わが久ひさしく御邊ごへんの名なと聞きて幸あいふ遇あふとを得えたる御邊ごへんの固まと仁愛じんあいの心こゝろ厚あつし  
 何故なに社會しゃかいに兵亂へいらんを斷たつことを欲ほせざるぞと云いひなれば孔明かうめいも亦また通辨つうべんを  
 側かたはり居ゐらしめ答こたへて曰いはく我われれ固まより社會しゃかいの兵亂へいらんを斷たんと欲ほせるの心こゝろあり然  
 れども此こゝの事こと今日こんにちの社會しゃかい母ありてい未だ能よく行いはるべきことならむ我われれ  
 豈いかに兵亂へいらんを斷たつを欲ほせざらんや列國れつこく對峙たいぢの時ときに當あたりて愛國あいこくの心こゝろなき者ものあれ  
 ば其國そのくに破やぶる其國そのくに破やぶるれば其人そのひと亦また世よに立つ能よいざるを如何いかせん拿破崙ナポレオンが曰い  
 く兵亂へいらんの起おこる原因げんいんに種々しゆしゆ様々さまさまの情勢じやうせいより来きると雖いえども多おほく此こゝの洲しゆ彼かの  
 國くにと境さかいを區まち域いきを畫えるより起おこるもの其常そのじやうあれば其洲そのしゆ國くにの區畫くゐだも打破うちやぶり  
 彼此こゝ混こ一いつふ歸かへせしめば社會しゃかいの兵亂へいらん十じゆの八九はちゆうに斷たん朕わがが這回こゝの舉きは此洲こゝ國くに  
 の區畫くゐを破壞やぶらんが爲ためあり即ち社會しゃかいの兵亂へいらんを斷たつ大仁たいじん大義たいぎの美舉びきよあり



故ふ苟も兵亂を斷んと欲する者ハ甲を解て降參すべし御邊真ふ兵亂を斷んと欲する者なる若し果して然りとせば早く降るべし然るときハ國安く民治り共ハ太平を慶ぶべしと云ひければ支那の軍勢之狀聞て嗟嗟て己がハ道ハ適へる詞かなと感じたる孔明ハ之を聞て黙然としてもの云ハ微笑ふて居たりなれば近傍ハ扣へたる高祖心の内に思ひけるハ昔し季布我れを罵詈りて陣と破りしが拿破崙今是計を用ゐたり孔明如何ハ口を開くべきかとして色を失ふて屹と見れむ孔明車の上ハありて大ニ笑ハ聲を揚げて申けるハ拿破崙能く我ガ詞を聽け汝果しく社會の兵亂を斷んと目的を以て列國の區畫を破り宇内として一國となさしめんと欲せば何とて平穩ハ使者を遣はし列國ハ公使を會して計議せざるぞ事此ハ出でして彼ハ出で兵力を以て我が亞細亞ハ迫るハ其志問ハむし知るべし宇内を併呑んと欲するハあること泰鏡ハ掛けて視るが如し然るを揚言して

云ふ社會ハ兵亂の基を斷んと欲すと豈ハ亦飾言の甚だしきハあらむや門ハ牛首を掲げて馬肉を鬻ぐといハ其れ汝の謂ハあり汝ハ心虎狼ふして飽くことを知らむ南蠻を得て蜀を欲せ若し蜀と得ることハもあらば又隴を望んと必せり惡事ありとして惡業を働く者ハ其心怨すべき所ありと雖ども善事ありと公言ハつ、惡業を爲す者ハ其心の憎むべきこと切齒扼腕ハ堪へむ汝が罪天地の間ハ容れ難し四海の人悉く汝ガ肉を生かから啖ハんと欲す今幸ハ大漢の諸將此の孔明と招く是れ猶ハ天の支那ハ固より世界を棄ざるあり我れ諸將の推撰ハより元帥の職を奉じ順を以て逆を討たんとし義ハ依て師を出ま汝こそ是れ社會を亂す大罪人なり只身を潛め首と縮え衣服を求えて食を貪り慾ハ耽りて佛の小天地ハ蟄居るべきハ何とて我が大國の境を侵し軍の前ハ出で妄ハ舌を動らし社會の兵亂を斷んと申はる獅首の匹夫赤髯の若賊年猶ほ若く未だ壽命の鶴龜あるハあたら命失



ふを若賊早く退け我れ逆人を誅せんと呼りたり々れナホレオン之と聞て憤りたりとも怒りたりとも滿面朱を注ぎ烈火の如く母あり馬上に鼓動踏み鳴し出放題たりや暴言たり憎き彼奴が詞かオセロー阿塞羅の居らぬか馬塞那のあらぬか早く出て彼奴が口引き割き其舌抜けと云ふ下より應も敢て阿塞羅馬塞那の二人左右より顯出で最とも長やうなる大鎗拔ふて幕地暗し四輪車の前ふ飛込々れば吐嗟や孔明の一突オセローよあされんを状態なりたる母彼時遅し此時早し左右に備へたる劉備、曹操が陣中より關羽、許禰顯出で關羽の阿塞羅を横ざり許禰の馬塞那を遮り東西勇士の刀風鋭く優を劣らむ轄一上一下と戦ふたる程母兩軍の士卒あましくと二ヶ處の突戦母心を奪われける間ふ孔明の後陣よぞ退さなるナホレオン拿破崙の心頻に焦燥けきば二ヶ處の突戦未だ果てざるオセローよ夫も者共總掛よせよと令をる程オセロー歐軍數百萬一同オセロー一咆と嘯きて突入りたる阿塞羅、關羽等の一騎討り互に物別れとあ

り漢軍も亦之を向ひ戦ひ轄一砲撃鎗闘の後漢軍の襄八陣の中よ次第退き朱引の道を求めて去りたるオセロー歐軍の漢軍の退くを見て敵の色めく此の圖を外さむ追詰て漏さを討取と無二無三に突入りオセロー進まける程オセロー異様なる處よ入り衝けども打てども通り得を皆支那の勢母射立られ重々疊々として諸處よ門戸多かりければオセロー歐軍東西南北よ度を失ひける左なるさだに鐵砲の煙漠々濛々として殆んど咫尺を別たざるオセロー地理よ暗ければ躊躇しつありたるうち母此處彼處の煙の間よ漢兵の見えければ之を撃んとて近づけば苦と一聲叫びも敢て陷阱にぞ獲りける混亂の中あり陷阱の深し泣くも叫ぶも聞ゆればこそ數百萬の軍オセロー後より押う々へかけ来る母ど輾轉ころげ込み彌が上よ重りて號哭と泣き叫び上の人に押殺さきたるは最と隣れなることなりけり去きは漢軍の敢て勞せむして大勝を得ふければ手始めよしくと喜びつ、遂に歐軍の苦痛む狀を見物し居たりけるオセロー



固と階陣の限りありて歐軍の夥多しきの限りなれば暫しが程よして階陣の人よて填まり真の平地となり後軍の此の人士の平地を歩し遂に八門を壑粉に破壊りて門外に撃出たるは遠る彼方一當て漢軍の陣取し状見に々れば拿破崙又烈火の如くに憤怒り憤しとも惡き彼奴が舉動かお息繼を撃てよとの令母從ひ數百萬の軍勢大山の崩るゝが如き勢ひすて進みける此方の漢軍最早歐軍進むの勇氣なく必を退かんと思ひければ充分の備へもなれ所へ疾雷耳を掩ふは違あらぬ間お早や陣中一撃ち込れければ散々一撃ち惱まさされ始るは防戦のんと欲しけれども敵まること叫びすして敗走りける孔明のよもや拿破崙来るまじと思ひけるは拿破崙は英雄中れ英雄豪傑中の豪傑實一人中の獅子ふし進むを知りて退くを知らざる鬼將なれば又もや進み来るは驚き數十騎と走りける程一騎あり黒襖驪馬白布を以て面を包み大刀を抜た米り呼んで曰く孔明何くよあると孔明車を

下り馬に乗る其馬躍らせ傍にある河を亂し將お逃れんとする一騎又河を亂し罵りて曰く登子此よあるうと刀を擧げて之を撃つ孔明劍を抜くお暇あらず持つ所の羽扇を以て之を打ぎけるは扇折れ又撃たれけるよぞ這回ハ之を打ぐは暇なく終母其肩杖折られたる支那の從士之杖救のんと欲しけるに水駛くして近づくべからむ此時百虎の一人張飛一丈八尺の蛇矛を打振河中に颯と馬乗り入れ天地に響く雷聲を揚げ赤髯奴、我が元帥は無禮すなど云ひながら其騎を刺しけるは中らねば蛇矛を擧げて之を打ちしし馬首は中りければ馬驚き跳りて淵中に入りけるを以て孔明纒お免るることを得たり諸葛瞻、孔明の危きを聞た之を返し騎を呼んで戦ひを索め戦ふて之れは死にたる然るは兵事一賢き司馬懿父子三將ハ此の敗軍の中よありて善く其謀略を索し早くも衆を離れ司馬懿ハ歐軍の後に廻り司馬師ハ其左司馬昭ハ其右三方より俄然鼓を打ち鑼を鳴し無二無三よ



撃入ければ歐軍も亦思ひ掛けなきことと大に驚き且つ數時の戦闘は今の  
 戦ふの勇氣も消に失せ皆々散亂ける司馬一族も亦敢て長追せを退鐘を鳴  
 一程能く引き揚げける是日兩軍の死傷稍々當りけるは歐軍は陷陣に入  
 りて死せる者夥しければ少く多かりたる孔明は創を被り夜兵は救をま  
 退きたる後母歐軍の捕虜を獲けるは其者の言ふやう嚮の騎は乃ち拿嶺破  
 あり始め戦端を開さける折り亂軍の中少しく面部に創被りけるを味  
 方の者に見せば勇氣を落さんとく白布を以て面を裹さけるあり孔明之を  
 聞て曰く備ての嚮の騎は拿嶺破よな世は英雄豪傑も少あらねど我れ未  
 だ嘗て彼れが如く猛勇ある者を見を實は空前絶後古今獨歩の一大豪傑あ  
 る哉と暫く感歎の聲と得斷ざりける拿嶺破も亦陣中退き諸將は謂て曰  
 く朕戰場小往來すること數百回あれども未だ嘗て孔明の如く善く兵を用  
 うる者あるを見を今日彼れが布ける陣法の妙なる人か神の仙か朕之を知

らす真に卧龍なり又司馬懿父子三將の頓才早智なる敗軍の際に當りて奇  
 計妙策を出せし這も亦非凡の智將なりと暫く感歎の聲を得斷を互に稱賛  
 しぬるは真の英雄の所爲とこそ知らまける

第十七回

項羽拔山蓋世の勇を頼て夜撃を企つ  
 高祖、陳涉、項羽の計は從て大敗を取る

孔明の陣中に入り如何ふして拿嶺破の銳鋒を避け如何ある手術を以て之  
 を破るべきやと小首を傾けて思慮を凝しける所へ項羽來り孔明に乞ふて  
 曰く我れ曾て拿嶺破の猛勢は歐洲古今列國の武人は冠絶せりとか聞きぬ  
 るも今日初めて彼れが武勇を見るも真に蓋世の勇あるを知る然れども武  
 勇は猛き者彼れ一人ならむ斯く云ふはチト憚りなきも似たまども我れも  
 亦力山を抜き氣世を蓋ひし者おれを如何で彼れと武勇の程と比べんと思  
 ふ所より戰場を東西に奔り南北に走りて彼れを探しけれども終に見當ら



ざりし其甚だ遺憾とする所なり然るを彼れ却て元帥を驚かす奉りしとう  
 聞きぬ願くは次回の戦争より我れを先鋒となし彼れと雌雄を決せしめ給  
 へ孔明曰く亮を以て之を度るは拿破崙の文武を兼資を雄烈人より過ぎたり  
 萬世の傑士亞歷山大、愷撒が徒當り成吉思汗、帖木兒と並び驅て先を争ふ  
 べし然れども此等の英雄は皆氣勇にして自家敢て真の腕力即ち一騎討の  
 力勇ある所あらず然る所貴將の真ふ力山を抜き氣世を益ふの怪力ある  
 者なれば拿破崙なでう貴將の絶倫超群なるより及ぶべし拿破崙の貴將に於  
 たるは猶ほ嬰兒の烏獲母於けるがごとし豈に敢て當の敵手ならんや貴將  
 姑らく待たれよ我も亦宜しく思慮を盡して貴將を用うる所を考出さんと  
 て程能く項羽は退け又思慮を凝しける項羽の乞ひしことの速に聽されね  
 ば快々として樂しまむ其夜初更の頃軍師范増を喚んで曰く我れ今日元帥  
 より乞ふて次回の合戦に先鋒を望みけるに元帥左右なく聽さむ其説解我が

武勇を絶倫超群ありといふもの、其心或は我を以て拿破崙に敵するよ  
 足らむと思惟よやあらんむらんの元帥は斯く思惟る、其甚だ口惜きこと  
 なり我れ普ふて彼れ拿破崙と雌雄を決すべし就きては我も思ふよ今宵の  
 敵軍盡く戦の疲勞し人々吾れを忘れて熟睡し居らん今宵五更の頃竊やか  
 一夜撃をおさむ必む大に打勝ん其時我れ拿破崙を尋ねて之を擒よなさん  
 范増曰く拿破崙の尋常の敵ならず堅く孔明の令に従む輕々しく動き給ひ  
 ぞ項羽曰く范軍師も亦我れをして拿破崙の敵手ならむと思惟ふら好し好  
 し其義ならん人よ軍議をを要せむ我があさんややを見よと云ひつ、も  
 立上らんとしぬまは范増急し引き留め姑らく待ち給へと云ひけるを項羽  
 の范増其處退かずやと云ひつ、も袖振り放ちて外方へ出んとなしたる状  
 范増又もや引充留め姑らく憚る心を押鎮め給へ云ふことありとて其場よ  
 坐らしめて云へるやう貴將左まで思召すことならんば已を得む拙者も亦



從のんは夜撃の小勢なるを以て善しとせと雖ども名も負ふ歐軍の數百萬の夥多し其軍勢あるは貴將の手母從ふ士卒の僅母數十萬母過ぎ去む此の一手を以て夜撃をなさんこと或の下莊あらぬ者の虎の鼻を被ま欲するは似たるものあれば宜しく一二の將帥と示合せて夜撃するは若む其將帥の昔者同時に輩出しぬる好もあまむ高祖、陳渉の二將こそ然るべし項羽大は喜悅び然らば片時も早く二將の陣中へ使者を遣はして示合さん其使者の最とも秘密を要することよしあれば所詮誰れ彼も云のんより足勞ながら范軍師御邊に願ひんいで疾々を急し立つるより范増の然らば拙者行かんと聽て高祖の陣中へ至りて夜撃の義を申入れしに韓信傍母ありて其義の無用々々と押留たりしが范増の云々と論ひ高祖の又昔者同時に輩出しぬる好もあるに今情なく拒むも流石よて協力同心夜撃をなさんと應ける夫れより范増の陣中へ行き右の趣を述けるは既

高祖も同意しぬると聞たれば何の異義もなく同意ならざる斯れば三將各々其準備を整へ項羽の拿破崙の本陣へ撃入り高祖の亞歷山大愷撤等の先鋒に討込み陳渉の格朗究、究林登等後軍へ突入らんとす決し人の救を衝み馬の鑣子を被て竊やかふ打立たる頃しも冬の半ばなきを夜風寒く殆んど膚を劈くむありよしして手足凝ひ銃鎗を持ちたる心地せば他人の足もて歩くに異あらざりければ足の運びも遅かりける然るに月の間おく登らんとしぬるの體なれば項羽の頻りに心焦燥て急がしけるより自然と物音騒がしくありぬる程に遂に遠く歐軍の耳へ入りければ軍事も賢き拿破崙の此と思ひつさ備ての晝戰の疲勞も熟睡しぬらんことを謀り敵軍の夜撃を企てぬると覺えたりとて聽て小高き處へ登りて見れば折しも陰曆二十日餘りの半月皓々として東山の上へ顯出たるより漢軍夜撃の行軍明々地に見えける拿破崙莞爾として笑れ思ひしよ少なれ小勢の夜撃よ



な備ての孔明が令よ出づるふあらで小勇ある者の抜掛して高名なさんと  
 するよあらんか虎の鬚を披まく欲まるおとの可笑さよと直様其準備をな  
 一母けるとの項羽白露の夜露を冒して拿波崙水陣に至れを豈母圖んや  
 呆然々々々々僅の篝火を焚きたる儘一人の兵なく寂然として物淋しけれ  
 ば備ての敵軍夜撃を推して豫め其計ひをさせるよお退けと云ふ間もあら  
 せむ一聲の鐵砲耳邊に響くと均しく伏勢八方よりむらむらと起り引包て  
 一人も漏さを討取れとひし／＼取圍て撃ける母も人の不意を討んとて却  
 て己れの不意を撃れ漢軍の周章狼狽甚だしく上を下への混亂に云ふ  
 むかりなく誰れ戦んとするの氣力もなく四裂八落に敗走りける母ど項  
 羽の烈火お如くは憤怒り馬上に直立あがり大音を揚げ蓬き味方の舉動か  
 な赤髯奴の手勢何程のことやある返せ／＼と呼りけるも亂れかゝりし  
 習慣よて誰ありて耳よ入る者もなく皆蟻子雛を散せる像く濛と破きて逃

走まば項羽怒り不堪へを罵禁れども甲斐なありける然れども項羽が勇  
 氣の勃々として猶不禁を踏留まりて決戦する者纒よ二十八騎天の項羽を  
 亡ぶすか將た戦の罪うカ山を抜き氣世を益ふ絶世の豪傑も時利あらず驢  
 逝ざりたるが大蜀一聲一鞭當て敵軍の群中母荒れ入り獅子の憤怒る猛勢  
 みて撃く廻れば何かの以て堪るべき敵軍むら／＼とツと披靡たける一騎  
 あり項羽を追ひけまば項羽瞋目して之を叱りける母人馬俱に驚死數里よ  
 辟易さけるに甚と凄然とくと亦怖しき猛勢なりけり夫れより後項羽  
 餘人よ心を掛けて只管拿波崙を目的て東西に奔り南北に走りて之を求む  
 れども更よ遭遇ざりければ是れまでなりとて馬上に大音揚げ赤髯奴速か  
 らん者音よ聞け近くの寄りて目よ見よ今我れ時利あらむして死を  
 決す汝等他日戦ひ破れ一時の龜鑑よせよと呼り自ら劔を己れの首に押  
 當て強息と一息諸共ふ其首馬前よぞ落ちずける然れども轄一が問の敵軍



其首を拾ひよ来る者なかりける爰高祖の亞歷山大愷撒の陣に夜撃を  
 掛け、る敵の油断をいける所なれば思む乃儘ふ打勝ける一暫らくふし  
 て項羽の敗報達しける母ど歐軍の勢ひを得て漢軍の勢ひを失ひ主客の勢  
 ひ轉じけれむ是れより勝敗の状も亦一變一遂高祖の大敗とぞなり母け  
 る又格朗空、空林登等の後軍に夜撃しぬらんとせる陳涉の未だ敵陣に達  
 せざるも早や拿破崙の本陣の方より當りて火の手揚りけれむ借て既項  
 羽の撃入しかと路次を急ぎける程に忽ち後陣より報て曰く項羽大敗の様  
 子なりと陳涉之を聞て南無三寶仕損たるか然らば項羽を救へとて取て返  
 へしけれども最早其詮なく却て項羽が敗軍に引き立てられて共母敗走りけ  
 る

○第十八回

漢兵敗軍祈山に楯籠る  
 張巡奇計祈山を遁去る

却説項羽が夜撃を掛けしこと、鵝の嘴と岩齧ひ最初勝ちし高祖も未だ戦  
 ひざる陳涉も共一敗れて走りける窮寇に永く追ひむと支那の兵書にあ  
 るも拿破崙の氣荒なる何でう斯る手繰りことせんや彼れが猛勇獅子の如く  
 進むを知りて退くを知らず一たび目的もれぬまでも追ひ詰り撃取さ  
 れむ己まぬ精神是れぞ拿破崙の軍法よく拿破崙の拿破崙たる所以のもの  
 も亦全く茲ふあり斯れば項羽が夜撃を破りし勢ひは乘り益々進み愈々撃  
 て遂母孔明が本陣に撃入けるより流石の孔明も事茲に及びて詮術なく  
 東方を指して走りける拿破崙馬上母大音揚げて兵士に汝輩決して休息  
 せむること勿れ追ふ者疲るれば走る者亦勞れん何の其の猶豫ふことあり追  
 詰り塵殺しをるまで一ヶ月が二ヶ月假令北京母至るも休むな遁すも進  
 めや進め皆進めと呼はり令しつゝも親ら真先かけて追ふ程に總軍何  
 處までも適さじと追ふより去れば漢軍の日頃迅速と思ひし驍馬も何



どて這回ばかりの如牛ありけるが夢路を辿る心地をなりと小言つゝ逃げ  
 たりけるが雑兵樂武者の馬をけれむ終に足疲れて休るもあり或は追詰ら  
 れて撃る、もあり數百里が間屍の積て山をなし血の流きて川をせる其様  
 甚としく怖ろしかりける中母も孟賁夏育成荆王慶忌太史噉任鄙下  
 莊駒贖蘭相如烏獲籍蕃倉海樊噲呂布顏良文醜關羽張飛馬超黃忠  
 趙雲許褚典韋胡車兒龐德張郃尉遲恭秦叔寶王彥章岳飛李勇と始め  
 百虎の面々の各々獅子の怒をなし踏留まりて戦ひたるが大厦の將に覆ら  
 んとするや一木の能く支ふべきよあらむ大小の彈丸雨霰と飛び来る程お  
 殆んど面を向くべうもおく百虎の猛者も此時半ば討死なしにける斯れば  
 司馬穰苴吳起樂毅范增張良韓信陳平虞詡龐統姜維荀彧荀攸賈詡  
 王朗郭淮鄧艾鐘會李靖張巡李謹行王德を始めとし百智の人々も亦其  
 智を施す由なく皆々東を指して走りける程に終に祈山まで遁れたる

孔明は早く衆に先ちて逃げ延びて祈山に籠りける此處に昔者孔明が魏を  
 撃んとて六たびまで出たる處にして兵を用うる究竟の地なきを此處に籠  
 城なさんとて其準備をおしける程に追え遁れつたにける然るに司馬懿は  
 如何おしけん稍々衆に後れ只一騎馬を飛して林の中お走りけるを拿破崙  
 旗本の一將納之を見付て願ふ所の敵かな天の與へなりと喜び揉むもふく  
 追かけ已に交近くありけるとき司馬懿大木を遠りて走りけるは納綯を舉  
 げて撥と斬りける母司馬懿が運や強うりけん其鋒打避して大木お斬り川  
 け抜かんとする間司馬懿既に數丁逃げ延びける程に此處に右と左に分  
 る岐道ありけるにど頻智に富める司馬懿は是を追者を迷惑すに究竟なり  
 とて頭お戴く甲を引き断り左の路お投げ其儘故と其左の路に走りける母  
 程なく納追ひ乗り且見れば左右二岐に分る、道路ありけるふ其左の路に  
 甲の落ちあるは是れ即ち司馬懿が逃げたる路ありと云ふ標證なり然れど



佛里伯斯フレイリッソフの言は假造カクソウの事實ジツジの必カナラを皮相ウツクの台宜カフツを備ふと云ふことあれば  
 這コの落おせし甲カガの方カタは逃にげしと見ミせ其實カチ右ミの道ミチは走ハりしあらんと信シじ其道カ  
 へと追オふたりけれハの司馬懿シマヒが計ハカりしことノ能ツく其圍ツは當ツりしなれ斯カくて  
 司馬懿シマヒも漸シく祈山シヤンまで遁ノれけるは數週スウの間數百里リの道ミチを追オいれける程ハ  
 全軍皆總身宛然ソウジンゼンシヤン綿ワタの如ニくあり殆タんど他人タニは異コトあらざりける孔明衆キョウメイお謂イ  
 て曰イハく我ガれ永トシく戰場セウジョウを往イ来キし且カつ多シく古米コメの戰況セウキョウを聞クくも未イだ嘗カフて拿破ナハレ  
 崙オンの如ニく長追カガシをる者モノあるを見ミむ鬼オニか蛇ヘビう殆タんど鬼蛇混體オニヘビコンタイの人ヒトあらん恐オソる  
 べし怖オソるべし就ス死シて思オモふは日ヒならむして追手オウテの勢セキ此處ココは達ツせん程ハは早ハヤく  
 籠城防戰ロウジョウボウセンの策サクを決ケせざるべからむ因ユて又想オモふは張巡チャウジユン氏シは昔者ヒカシ睢陽スイヤウ  
 籠城ロウジョウし善タカく奇計キケイ以ヨリ運ウらして寄手キテを破ヤりしことシもあれむ當籠城オウロウジョウの策サクは  
 張巡チャウジユン氏シは任トクせてん但タし我ガも亦軍議オウジンギ相手オウテはなることシもあるべしと張巡チャウジユン  
 云々クニクニと解イけるが諸將シヨウジョウ敢カて聽キさねば已ヤしことを得エむ張巡チャウジユン 籠城防戰ロウジョウボウセンの主任シヤウジンと

ぞありよける歐軍イフロッツも亦猛虎マウあらぬ身ミしあまは晝夜シヤの別ワちなく數百里リの  
 間追マふたりたる程ハは終ハる全身ゼンシヤン綿ワタの如ニくあり追オふの擬勢ギセイも亦足引ソクヒキさ  
 摺スつ、も祈山シヤンの麓ノに至ツりたれども最早モト戰セふの氣力キリキもなく唯茫然タラシとして山  
 上眺カガめける斯カきは姑ニらく休戰キウセンの姿サマとどおりになる然シるふ爰コは一千八百八  
 十六年シヤウブジユウの頃米國メリカの工藝學者シツツキヤク支佛印氏シツツキヤクの發明カウられし空氣砲クウキポウ數千門スウセン拿破崙ナハレオンの  
 陣チンは到着タウチヤクなしたれむ是コトは於コて拿破崙砲擊ナハレオンポウキキの令レイを傳ツへけるに右數千門ウヘスウセンの  
 空氣砲クウキポウの筒口ツツグチ揃ソへ祈山シヤンの上ノ段築カる城郭シヤウカク目的トクて天テンも崩クれよ地チも碎クけよ城  
 郭シヤウカクの塵粉チンコは亦オかきと火蓋ヒカを鑢ツて控コと發ハちける音凄オト然シく宛然サマ萬雷マンライの轟ト  
 くは騁ウ騁ウきたり抑オも此コトの空氣砲クウキポウの其勢力キセキリキ頗ハる烈レツしく火藥砲ヒヤクポウは優ユること  
 數倍スウバイありければ壘壁レイヘキ震裂シヤンレツ死傷シヤウ相枕シヤウしける故ユに孔明張巡キョウメイチャウジユンも早築サカの  
 城郭シヤウカクふては逆サカも籠城ロウジョウあり難ガしと斷念タンネンし祈山シヤンと遁ノれて又北京ペキンまで走ハらんとぞ  
 決ケしける張巡チャウジユン曰イハく今遽イマは逃にんとて拿破崙ナハレオン豈カも容易ユウイく逃にがさんや因ユて茲ココふ



我れ一の策略有りとして數万の蕪人形を作り腹中詰めるは火薬を以てし  
 其上は武衣を被せ其夜三更の頃及ふ祈山より渭水ふか々東北方輪阻く  
 て寄手の居らざる處に散在せしめ蕪人形一人毎の手は焦火を結びつけ東  
 方小落行體に見し真の人の皆城中に返へりて後の様子を窺ふ寄手之を  
 見て備て漢軍籠城叶ひ難たは察し北京路へ落行者と覺えたり去采左  
 らば追詰て一人も漏さを撃取と令れ下より懦雄の若者等我れ後れじと先  
 さと争ひつゝも彼の炎々たる焦火目的母急ぎ行き近づき見れば少しも身  
 動ぐ氣色をければ疑ひ訝り怪まつゝ猶も近づき見れば豈に圖らんや呆  
 然々々々々真の人ふあらで蕪で作りし人形ありたれば暫し呆け母取ら  
 れてありけるが這の敵の偽計もやありなんうと思ひ付きければ斯くて  
 は長居は無益なるとして退々と云ふ間もなく彼の蕪人形に結びつ々たる焦  
 火燃盡して人形の蕪は火深りしと思ひしが忽ち雷擬ふ音と共に其火炎ハ

方に散亂けるえの此處彼處數萬個皆一面の火炎とあり焔煙天は漲り地は  
 溢れ歸るべきやうもなければ諸軍は驚愕仰天なり如何にせんと狼狽駭ぎ  
 峯ふ傳ひ彷徨ひ人馬上を下へと騷動しと猛火の中は苦しむ様は地獄の責  
 ゑ斯くやあらんと恐ろしあんど云ふ斗りおく焼死者負しれず僅母大將分  
 の者のと漸く辛ふじと遁れ出母ける嗚呼夢筆子の謀計否を張巡が策略昔  
 者睢陽に於て施こしとるもの母似て亦自ら其趣きを異母し真田幸村が上  
 田籠城の役に用ひたるものも稍々似たる所もあれど亦と同一のらざる  
 所ありて誠母怪有の奇計讀者をして感歎の聲を揚げしむるは足る然れど  
 も張巡が謀略豈に茲に盡んや此の謀略の如きを畢竟後の深謀をなさんが  
 爲め假施したる序幕も過ぎざるなり間談休題張巡は城櫓ありて親  
 しく其爲體を視て備て我が謀略能く其圖は當りしよあ去らば明夜の落  
 延んとて孔明と共に微笑しつゝ城櫓を下りける斯くて翌日の寄手前夜の



偽計は惱まされ一後よて勇氣撓みける所ありなれむ敢て砲撃をなさむ  
 して過ぎよけるふ此方の城兵去らば今宵は落行んとて故意と焦火燈して  
 總軍渭水の方ふろ落延々るとい寄手白川夜舟の熟睡盛り然きと固と大軍  
 のことふしあれば折しも目を覺して其為體を見し者少なるらねども噫又  
 城兵の打譚く再び昨夜の偽計をふせるよふ一たび欺死得たるよ味覺て二  
 たびまるの抑も愚かり何で又欺かる、者あらんや誰う行くべき寢身寐  
 れと云ひつゝも皆横卧けるこそ張巡が謀略の能く其圖に當りしやて之れ  
 が為め城兵の何の陣もなく安々と渭水の東舟ぞ落延ける翌日明て寄手祈  
 山の城郭を望むに數千萬の旌旗軍幟城櫓の上に寒風靡靡として空  
 中舟漂ひ且つ數多の軍兵ありたる状よて又鼓の音も聞えけるふろ寄手  
 に敢て怪しむ者なく皆々漢軍の依然として城中にあるものなりと信け  
 るにふ今日の又砲撃をなさんとしけるよ未だ拿破崙大帝の令なければ唯

だ發砲の準備をなし其令れ下るを待ちたるよ拿破崙總て城中の動靜を窺  
 む見るに數千萬の旌旗軍幟あり且つ數多の軍兵も見え又鼓の音も聞えて  
 如何にも依然とし籠城の勢ありける状なきど其鼓を聴くよ音鐸なく聲  
 なく其壘上望むに飛鳥多くして驚くや上氣氣あければ備くの敵詐りて  
 偶人を置き或は二三決死の兵を残して鼓を打せ其實全軍の落行たるふ相  
 違ふしと風船を揚げて窺はせたる果して人偶にして敢て防禦の兵な  
 く今方自刻したりと覺はしき二三の屍あるのみなりける是れも亦張巡が  
 計る所よして寄手を迷惑し以て一時も追撃を遅からしめんが為めの計策  
 なり拿破崙大に怒り毛唐人に欺かれたるかチエ一悔しきことしてけるよ  
 去れど悔て返らぬことなり去来左らば片時も早く追撃と令をる程に  
 後追蒐たるが此時既に十二時を過ぎぬま漢軍の騎兵の早や數十里の外  
 舟逃げ歩兵も亦二十里前後走りける畢竟其後の戦況甚ぞや并は亦次の





拿破崙飛  
 鳥と望て  
 敵城の空  
 を察し風  
 船を放つ





回は解分るを聴ねり

第十九回

拿破崙 歐洲の變報を聞いて引返す  
曹操、拿破崙の退軍を見て追撃す

却説漢軍の祈山の假城を遁出て只管北京を指して走りたる日數日を経て追兵近づきぬる程に如何のせん人々の面貌土色ありければ張飛衆に謂く曰く諸軍左を怯怖給ひ我れ長坂橋の偽勢を試みん程に衆兵は早く行給へ我れ自ら敵に當らんとて渭水の支流の川に架けたる長短橋と名づくる大橋の中央に馬を乗り端然として扣へたる面魂云々でも知るさ蓋世大丈夫とぞ見えよける坡堤の芒花霜も枯て招くともなき寒風は馬の邊を避て吹き威風正可も凛然とて歐軍先鋒亞歷山大漢軍を追蒐長短橋に近付て向ふを見れば張飛只一騎橋の上に馬を立て丈八の矛を横たへ甲を抜たて鞍に掛け頭の鬚倒し上りく獅子の怒毛の如く眼は逆裂て光り百練

の鏡は朱と洒ぎ怒れる鬼鬚左右に分きて惡鬼羅刹も是れ母の争でか及ぶべき又橋の東に一村繁茂りたる林有り塵ほこりを蹴立て馬煙を起て木蔭乃中より多くの兵往來しける状ありけるふが亞歷山大怪んで敢て進まを跡に繼ぎて愷撒、繡標、查爾曼、路易十四世、羅肥以的等先手の軍勢悉く来り集ひ此れ體を望み見て皆心に疑ひとなし張飛が目を怒らして只一騎立ちるは必を孔明が深き計あらん轄らく進むこと勿れとて早馬打て拿破崙の本陣に注進しけるふで拿破崙之を聞て火急に馳来り其體を窺ひ見るよ張飛は拿破崙の来りしを見て大の眼を怒らして大音揚げ我れは乃ち燕人張飛なり誰か来て勝負を決せんと呼べる其聲雷の鳴が如く凄然とけれども拿破崙は曹操の如く疑心なく又敢て關羽が豫言もなけれを拿破崙天地も響く大音揚げ一人の敵に何の躊躇ふことかある謀計あらむあれ彼奴壘粉にふせと呼りけるよと數百萬の軍勢一同は咄と嘯さく撃て蒐りけれ